

市の誕生と都市化

生業経済の定期市から市場経済の市へ

The Birth of Markets and Urbanization : From Periodic Markets
Based on a Peasant Economy to Markets Based on a Market Economy

西谷 大

NISHITANI Masaru

はじめに

①問題の所在

②那発の6日ごとの市

③金平の常設市と6日ごとの市

④考察

まとめ—市の誕生と都市化—

【論文要旨】

本稿は中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州の金平県で抽出できた、者米谷グループと金平グループの2つの市グループについての特徴を明らかにすることを目的としている。これまで金平県でたつ6日ごとの市の考察から、市を成立させる条件として「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」、「徒歩移動における限界性」、「市ネットワークの存在と商人の介在」、「商品作物の処理機能」、「交易品としての食料と食の楽しみ」、「店舗数（市の規模）と来客数の相関」の6つ条件を提示した。さらに市という場としての特質として「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」や、「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」、「市のもつ遊びの楽しみ」などにも目を向ける必要があると論じてきた。

ところが市を者米谷グループと金平グループという2つの地域に分けて考察してみると、者米谷グループの市システムは、生業経済の色合いが濃厚で、地域住民がある程度は市を馴化する、あるいは主体的に利用することが可能であるという性格をもつ。それに対して、金平グループの市システムは、町・都市の論理や移動商人が物資の移動を握り、地域の農民が主体的に市を活用する論理が通用しなくなっている。地域経済の動態を解明するために交易という地域ネットワークに焦点をあてた場合、市が誕生し市システムが発達していくなかで、定期市システムは、ある段階までは地域社会の生業経済を安定的に維持する方向に働き、農民たちの主体的な生業戦略を促進させる。いわば「生業経済に埋め込まれた定期市」といった段階があるのではないかと考えられる。一方、各地域の市システムがネットワーク化されていく段階で、市の性格は「市場経済を促進する定期市」へと変化していくのではないかと推測される。

はじめに

中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州（以下紅河州）に属する金平苗族瑶族傣族自治州（以下金平県）と緑春県では、街道沿いに6日ごとの市がたつ。筆者は先に著した3つの論考において、金平県の定期市の歴史とそのシステムを明らかにしつつ、地域社会における定期市の必要性和影響について論じた〔西谷2005a・b, 2006b〕。また複数の市について分析と比較をおこないつつ、市が成立する上で普遍的に必要な条件と特質を提示した。本稿では人口およそ3万人の町と国境の町にたつ2つの市をとりあげ、定期市が常設の市場へと変容していく過程とその要因を探りつつ、市システムのもつ特質について探りたい。

①……………問題の所在

筆者がこれまでおこなってきた市研究の成果をふまえながら、市を研究する上で問題になる点を指摘したい。中国における市の研究は戦前にまでさかのぼる。市は経済活動が集約された場所という視点から中国経済史の加藤繁が調査をおこなっているが、それだけではなく中国農業史の天野元之助、東洋史の増井経夫などが市の研究をおこなっている。それら研究は伝統中国において、市は地域の住民の日常生活に重要な機能を果たしているという視点から出発している。そして彼らの研究から、中国の市は数箇村ごとにもたれている日雇い市から県全体に及ぶ家畜市まで、大小さまざまな中心をもつ市場圏が重なりあいながら分布していたことが明らかにされていった。さらに中国の市は、地域の住民が市を利用して物資を売買することに対して極めて開放的であり、国家の権力やある特定の団体が市場に介入していないことが指摘された。

スキナーは四川省における市調査から、日本人研究者による市研究を発展させ、市が規模によって階層性をもちつつ空間的に分布していると主張した。そして市の立地と分布を、距離と人口密度と交通手段などから説明しようとする、歴史地理学の中心理論⁽²⁾によって解き明かそうとした。さらに中国農村の特質は「中国の農民は閉鎖的な世界に住んでいたといわれるが、その世界とは村落ではなく標準市場社会のことである。農民の実際の社会範囲は、村の狭い境界線よりむしろ標準市場圏の境界線によって規定されている」と、伝統中国の農民の生活が市場圏によって規定されていると主張した⁽³⁾⁽⁴⁾。

しかしアジア経済史を専門とする黒田明伸によって、スキナーの説には反論が加えられている〔黒田2003〕。黒田によると財の集散の動きに着目すると、定期市はあくまで流通のさまざまな節のどこかの1つにしかすぎず、市場圏といった経済的な空間は存在しないという。そして伝統中国の市は、戦前の日本人研究者が指摘したように、行政機能の集権性の外観とは裏腹に、国家の権力とか閉鎖的の団体によっても規制されず個々の経営者たちによって自由に形成されていたと説明する。

筆者は、者米谷でたつ者米、頂青、三棵樹、螞蟻塘、平河の5つ市を分析しつつ市は村民と小商人と商品の動きというミクロな視点でみると、物資の動きを円滑にするためのシステムであり、スキナーが主張するように市グループがまとまりをもった1つの社会的空間を形成しているとはいえ

ないと述べた [西谷 2005a・b, 2006b]。また、現在金平県でおこなわれている6日ごとの市のシステムは物資の流通と売買にとっては効率的なシステムに見えるが、反対に地域社会の村民側にたてば、市によって余剰生産物の処理機能と生活必需品の購入量に限界性があることも指摘した。

そして市を成立させる条件として「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」、「徒歩移動における限界性」、「市ネットワークの存在と商人の介在」、「商品作物の処理機能」、「交易品としての食料と食の楽しみ」、「店舗数（市の規模）と来客数の相関」の6つ条件を提示した。

また市の場としての特質として「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」や、「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」、「市のもつ遊びの楽しみ」などにも目を向ける必要があると論じた。

本稿でとりあげる那発と金平の市は、これまで対象としてきた者米谷の市とは異なる性質をもつ。⁽⁵⁾ 金平県とヴェトナムとの国境はおよそ502kmに及ぶが、清時代からヴェトナム側との交易の拠点として河川沿いや、または比較的峠の低い地点が選ばれてきた。那発は、ヴェトナムとの国境である河川沿いにたつ市である。

一方金平は、人口がおよそ3万人を数える。者米谷で最も大きな町は者米であるが、それでも人口はおよそ1000人を数えるにしかすぎない。金平は人口が多だけでなく、百貨店、スーパー、ホテル、銀行などがあり、金平県の人民政府、郵便局、高校などの官公庁も集中している。また市内には日常的に生鮮食料品が購入できる3ヶ所の常設市場をもつ。ところが金平は、日常的な消費生活には全く不便がないにもかかわらず6日ごとの市がたつ。

金平で定期市がたつ必要性はどこにあるのか。また国境の町でたつ市にはどのような特徴があるのか。この2つの市とこれまで者米谷でおこなってきた市の分析結果とを比較しながら、市のもつシステムのより深い理解を試みたい。さらに小規模の定期市が常設市へと変化する過程をとらえてみたい。

人類の歴史上における交易活動の出現は、生業や生態学的な環境の相違によって生産物などが異なる集団間で、物資の交換がおこなわれたことが契機になることがしばしば認められる。これまでの研究で、言語、習慣、生産物などが異なる9つの民族が1つの谷に居住する者米谷地域でも、各民族の生業戦略の差異と定期市とは密接に関係していると予想された [西谷 2005c, 2006a・c]。その関係性とは、定期市の存在が民族による生業戦略の差異をむしろ拡大させる方向に働くという傾向のことをさす。定期市こそが均質な農村や民族の生業に差異と分化を引き起こしているのではないかと推測したのである。

金平県における市の研究は、この地域の6日ごとの市の実態を記録に残すという意義だけでなく、人類の歴史上で市が誕生する条件や集団間の交易によって市が誕生し常設店へと変容していく上での普遍的なモデルを構築できるのではないかと考えられる。

②……………那発の6日ごとの市

1 那発の町と歴史

那発の所在する金平県は、雲南省の省都である昆明の南およそ250kmに位置し(図1)、南側の県境はヴェトナム国境と接している。金平県の面積は、およそ3686平方kmであるが、そのうち99.78%が山地で、平地面積はおよそ10.14平方kmと、わずか0.22%にしかすぎない。村や町は、河谷沿いのわずかな平坦地か、または尾根上の比較的傾斜の緩やかな土地に作られる。金平県にはタイ、ハニ、ヤオ、クーツォン、アールー、ミャオ、ジョワン、漢の8つの民族とハーベイ人、マン人の2つの集団が居住する⁽⁶⁾(図2)。

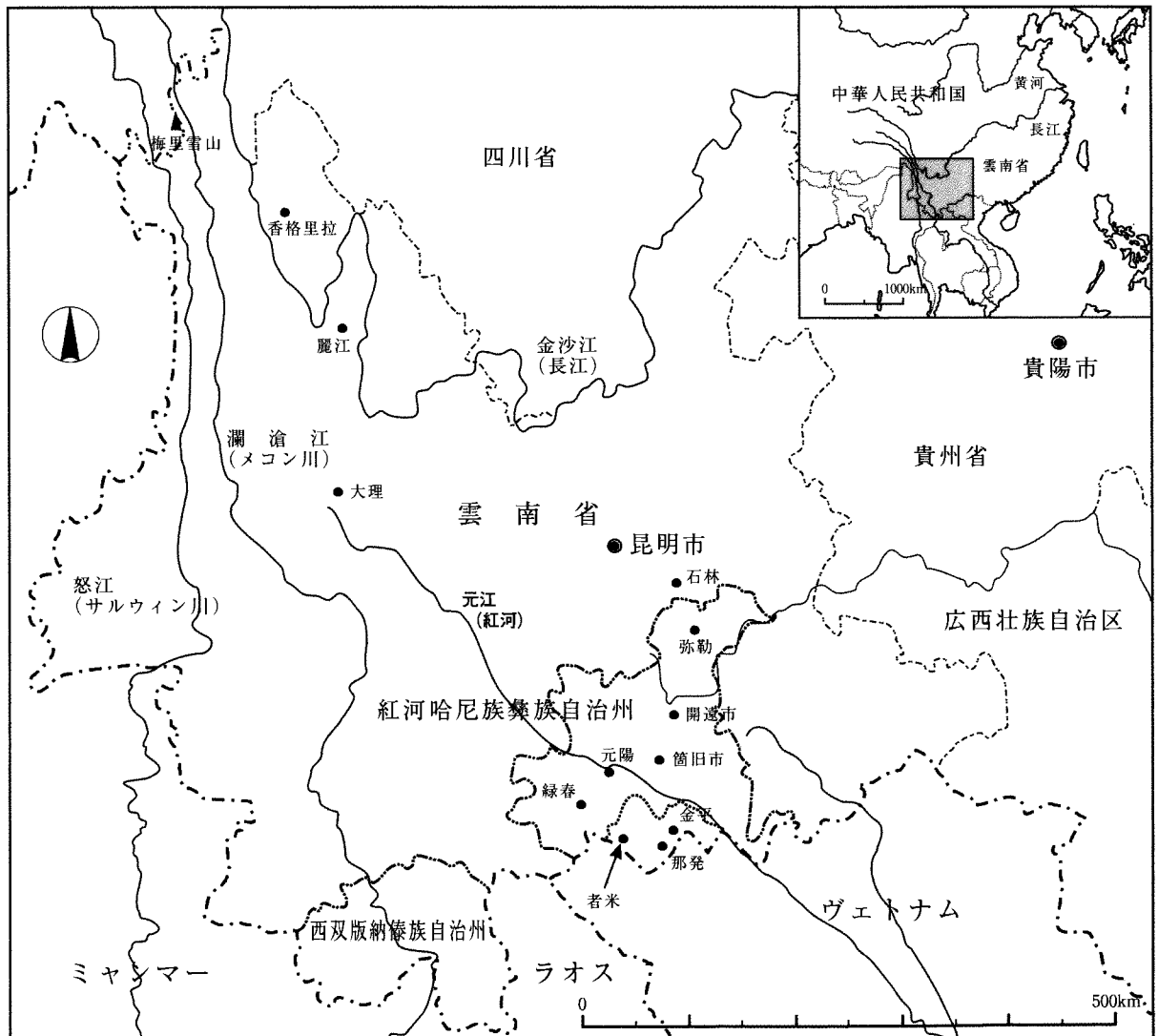


図1 調査地

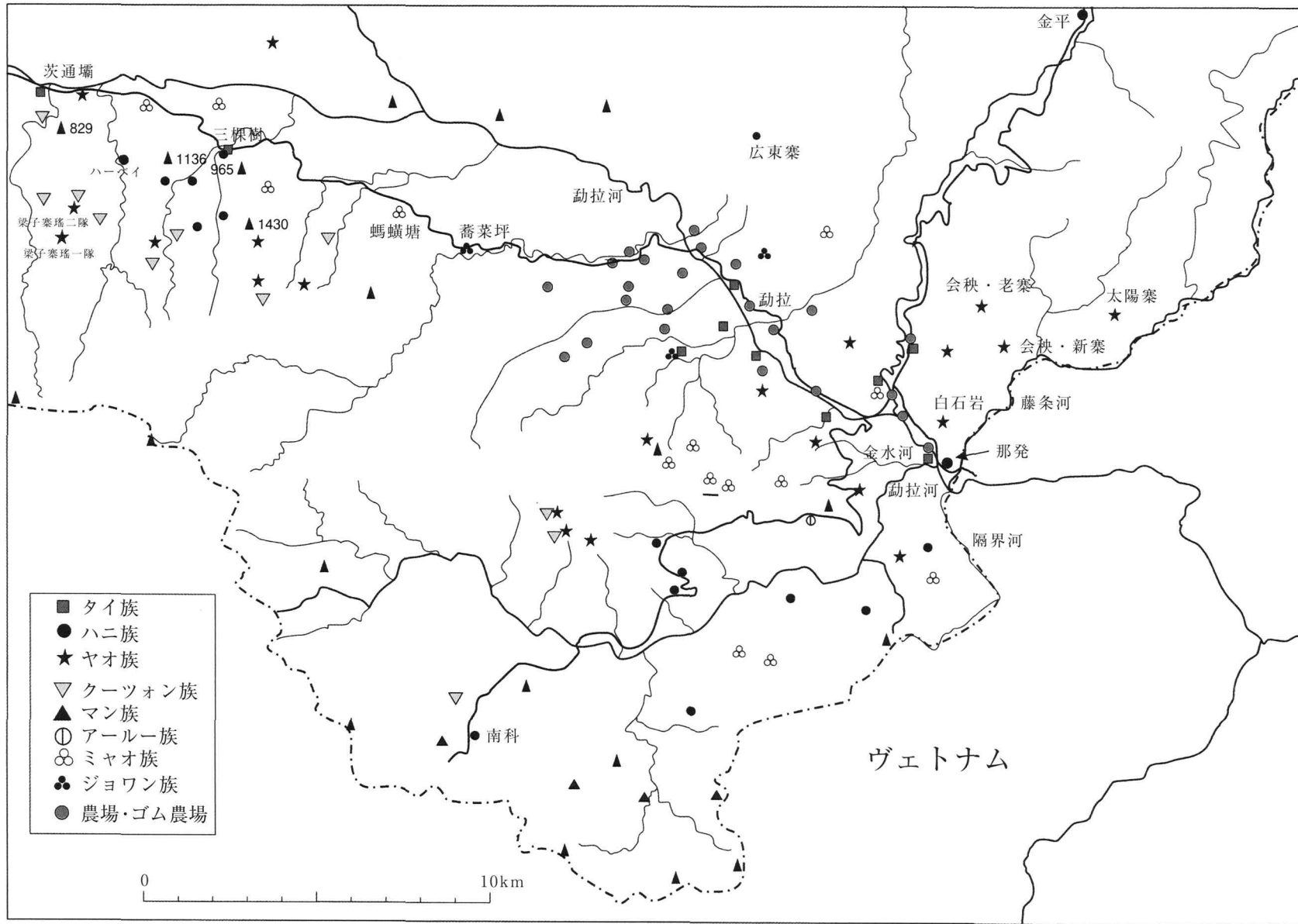


図2 調査地周辺の民族分布

海拔300～500mに居住するタイ族は、河川沿いの平地を水田にして二期作をおこない水田稲作を生業の中心にしてきたが、近年、生業が換金作物であるバナナやパラゴムへと特化しつつある。ミャオ、ハニ、アールー、ヤオ、クーツォン族は、海拔800～1300mの尾根上や山の斜面に居住し、棚田による水田稲作をおこないつつ斜面畑で野菜、キャッサバ、トウモロコシ、レモングラスを栽培している。かつては焼畑をおこないつつ狩猟採集もおこなっていたが、現在は政府の政策によって禁止されている。

このように調査地域は河谷平野と、その周囲に広がる山地からなる複雑な地形を特徴としている。それにあわせて気候も多様である。それだけでなく居住する民族数も多く、1つの尾根にある村々が異なった民族で構成されることがしばしばあるという特徴をもっている。

那発は、金河鎮（以下、金平⁽⁷⁾）から南におよそ16kmに位置する。町の西側には勐拉河が北西から南西に、東側には藤条河が北西から南西に流れ、2つの河は町の南側で合流した後東に流れを変える。この2つの河の合流地点には、もう一本の隔界河が南から流れ込む。隔界河から藤条河が、中国とヴェトナムの国境になる。つまり那発は、3つの河川が合流する地点に立地している。

この地域の国境が正式に確定するのは、光緒21年（1895）である。清朝とヴェトナムの植民地政府との間で交渉がもたれ、ほぼ現在の国境が確定された。那発には清朝から民国時代にかけて、中国側から管理をおこなうための「汛」を設置し役人と兵が派遣されていた。しかし解放前までは、この地域に居住するタイ、ヤオ、ハニ、クーツォン、ミャオ族やマン人にとって国境という概念はなかった。

「那発」の「那」の発音である「ナー」はタイ語で田を「発」（ファー）は天を意味し、いわゆる天水田をさす。那発在住の85歳のタイ族のA老人によると、那発は20世紀のはじめごろまでは荒地であった。A老人の父親が、およそ80年前にヴェトナムから移住し、水田を開拓したのが那発の町のはじまりだという。中華人民共和国が成立して以降、中国とヴェトナムの両国政府は、国境確定のための『關於両国辺境少額貿易議定書』に調印し、1954年に那発にイミグレーション事務所を設け市を開催することに決定した⁽⁸⁾。しかし当時は市に集まる人数も少なく、勐拉で開催される6日ごとの市を「大街」（大きな市）と、那発を「小街」と呼んでいた。

両国の国境は河川という地勢的な条件によって決定されたものであり、民族の分布などによって確定されたものではなかった。そのため1950年代から60年代にかけては、地域住民の多くは中国側とヴェトナム側の両方に耕作地をもっていた。また通婚圏も国境を挟んで広がっていたため、日常的な国境の往来は黙認されていた。しかし1978年に那発の前面に広がる砂州の領有を巡って両国間に紛争がおり、中越間の交易は一時途絶する。1984年に両国の国境地帯における交易が再開されることになり⁽⁹⁾、那発においては1990年10月に、中越間のイミグレーションの再開と6日ごとの市が復活した。

2 店の種類と分布

那発の人口はおよそ500人である。町はずれに人民解放軍が駐屯しているのだが、その人数は含まれていない⁽¹⁰⁾。町住みの人びとの職業は派出所、税関の職員、小学校の教員などの公務員と、ホテル、食堂、商店などを経営する商人であり、農民が居住していないことに特徴がある。

那発の町は、北東から南西にかけて南北に長い楕円状の道路と、その中央を十字に道が走る（図3）。町の道路を西側から「西通」、「南北中央通」、「東通」、そして町の中央を北西から南東に走る通りを「東西中央通」と仮に名づけておく。南北中央通（長さおよそ400m）と東通、西通が交わる地点から、北東におよそ200m離れた場所に中国側のイミグレーション（中国語で「海関」）がある。その東側の藤条河に橋がかかり（長さおよそ100m）、対岸がヴェトナムになる（写真1）。

現在、中国側では新しくイミグレーションの建物を建設中である（2006年2月時点）。一方のヴェトナム側では、従来イミグレーションは存在したが、町そのものは存在せず市も開催されていなかった。ところが現在は、町そのものを新しく建設しており、それに伴ってヴェトナム内部へと通じる道路工事がおこなわれている。

2005年以前の6日ごとの市は東通を中心に開催され、雑貨・生活用品を扱う露店と、野菜などの生鮮食料品を扱う露店が混在して出店していた（写真2）。しかし出店する露店が増加するにつれて、混雑があまりに激しくなったために、町の南西に新しく「農貿市場」が建設された。現在は、東通と農貿市場の2ヶ所で6日ごとの市が開催され、東通では雑貨や生活用品などの商品を売る露店が、農貿市場では生鮮食料を扱う露店が出店し、商品の 카테고리によって露店が分離されている。

那発の市の特徴は中国側の村人だけでなく、国境を越えてヴェトナム側からも人びとがやってきて市で商品の売買をすることである（写真3）。ヴェトナム側から中国に入る場合は、藤条河にかかる橋を渡り中国側のイミグレーションで、ヴェトナムの身分証明書を提示し、0.3元（約5円）支払って許可証をもらう（写真4）。この許可証によって移動できる範囲は、原則として那発の町内に限定されており、町の外にでていくことは許可されていない。車の場合は4トン以上が4元、2トン～4トンまでが2元（約30円）、船で河を渡った場合は、1元（約15円）である。イミグレーションが開いている時間帯は、8時から18時までである。

那発の6日ごとの市では、市日以外の日でも営業している常設店と、市日にだけ東通と農貿市場に露店をだす2種類に分類することができる。常設店は、市が開催される東通の両側に並んでいる（図4）。一方、市日にたつ露店は東通の300mの区間に、雑貨、衣料、靴、タバコ、薬などを扱う露店が並ぶ（図4）。扱う商品ごとに露店をみると、通の北と南の入口付近では、衣料を扱う露店がグループを作る（No.195～198, 206, 207, 251～259, 260）（写真5）。また薬（No.218～220）、マントウや米線などの飲食店（No.240, 242）、雑貨を扱う露店も混在して出店するのではなく、東通のなかで一定の場所に集中する。このように同じカテゴリーの商品を扱う露店が、グループを作りながら分布していることがわかる。

町の南西に新しく建設された農貿市場は、露天広場に接してトタン葺きの屋根で覆われた場所（およそ15×50m）が併設されている（図5）。ここには高さおよそ1m、幅およそ1.2m、長さおよそ40mのコンクリート製の台が3基設置されており、市日には肉を売る場所になる（写真6）。肉売り場の北側の広場（およそ45×50m）が、青果と家畜の売り場である（写真7）。

また2005年以前の露店の分布は、東通の北側の入口付近から、衣料→青果→肉→雑貨→衣料という順になっており、露店は商品のカテゴリーによってグループを作りながら分布している。

2005年8月9日における市の露店の出店数は311店あり、平日も営業している常設店は31店で

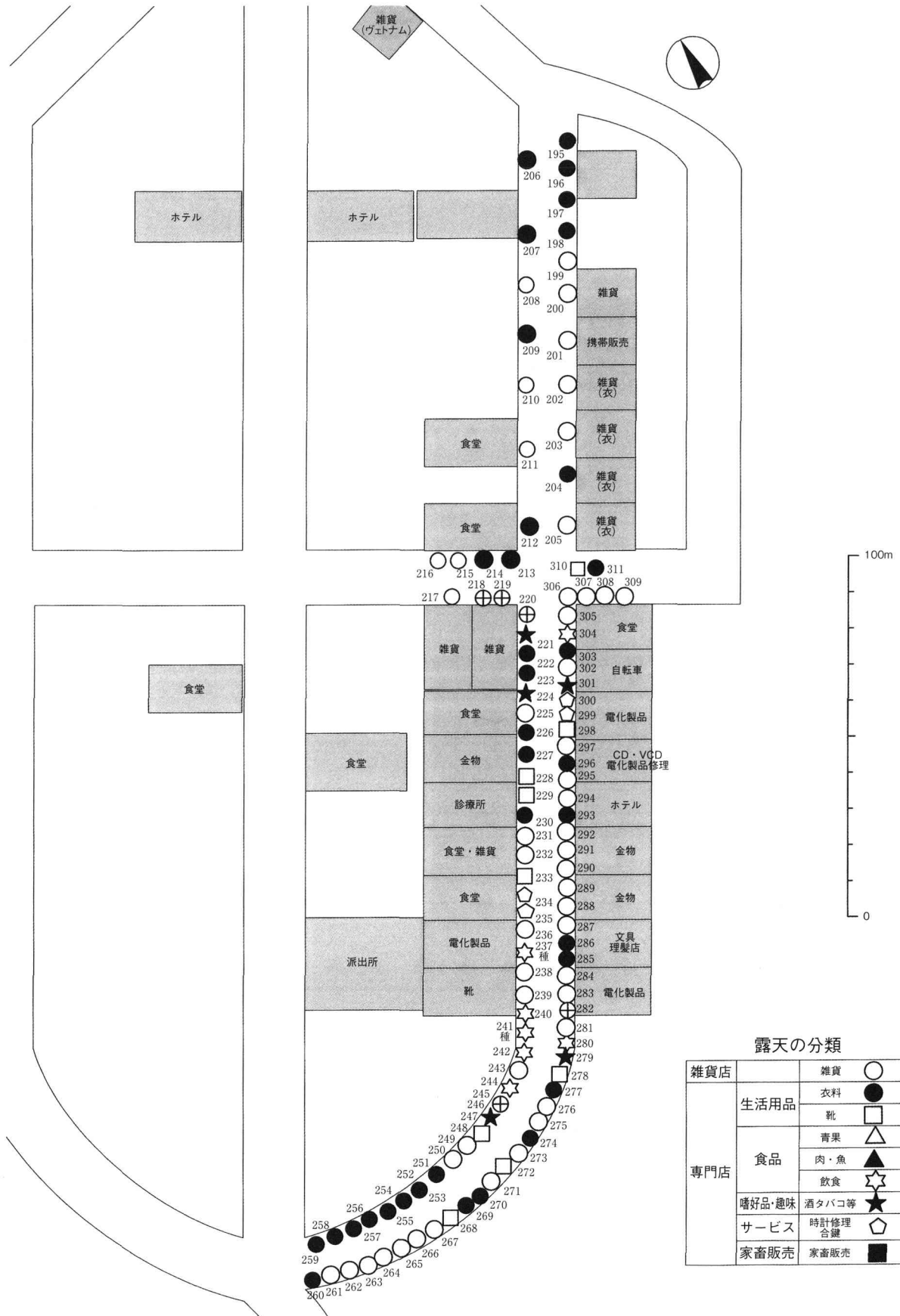
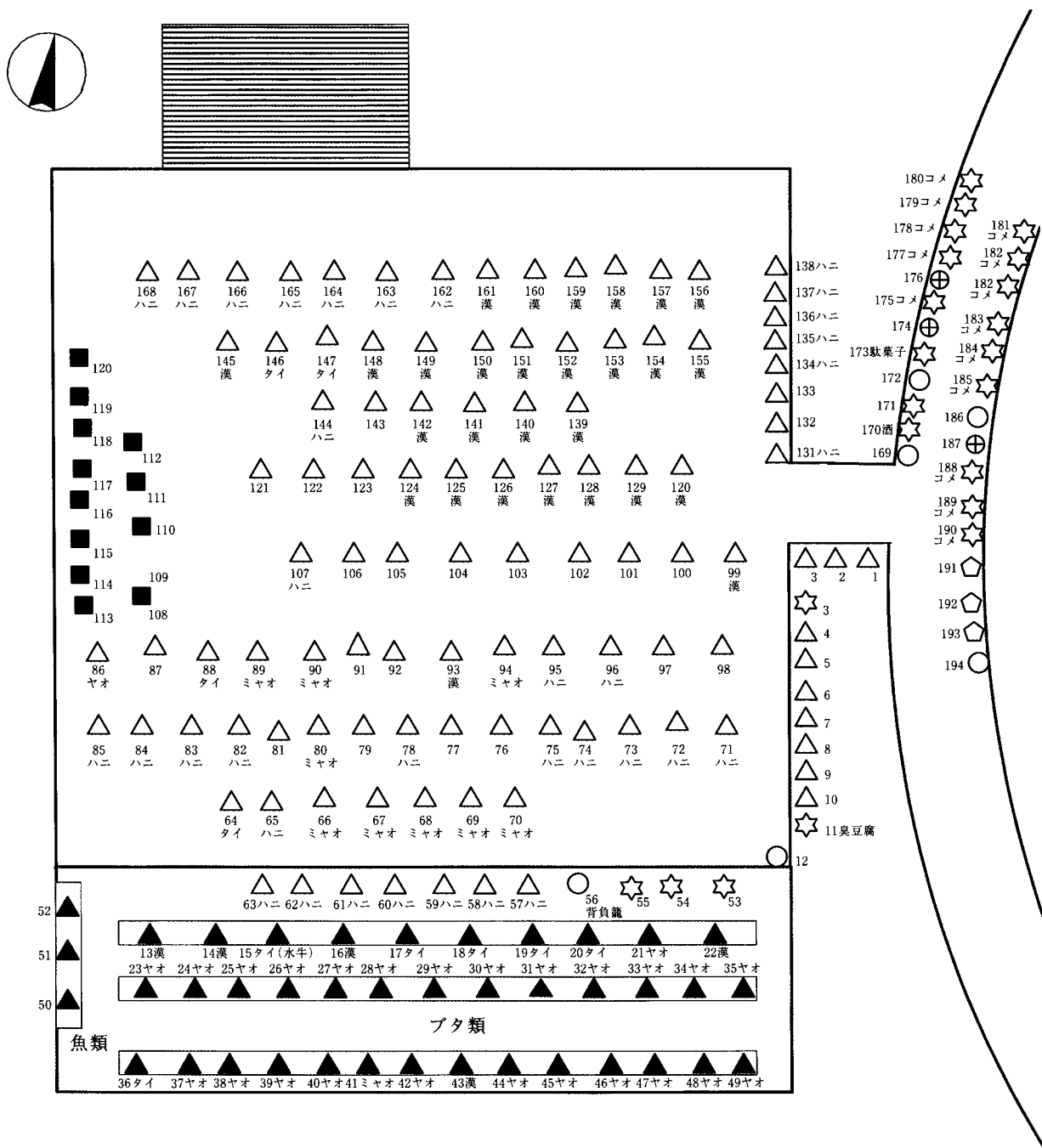


図4 那笈の東通の常設店と露店



露店の分類

雑貨店	雑貨	○	
	衣料	●	
生活用品	靴	□	
	青果	△	
専門店	食品	肉・魚	▲
		飲食	☆
	嗜好品・趣味	酒タバコ等	★
サービス	時計修理 合鍵	◇	
家畜販売	家畜販売	■	

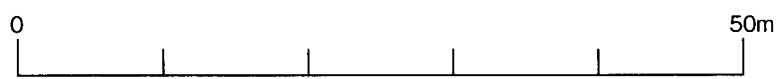


図5 那覇の農賃市場

表1 各市の常設店

分類		金平	者米	三棵樹	頂青	蟻蟻塘	平河	那発
日用品	日用品中心の雑貨	39 11.1%	13 15.5%				12	3
	衣料中心の雑貨		20 23.8%				2	4
	服	61 17.3%						
	飼料	7 2.0%	4 4.8%					
	金物	5 1.4%	4 4.8%					3
	電化製品	18 5.1%	2 2.4%					5
	農業資材		1 1.2%					
	靴	16 4.5%	2 2.4%				1	1
	家具	1 0.3%	1 1.2%					
	スレート(屋根材)・セメント	2 0.6%	1 1.2%					
	自動車部品	1 0.3%			1			1
	自転車							1
	携帯電話	14 4.0%						
	化粧品	7 2.0%						
	台所・食器	6 1.7%						
	寝具	5 1.4%						
	建築資材	5 1.4%						
	カーテン	5 1.4%						
	毛糸	3 0.9%						
	文房具	2 0.6%						
	鞆	2 0.6%						
	ガラス	2 0.6%						
	ミャオ服専門店	1 0.3%						
	古着	1 0.3%						
	帽子	1 0.3%						
	メガネ	1 0.3%						
	ベッド	1 0.3%						
	ベビー用品	1 0.3%						
	工具	1 0.3%						
	パソコン	1 0.3%						
	電器部品	1 0.3%						
	時計	1 0.3%						
箒	1 0.3%							
ガソリンスタンド	1 0.3%							
DVD・CD・VCD	6 1.7%							
アクセサリ	4 1.1%							
おもちゃ	2 0.6%							
鑑賞用魚	1 0.3%							
鳥籠・楽器	1 0.3%							
ぬいぐるみ	1 0.3%							
タバコ(刻み)	1 0.3%							
食品中心の雑貨	16 4.5%	8 9.5%					2	
酒	1 0.3%	1 1.2%		1				
駄菓子	3 0.9%			1				
牛乳	2 0.6%							
烤鴨	1 0.3%							
果実	1 0.3%							
パン・菓子	2 0.6%							
食堂	36 10.2%	15 17.9%	6	7	9	5	7	
レストラン	3 0.9%							
喫茶店	1 0.3%							
サービス	カラオケ		1 1.2%					
	写真屋	1 0.3%	1 1.2%					
	遊技場			1			1	
	郵便局	1 0.3%	1 1.2%					
	銀行	4 1.1%	1 1.2%					
	ハイブリッド販売所		1 1.2%					
	ゲーセン	7 2.0%						
	美容院	5 1.4%						
	ホテル・招待所	4 1.1%						3
	床屋	4 1.1%						
	看板(広告)	3 0.9%						
	書店	2 0.6%						
	スーパー	1 0.3%						
	百貨店	1 0.3%						
	洋服の仕立屋	1 0.3%						
	クリーニング	1 0.3%						
	バスチケット売り場	1 0.3%						
	水道工事	1 0.3%						
	電器製品修理	1 0.3%						
	印刷所	1 0.3%						
仲買	レモンガラス仲買		1 1.2%					
	キョッサバ仲買		1 1.2%			1		
	綿仲買		1 1.2%					
	草菓仲買		1 1.2%					
病院・歯医者	総合病院	3 0.9%						
	病院(衛生院, 予防中心)	2 0.6%	1 1.2%					
薬	歯医者	2 0.6%						1
	薬	11 3.1%	2 2.4%				1	
	計	352	84	7	10	10	22	31

表2 各市の露店

分類		金平		那発		者米		三標樹		頂青		螞蟻塘		平河	
雑貨店	雑貨	21	5.8%	42	13.5%	66	22.5%	25	17.1%	33	34.7%	27	28.7%	47	20.5%
	衣料	18	5.0%	39	12.5%	31	10.6%	19	13.0%	11	11.6%	17	18.1%	22	9.6%
	靴	6	1.7%	10	3.2%	7	2.4%	10	6.8%	-	-	5	5.3%	3	1.3%
	洗面用具	1	0.3%	-	-	3	1.0%	-	-	-	-	-	-	-	-
	台所	-	-	1	0.3%	3	1.0%	-	-	-	-	-	-	-	-
	ライター	1	0.3%	1	0.3%	2	0.7%	-	-	-	-	-	-	1	0.4%
	金物	2	0.6%	4	1.3%	2	0.7%	2	1.4%	-	-	2	2.1%	1	0.4%
	布	7	1.9%	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-
	文房具	-	-	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	1	0.4%
	おもちゃ	-	-	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-
	ビニールテープ・ブルクロス	-	-	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-
	帽子	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	電気部品	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	籠	22	6.1%	2	0.6%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	メガネ	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	健康器具	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	時計	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	寝具	1	0.3%	-	-	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-
専門店	野菜	109	30.3%	93	29.9%	63	21.5%	34	23.3%	24	25.3%	14	14.9%	64	27.9%
	果物	5	1.4%	18	5.8%	24	8.2%	8	5.5%	6	6.3%	2	2.1%	-	-
	肉屋	18	5.0%	37	11.9%	15	5.1%	8	5.5%	7	7.4%	5	5.3%	8	3.5%
	飲食	24	6.7%	6	1.9%	20	6.8%	9	6.2%	1	1.1%	6	6.4%	27	11.8%
	食材	69	19.2%	16	5.1%	9	3.1%	4	2.7%	4	4.2%	2	2.1%	9	3.9%
	魚屋	-	-	3	1.0%	3	1.0%	2	1.4%	1	1.1%	1	1.1%	1	0.4%
	駄菓子	3	0.8%	3	1.0%	-	-	6	4.1%	-	-	1	1.1%	3	1.3%
	タバコ	7	1.9%	5	1.6%	17	5.8%	6	4.1%	2	2.1%	5	5.3%	19	8.3%
	酒店	-	-	2	0.6%	6	2.0%	3	2.1%	2	2.1%	4	4.3%	3	1.3%
	音楽テープ、CD、VCD	3	0.8%	3	1.0%	4	1.4%	4	2.7%	1	1.1%	2	2.1%	1	0.4%
	医療品	29	8.1%	7	2.3%	2	0.7%	-	-	-	-	-	-	-	-
	合鍵	-	-	1	0.3%	1	0.3%	-	-	-	-	-	-	-	-
	時計修理	-	-	3	1.0%	4	1.4%	4	2.7%	-	-	1	1.1%	1	0.4%
	歯医者	-	-	-	-	-	-	1	0.7%	-	-	-	-	1	0.4%
	賭博	-	-	-	-	-	-	1	0.7%	-	-	-	-	-	-
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.9%
	家畜販売	11	3.1%	13	4.2%	6	2.0%	-	-	3	3.2%	-	-	15	6.6%
	計	360	100.0%	311	100.0%	293	100.0%	146	100.0%	95	100.0%	94	100.0%	229	100.0%

あった。このうち常設店の内訳は、食堂（7店）、雑貨店（9店）、電化製品（5店）、金物（3店）、ホテル（3店）、酒（2店）、診療所（1）、家具・自転車・携帯電話（各1店）である（表1）。露店の分類は、者米の市でおこなった方法を基準にした〔西谷 2005b〕⁽¹⁾。露店を特定のカテゴリの商品の販売や、サービスをおこなう専門店と雑貨店で分類すると、専門店は269店（86.5%）、雑貨店は42店（13.5%）を占める（表2）。

専門店では食品に関する露店が176店と最も多く、全体の56.6%を占める。以下、生活用品（59店、19.0%）、家畜販売（13店、4.2%）、嗜好品・趣味（10店、3.2%）、サービス（4店、1.3%）という比率であった。

食品を専門に販売している露店の内訳は、野菜（93店、29.9%）、肉屋（37店、11.9%）、果物（18店、5.8%）、食材（16店、5.1%）、飲食店（6店、1.9%）、魚屋・駄菓子（各3店、1.3%）の順であった。

生活用品を専門に販売している露店のうち、扱っている商品は衣料・靴・金物・電気部品・籠・台所・帽子、ライターの8種類である。店数の多いものから、衣料（17店、18.1%）、靴（5店、5.3%）、金物（2店、2.1%）、電気製品・帽子（各1店、0.3%）となる。

その他の嗜好品・趣味に関わる店の内訳は、タバコ（2店、1.6%）、音楽テープ・CD・VCD（3店、1.0%）、酒（2店、0.6%）となる。

3 商品からみた市

商品のカテゴリー分類

那発の市の露店は、専門店と雑貨店にわかれる。特に雑貨店は、生活用品、食品、嗜好品、医療品など、多様な種類の商品販売している。まず市でどのような種類の商品が販売されているかを把握するために、市全体で販売されている商品について分類をおこない、次に商品の全種類をリストアップした（表3）。

商品の種類を便宜的に、生活用品類、趣味・玩具類、食品類、薬類の4つに分類した。さらに生活用品類を、衣料群、アクセサリ・女性用品群、靴群、電気群、道具・工具群、洗面・掃除・洗濯群、調理・食器群、文具群の8群に分類した。趣味・玩具類は、玩具群、音楽群、写真群に3分類した。食品類は、菓子・パン類群、調味料群、乾燥食品群、加工食品群、肉・魚・卵群、青果群、家畜群、そして酒・タバコ・茶群の8群に分けた（表4）。

8月9日の市で販売されていた、商品の全種類は268種である。このうち165種は生活用品類で全体の60.9%を占め、以下食品類（87種、32.1%）、家畜（6種、1.8%）、趣味・玩具類（13種、4%）、薬類（3種、1.1%）の順になる（表5）。

このうち商品の種類の多い生活用品類と食品類の群ごとの内訳は以下のようになる。生活用品類は種類の多い群から、道具・工具群（45種、27.3%）、洗面・洗濯・掃除群（30種、18.2%）、衣料群（22種13.3%）、台所・食卓群（22種、13.3%）、アクセサリ・女性用品群（12種、7.3%）、文具群（10種、6.1%）、電気群（9種、5.5%）、靴群（6種、3.6%）の順である。

食品類は種類の多い群から、青果群（55種、63.2%）、乾燥品群（8種、9.2%）、加工食品群（7種、8.0%）、菓子・パン群（5種、5.7%）、調味料群（5種、5.1%）、肉・魚・卵群（6種、6.1%）、

表3 那発露店一覧(1)

No.	商品	民族	住居地点	備考 (地名の経路は移動商人が移動する範囲)
1	落花生			
2	ハクサイ, キャベツ, 青菜			
3	青菜, 洋糸瓜(洋ヘチマ), トマト, ジャガイモ			
4	豆腐			
5	落花生			
6	豆腐, 臭豆腐, 米線			
7	落花生			
8	モヤシ			
9	モヤシ			
10	モヤシ			
11	臭豆腐			
12	背負い籠			
13	ブタ	漢		
14	ブタ	漢		
15	水牛肉	タイ		
16	ブタ	漢	四里村	
17	ブタ	ミャオ		
18	ブタ	タイ	金水河	買ったブタを販売
19	ブタ	タイ	蔓棚	
20	ブタ	タイ	蔓棚	
21	ブタ	紅頭ヤオ	四里村	
22	ブタ	漢(四川)		
23	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
24	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
25	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
26	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
27	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
28	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
29	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
30	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	
31	ブタ	沙ヤオ	会秧・老寨	自家のブタ販売
32	ブタ	沙ヤオ	会秧・老寨	自家のブタ販売
33	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	自家のブタ販売
34	ブタ	沙ヤオ	太陽寨	自家のブタ販売
35	ブタ	沙ヤオ	白石岩	自家のブタ販売
36	ブタ	タイ	金水河	買ったブタを販売, 三列目
37	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	自家のブタ販売
38	ブタ	沙ヤオ	太陽寨	自家のブタ販売
39	ブタ	沙ヤオ	太陽寨	自家のブタ販売
40	ブタ	沙ヤオ	白石岩	自家のブタ販売
41	ブタ	ミャオ	砥山	買ったブタを販売
42	ブタ	沙ヤオ	太陽寨	買ったブタを販売
43	ブタ	漢	那発	買ったブタを販売
44	ブタ	沙ヤオ	白石岩	自家のブタ販売, 年間7~8頭, 1頭700~800元
45	ブタ	沙ヤオ	白石岩	自家のブタ販売, 年間5~6頭
46	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	買ったブタを販売, ブタ販売専業
47	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	買ったブタを販売
48	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	買ったブタを販売
49	ブタ	沙ヤオ	会秧・新寨	買ったブタを販売
50	テラピア, コイ, 干魚			
51	ナマズ			
52	ナマズ			
53	米線, 食堂			
54	焼臭豆腐(飲食店)			
55	焼臭豆腐(飲食店)			
56	背負い籠	ハニ		
57	トウガラシ, カボチャ	ハニ		
58	トウモロコシ, ショウガ, (野草?)	ハニ		
59	ショウガ, パナナの花, カボチャ, パパイアの花	ハニ		
60	ドクダミの根, トウガラシ, パイナップル	ハニ		
61	サトイモの花, サンショウ, 落花生, トウガラシ, ショウガ	ハニ		
62	ニガウリ, ショウガ, サトイモの花, ショウガカボチャ	ハニ		
63	ニガウリ, ショウガ	ハニ		
64	タケノコ(大)	タイ		
65	現地名(地交), トウガラシ, 未同定種(緑色で丸く苦い), ササゲ, カボチャ, 空心菜, 洋糸瓜の蔓	ハニ		
66	カボチャの花, カボチャの蔓, キュウリ, ササゲ, トウガラシ	ミャオ		
67	タケノコ, トウガラシ, ササゲ	ミャオ		
68	落花生, (野生の香菜)	ミャオ		

表3 那発露店一覧(2)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
69	パパイヤの花, (野草, 2種), カボチャ	ミャオ		
70	バナナ, カボチャ, トウガラシ, ササゲ	ミャオ		
71	青菜, クワレシダ, 洋糸瓜, エンドウ	ハニ		
72	ササゲ, トウガラシ, 未同定種(ネギ似)	ハニ		
73	板納豆	ハニ		
74	青菜, ササゲ	ハニ		
75	エンドウ	ハニ		
76	エンドウ			
77	青菜, 洋糸瓜の蔓			
78	ササゲ, 未同定種(緑色で丸く苦い), 現地名(野姜芽), トウガラシ, 現地名(地交)	ハニ		
79	トウガラシ, ザクロ, エンドウ, キュウリ, ハクサイ, ウオースン, 未同定種(ネギ似)			
80	タケノコ(細い), トウガラシ, ザクロ, ショウガ	ミャオ		
81	キノコ(種不明), ショウガ, トウガラシ, サトイモの花			
82	タケノコ, ショウガ	ハニ		
83	トウガラシ, ハチの巣, ニガウリ, ショウガ	ハニ		
84	トウガラシ	ハニ		
85	トウガラシ, バナナの花, ニガウリ, ササゲ, 洋糸瓜の蔓	ハニ		
86	トウガラシ	紅頭ヤオ		
87	ハチの巣			
88	トウガラシ, キュウリ, 空心菜	タイ		
89	カボチャ, トウガラシ	ミャオ		
90	トウガラシ	ミャオ		
91	落花生, 空心菜			
92	野菜の種			
93	青菜, 洋糸瓜の蔓, ネギ	漢		
94	エンドウ, 大根	ミャオ		
95	ネギ, 青菜, 洋糸瓜, トウガラシ	ハニ		
96	サンショウ, 洋糸瓜, 未同定種(ネギ似), 漬け物	ハニ		
97	ラッキョ, 臭豆腐			
98	洋糸瓜			
99	ネギ, カボチャ, 洋糸瓜, 洋糸瓜の蔓, 香菜, セリ, キュウリ	漢		
100	トマト, キャベツ, トウガラシ, ハクサイ			
101	トマト, ネギ, 香菜, 乾燥湯葉, 豆腐			
102	ハクサイ, キャベツ, トウガラシ, 未同定種(ネギ似)			
103	青菜, トマト, キュウリ, トウガラシ, キャベツ, 洋糸瓜			
104	ニンジン, トマト, キュウリ, 未同定種(ネギ似)			
105	トウガラシ, セリ, ネギ, ナス			
106	サトイモの花, ニワトリのタマゴ, ジャガイモ			
107	バナナの花, ササゲ, パパイヤの花	ハニ		
108	アヒルの雛, 鶏の雛			
109	アヒルの雛, 鶏の雛			
110	アヒルの雛, 鶏の雛			
111	アヒル(成鳥)			
112	ニワトリ(成鳥)			
113	ニワトリ(成鳥)			
114	ニワトリ(成鳥)			
115	ニワトリ(成鳥)			
116	ニワトリ(成鳥)			
117	ニワトリ(成鳥)			
118	ニワトリ(成鳥)			
119	ニワトリ(成鳥)			
120	ニワトリ(成鳥)			
121	パパイヤの花, サトイモの花, ニワトリのタマゴ, ニガウリ			
122	カボチャ, セリ, トマト, ナス, タマネギ, インゲン, ハクサイ, キャベツ			
123	ネギ, 洋糸瓜, キュウリ, 青菜, インゲン, ショウガ			
124	未同定種(ネギ似), ショウガ, ハクサイ, キャベツ, 青菜	漢	金平	
125	キノコ(種不明), 未同定種(ネギ似), 乾燥湯葉, セリ, キュウリ	漢	金平	
126	青菜, ネギ	漢	金平	

表3 那発露店一覧(3)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
127	洋糸瓜, ハクサイ, キャベツ	漢	金平	
128	ウオースン, セリ, 青菜, トウガラシ	漢(四川)	金平	
129	ネギ, セリ, キュウリ, 洋糸瓜	漢	金平	
130	ササゲ, キュウリ, キャベツ, ハクサイ, トウガラシ, カボチャ, ニンニク	漢	金平	
131	ショウガ, ササゲ, (野草, 不明2種), パパイヤの花	ハニ		
132	ミント, トウガラシ, パパイヤの花			
133	(野草, 不明3種), ササゲ			
134	ササゲ, ネギ, カボチャの蔓, 未同定種(ネギ似), ダイコン, 漬物(酸菜)	ハニ		
135	漬物(酸菜), ニラ, 洋糸瓜, トウモロコシ, 香菜	ハニ		
136	ニラ, 未同定種(ネギ似), 洋糸瓜	ハニ		
137	ネギ, ニガウリ, ササゲ	ハニ		
138	地交, ササゲ, (野草, 不明2種), エンドウ, 漬物(酸菜), ザクロ	ハニ		
139	ハクサイ, ニンジン, キュウリ, ナス, トウガラシ, ピーマン, ウオースン, ネギ	漢	金平	
140	ジャガイモ, ネギ, タマネギ, 青菜, セリ, 香菜, インゲン, トウガラシ, 洋糸瓜, ナス, キャベツ, ハクサイ, ニンジン, ササゲ, キュウリ, ニガウリ, トマト	漢	金平	
141	セリ, ネギ, 未同定種(ネギ似), トマト, トウガラシ, ピーマン, キュウリ, インゲン, キャベツ, ハクサイ, ジャガイモ	漢	金平	
142	セリ, ネギ, 未同定種(ネギ似), トマト, トウガラシ, ピーマン, キュウリ, インゲン, キャベツ, ハクサイ, ジャガイモ	漢	金平	
143	リンゴ, ザクロ			
144	ニワトリのタマゴ, トウガラシ, ササゲ	ハニ		
145	マンゴウ	漢	那発	
146	ミカン, リンゴ	タイ	勅拉	
147	ザクロ, ミカン, ブドウ	タイ	勅拉	
148	ミカン	漢	金平	
149	リンゴ, ザクロ, リンゴ	漢	金平	
150	リンゴ, ザクロ	漢	金平	
151	リンゴ	漢	金平	
152	ザクロ, リンゴ	漢	五家	
153	ザクロ, リンゴ	漢	金平	
154	ザクロ, ミカン, リンゴ, ブドウ	漢	金平	
155	リンゴ	漢	金平	
156	ザクロ, リンゴ	漢	金平	
157	リンゴ, ザクロ, リンゴ	漢	金平	
158	リンゴ, ザクロ	漢	金平	
159	ザクロ, リンゴ	漢	金平	
160	ミカン	漢	金平	
161	ミカン	漢	金平	
162	キュウリ, タケノコ(大, 細), ショウガ	ハニ		
163	キュウリ, タケノコ(細)	ハニ		
164	タケノコ, サツマイモ, クワレシダ	ハニ		
165	キュウリ, タケノコ(大, 細)	ハニ		
166	インゲン, タケノコ(細), トウガラシ	ハニ		
167	タケノコ(大)	ハニ		
168	タケノコ(大, 細), カボチャ	ハニ		
169	トウガラシ(瓶), トウガラシ, コショウ, 草果, サンショウ			
170	酒(量り売り)			
171	駄菓子			
172	タバコ(葉), ライター, 石けん, 駄菓子, 歯磨き粉, 乾麺, 酒(瓶)			
173	駄菓子			
174	漢方薬			
175	コメ	タイ		買って来たコメを売る。
176	漢方薬			
177	コメ	漢	勅拉	買って来たコメを売る。
178	コメ	漢	勅拉	買って来たコメを売る。
179	コメ	タイ		
180	コメ	漢	金平・四里村	紅米(在来種), ハイブリッド, 大力香, 漢族だが稲作に特化してコメを売っている農民
181	コメ	漢		買って来たコメを売る。
182	コメ	漢		買って来たコメを売る。
183	コメ	漢		買って来たコメを売る。
184	コメ	漢		買って来たコメを売る。
185	コメ	漢		買って来たコメを売る。

表3 那発露店一覧(4)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
186	綿布, 糸			
187	漢方薬, 薬酒			
188	コメ	漢		買って来たコメを売る。
189	コメ	漢		買って来たコメを売る。
190	コメ	漢		買って来たコメを売る。
191	タバコ(葉)			
192	タバコ(葉)			
193	タバコ(葉)			
194	ニワトリのタマゴ, ビニール袋, 駄菓子, 砂糖, 乾麺, 即席ラーメン, タバコ(箱), 化学調味料, ライター, 乾電池, 懐中電灯, 蚊取り線香, 石けん, トイレットペーパー, ちり紙			
195	反物(柄もの), 糸, 毛糸, 花辺(花柄の細長いテープ状の布)	ミャオ	那発	
196	反物(柄もの), 白綿布, 花辺	タイ		那発→勐拉→三棵樹→螞蟻塘
197	反物(柄もの), 白綿布, 花辺	ミャオ	金平・七道	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
198	白綿布, 反物(柄もの), 花辺	ミャオ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪→螞蟻塘
199	洗濯洗剤, タバコ(箱), 乾電池, 石けん, 駄菓子, 乾燥米線, 麺, 懐中電灯, 塩, ニンニク, 乾麺			
200	ニワトリのタマゴ, 砂糖, ポリタンク, ビニール袋			
201	反物(柄もの), 糸, 白綿布	漢	金平	那発→道場→勐拉→三家道→金平。金平ではミャオ族相手, 那発ではヤオ族。
202	反物(柄もの), 白綿布	ミャオ	勐拉, 広東寨	那発→勐拉
203	反物(柄もの), 白綿布	ミャオ	金平	那発→勐拉→金平→道場
204	糸, エプロン, パンティー(女性), パンツ(男性), ポリバケツ, イス, ハンガー, 洗面器(プラスチック), 魔法瓶, ヤカン(アルミ), 鍋(アルミ)	漢	那発	那発
205	下着(男女子供), 子供服	漢(四川)	金平	那発→勐拉→道場→金平
206	毛糸, 反物(柄もの), 白綿布	ヤオ(女)	那発	那発。ヤオ族相手。ベトナム, モンコから
207	反物(柄もの), 花辺, ビーズ飾り(ガラス), ビーズ飾り(プラスチック)	ハニ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪。時々者米。もとバナナ会社の職員。
208	ポリバケツ, 桶, シャモジ, 魔法瓶, 中華鍋, コップ(ガラス), ヤカン(アルミ), 鍋(アルミ), 洗面器(プラスチック), 蒸し器	漢(湖南)	勐拉	那発→勐拉→三棵樹(去年までは者米で出店していた)
209	毛糸	漢	那発	那発。常設店の前で営業
210	食器洗剤, 麺, ニワトリのタマゴ, 化学調味料, 塩, 歯磨き粉, 石けん, 香取線香, 懐中電灯, 箸, 洗濯洗剤, タバコ(箱), 使い捨てライター, 乾麺, 駄菓子, トイレットペーパー, 漬物(10種), 缶詰(肉, 魚), 油, 醤油, 歯ブラシ, ニンニク	ミャオ	那発(出身, 勐拉広東寨)	那発
211	ポリバケツ, ポリタンク, 蒸し器, 中華鍋, ハンガー, ハエ叩き, フライ返し, オタマ, 金タワシ, スプーン, 鍋(アルミ), ヤカン(アルミ), 魔法瓶, 桶, コップ(ガラス), 洗面器(プラスチック)	漢(湖南)	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪(者米には時々いく)
212	反物(柄もの), 糸, 毛糸	漢	銅場	那発→勐拉→道場→三家道→金平。2人でトラックを一台1ヶ月単位, 100円でやとう。
213	子供服, ジーパン(男女), Tシャツ, Yシャツ, 傘, 反物(柄もの), ブラジャー, パンティー(女性), パンツ(男性)	漢(湖南)	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→者米
214	服(大人・男女), 子供服, ジーパン(男女)	漢(湖南)	勐拉	那発→勐拉→三棵樹
215	白酒(瓶), ビール, ニワトリのタマゴ, 飼料, 洗濯洗剤, タバコ(箱), 箸, 自転車の空気入れ, ちり紙, トイレットペーパー, 乾電池, 懐中電灯, 電球, 石けん, 歯ブラシ, 歯磨き粉, 塩, 砂糖, 化学調味料, 乾麺, 金タワシ, 靴用のタワシ, 醤油, 油, 食器洗剤, 駄菓子, 干魚, 缶詰(肉, 魚), トウガラシ(瓶詰め)	漢(江西)	那発	那発
216	金タワシ, 茶碗(プラスチック), 靴用のタワシ, ハンガー, スプーン, 電球ソケット, グラス小(乾杯用), 爪楊枝, ビーラー, ハサミ, ボールペン, 使い捨てライター, 針, 鏡, ノリ, セロハンテープ, 乾電池, 扇子, ドライバー, 爪切り, 輪ゴム, カミソリ, ビーズ飾り(プラスチック), シャンプー	漢, 男(湖北)	金平	那発→勐拉→道場→金平

表3 那発露店一覧(5)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
217	音楽CD, 映画VCD, 石けん, 櫛, 生理用品			
218	漢方			
219	漢方(約100種)	漢	金平	那発→金平
220	漢方			
221	タバコ(葉)	漢, 男	金平	那発→金平
222	ブラジャー, パンティー(女性), 帽子, パンツ(男下着), 子供服	漢, 女	金平	那発→勸拉→金平
223	軍隊風靴, サングラ, 帽子, 服(軍隊風)	漢, 女	金平	那発→勸拉→道場→金平
224	ミュージックカセットテープ	ハニ, 男	金平	那発
225	傘, ブラジャー, ファスナー, 紙製手提げ袋, 櫛, 靴下, 靴中敷き, セロハンテープ, イヤリング, 髪飾り, パンツ(男下着)	漢	金平	那発→勸拉→道場→大寨→沙衣坡→金平
226	傘, ジーパン(男女), 男性服, 子供服, 反物(柄もの), パンティー(女性), パンツ(男性)	漢, 男, (湖南)	勸拉	那発→勸拉→者米
227	服(大人・男女), 傘, ジーパン(男女), パンツ(男性), 半ズボン(男女)	ハニ, 男	金平	那発→金平
228	スリッパ・サンダル(大人男女, 子供), 軍隊風靴	漢, 女	金平	那発→勸拉→道場→三家道→金平
229	軍隊風靴, スリッパ, サングラ(大人男女, 子供)	漢, 女	金平	那発→勸拉→道場→三家道→金平
230	パンツ(男性), パンティー(女性), 子供服	漢	金平	那発→勸拉→道場→金平
231	ロープ, 電線, 投網(河川), 霞網, ベンチ, 携帯ラジオ, 鑿, 金太鼓, 傘, フイゴ, 懐中電灯, スリッパ, 長靴, 釣り道具, ラバ用具一式	漢	金平	那発→勸拉→者米→金平
232	髪留め, 髪飾り, タオル, シャンプー, リンス, 石けん, 鏡, 軍手, ナイフ, 櫛, 金タワシ, ファスナー, 靴用のタワシ, パンティー(女性), ブラジャー, 帽子, シャモジ	漢	金平	那発
233	スリッパ・サンダル(大人男女, 子供), 軍隊風靴, タオル	タイ, 女	勸拉	那発→勸拉→三棵樹→者米
234	時計修理			
235	合い鍵			
236	食器洗剤, 石けん, ちり紙, 石けん箱, 歯ブラシ, 糸, トイレトペーパー, 使い捨てライター, ライター用ガス, シャンプー	漢, 女	金平	那発
237	野菜の種	漢, 男	金平	那発
238	釘, 蝶つがい, 鑿, おろし金(タケノコ用), 金太鼓, 鈴(牛用), 蹄鉄, スクリュー型ネジ回し, 金ノコギリ, ノコギリ, ベンチ	漢, 男	金平	那発→勸拉
239	電球, 電球ソケット, 電線, 延長コード, 絶縁テープ	漢, (四川)		
240	駄菓子	漢, 男, (四川)	金平	那発→勸拉→道場→金平
241	野菜の種	漢, 男	金平	那発→勸拉→道場→三家道→阿得博→金平
242	米線(食堂)	タイ	勸拉	那発
243	フライ返し, スコップの先, ラバ用具一式, 蹄鉄, カマ, ナタ, クワの先, オノ, 包丁, 四又(草を集める), 竿秤, 墨壺, 金槌, ツルハシ, 鎖, 左官用コテ, 鈴(牛用)			
244	米線(食堂)	漢, 男	那発	那発
245	ベトナム製胃薬その他各種薬, 針, 糸	タイ, 女		
246	タバコ(葉)	漢, 女	金平	那発
247	軍隊風靴, スリッパ・サンダル(大人男女, 子供), 長靴(大人, 子供)	漢, 男	金平	那発→勸拉→金平
248	髪飾り, ストッキング(くるぶしまで), ブラジャー, シャンプー, タオル, ボールペン, ハサミ	漢	金平	那発→勸拉→道場→金平
249	野菜の種, 石灰, 蹄鉄			
250	ジーパン, 服(大人・男), 子供服, Yシャツ	漢, 男	金平	那発→勸拉→道場→阿得博→金平
251	Tシャツ			
252	服(大人・男女)	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
253	反物(柄もの), ジーパン, 半ズボン, 子供服	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
254	ジーパン, 子供服	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
255	ジーパン, 子供服	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
256	ジーパン, 子供服	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
257	子供服, 反物(柄もの)	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
258	服(大人・男)	漢, 男	金平	那発→勸拉→金平
259	子供服, ジャージ, ジーパン	漢, 女	金平	那発→勸拉→三家道→阿得博→金平
260	反物(青い布)			

表3 那発露店一覧(6)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
261	乾電池, ライター用のガス, オモチャ, ベルト, 鎖, ロープ, 電線, 包丁, ペンチ, レンチ, 金バサミ, シャモジ, 靴用のタワシ, ハケ, メジャー	漢, (湖南)	金平	那発→金平
262	使い捨てライター, ライター用のガス			
263	ペンチ, 金バサミ, ドライバー, 蝶つがい, メジャー, 左官用コテ, 金タワシ, 延長コード, 南京錠, オモチャ, ベルト, 水準器	漢, 男, (湖南)	金平	那発→勸拉→道場→金平
264	ロープ, 投網, 霞網			
265	洗濯タワシ, ベルト, 鏡, オモチャ, 目覚まし時計, 腕時計, 携帯ラジオ, 電器カミソリ, 南京錠, 鑿, ハケ, 蝶つがい, オタマ, スプーン, 包丁, 釘, 墨壺, カナヅチ, 電線, メジャー, 懐中電灯, 乾電池, 水準器, テグス	漢, 男	金平	那発→勸拉→道場→三家道→金平
266	ロープ, サングラス			
267	鎖, ベルト, 携帯ラジオ, カメラ, 腕時計, 懐中電灯, 乾電池, 包丁, フライ返し, オタマ, 電球ソケット, 延長コード, ロープ, 投網, 霞網			
268	軍隊風靴, サンドル・スリッパ (男女, 子供)			
269	糸, 糸			
270	糸, 糸, 葬儀用線香, カマ			
271	ジャージ (黒), 子供服			
272	長靴 (大人, 子供), スリッパ・サンダル (大人, 子供), 軍隊風靴			
273	ブラジャー, 髪飾り, 軍手, 靴下 (女), 紙製手提げ袋	タイ, 女	勸拉	那発→勸拉→三棵樹→蕎菜坪→翁当
274	デイバック (子供), 帽子, ブラジャー, 子供服	漢, 女	金平	那発
275	糸, 傘, タオル, 靴下 (男女), 櫛, 髪留め, ボタン, 財布, トランプ, セロハンテープ, 髪飾り, ポシエット	漢, 女	那発	那発
276	靴用のタワシ, ハサミ, ブラジャー, オモチャ, 爪切り, 扇子, 使い捨てライター, シャモジ, ナイフ, ファスナー, カミソリ, 歯ブラシ, 髪飾り, 髪留め, オモチャ			
277	反物 (柄もの), パンティー (女性), 抜き手 (作業用に肘から手首まで覆う布), タオル			
278	長靴 (大人, 子供), 軍隊風靴, スリッパ・サンダル (大人, 子供)	漢, 男	金平	那発→勸拉→金平
279	音楽CD, 映画VCD, ミュージックカセットテープ	漢, 男, (江西)	金平	那発→道場→金平
280	野菜の種	漢, (湖南)	金平	那発→道場→金平
281	ノコギリ, ノコギリの目立て			
282	薬	漢, 女	金平	那発→勸拉→道場→金平
283	コップ, スプーン, ナイフ, ハケ, フライ返し, 箸, 包丁, ハサミ			
284	皿 (陶磁器), 碗 (陶磁器)			
285	服 (男・大人), パンティー (女性), パンツ (男性)	タイ, 女	金平	那発→勸拉→金平
286	野菜の種, 糸, 糸			
287	ビール, 白酒 (瓶), 塩, 懐中電灯, 乾電池, 洗濯洗剤, 化学調味料, タバコ (箱), 歯磨き粉, タオル, 酒 (量り売り)	漢, 女	那発	那発
288	白酒 (瓶), 懐中電灯, 麴, タバコ (箱), 針, 歯ブラシ, 洗濯洗剤, ちり紙, 乾電池, 豆電球, 櫛			
289	傘, ベルト, 携帯ゲーム機, ゲームソフト, 腕時計, 携帯ラジオ, 目覚まし時計, 金タワシ, 鎖, サングラス, 老眼鏡	漢, 男, (湖南)	金平	那発
290	携帯ゲーム機, 南京錠, 懐中電灯, ベルト, 目覚まし時計			
291	ロープ, 老眼鏡, 電線, ノコギリ, 腕時計, オモチャ, スコップの先, 卓上計算機, 電球ソケット, 砥石, 虫メガネ, 延長コード, 南京錠, 懐中電灯, カマ, ハサミ, ナイフ, レンチ, オタマ, 鎖, ピーラー, 釘, ドライバー, 金タワシ, メジャー	漢, 男, (湖南)	金平	那発→勸拉→金平
292	ロープ, 電線, 投網 (河川), 霞網, フライ返し, オタマ, テグス, 砥石, カナヅチ, 鑿, レンチ, 電器カミソリ, 包丁, メジャー, ナイフ, 乾電池, ベルト, オモチャ, スプーン, 蝶つがい, 鏡, 櫛, 釘, 金ノコギリ, 水準器, 左官用コテ	漢, 男	金平	那発→勸拉→道場→金平

表3 那発露店一覧(7)

No.	商品	民族	住居地点	備考(地名の経路は移動商人が移動する範囲)
293	パンティー(女性), 子供服	漢, 男	金平	那発→勐拉→阿得博→金平
294	腕時計, 鎖, ベルト, オモチャ, 目覚まし時計, 携帯ラジオ, 包丁, スプーン, ハサミ, 乾電池, 南京錠, 鈴(牛用), カナヅチ, 懐中電灯, メジャー, 延長コード, フライ返し, 砥石, テグス, 左官用コテ, 墨壺, 電線	漢, 女	金平	那発→勐拉→道場→金平
295	卓上計算機, 腕時計, 鎖, ベルト, オモチャ, 目覚まし時計, 携帯ラジオ, 包丁, スプーン, ハサミ, 乾電池, 南京錠, 鈴(牛用), カナヅチ, 懐中電灯, メジャー, 延長コード, フライ返し, 砥石, テグス, 左官用コテ, 墨壺, 電線			那発→勐拉→道場→金平
296	子供服, パンティー(女性)			那発→勐拉→道場→金平
297	タオル, 洗濯用洗剤, 傘, 鏡, 豆電球, タバコ(箱), 石けん, 香取線香, 歯磨き粉, 石けん箱, 櫛, 糸, ちり紙, 生理用品, 髪留め, 麴			那発→勐拉→道場→金平
298	サンダル・スリッパ(大人, 子供)			那発→勐拉→道場→金平
299	時計修理			那発→勐拉→道場→金平
300	時計修理			
301	音楽CD, 映画VCD, ミュージックカセットテープ			那発→勐拉→道場→金平
302	カマ, 糸, 洗濯洗剤, 麴, 葬儀用線香, 化学調味料, 乾電池, 懐中電灯, ベトナム製胃薬, 乾燥米線, ニンニク, 砂糖, コシヨウ, サンショウ			那発→勐拉→道場→金平
303	麦わら帽子			
304	マントウ, 包子			
305	糸, 懐中電灯, 歯ブラシ, 乾電池, 石けん, 化学調味料, 豆電球, 洗濯洗剤, 塩, 麴, 靴用ブラシ, マッチ	漢, 女	那発	那発
306	洗濯洗剤, 生理用品, トイレトペーパー, ちり紙, 電球, 塩, 即席ラーメン, 茶, 酒(瓶), タバコ(箱), 化学調味料, 石けん, 石けん箱, 洗濯ブラシ, 葬儀用線香, 香取線香	漢, 女	那発	那発
307	ロープ, 電線, 携帯ラジオ, 包丁, 電球, 電球ソケット, 左官用コテ, フライ返し, シャモジ, ナイフ, 栓抜き, レンチ, 鑿, 砥石, 目覚まし時計, 腕時計, ベルト, オモチャ, ハサミ, ペンチ	漢	金平	那発→勐拉→道場→阿得博→金平
308	洗濯洗剤, 塩, 歯磨き粉, 化学調味料, 茶, 麴, タバコ(箱), 石けん, 石けん箱, 乾電池, 使い捨てライター			
309	洗濯洗剤, ちり紙, 生理用品, タバコ(箱), 乾麴, 茶, 蚊取線香, 石けん箱, 歯ブラシ, 歯磨き粉, 塩	漢, 女	那発	那発
310	軍隊風靴, サンダル・スリッパ(大人, 子供)	漢, 女	金平	那発→勐拉→道場→阿得博→金平
311	ブラジャー, 子供服, パンティー(女性), パンツ(男性)	漢, 女	金平	那発→勐拉→道場→阿得博→金平

表4 那発の市の商品分類(1)

分類	商品	露店		
生活用品	衣料	反物(柄もの)	16	
		糸	12	
		パンティー(女性)	11	
		ベルト	10	
		ジーパン	10	
		パンツ(男性)	9	
		ブラジャー	9	
		毛糸	7	
		白綿布	7	
		服(大人・男女)	6	
		帽子	5	
		靴下	3	
		ファスナー	3	
		軍手	2	
		Tシャツ	2	
		Yシャツ	2	
		ジャージ	2	
		半ズボン	2	
		服(軍隊風)	1	
		下着(子供男女)	1	
ストッキング	1			
エプロン	1			
生活用品	アクセサリ・女性用品等	腕時計	7	
		櫛	7	
		目覚まし時計	6	
		子供髪飾り	6	
		花辺(花柄の細長いテープ状の布)	5	
		髪留め	4	
		生理用品	4	
		サングラス	2	
		ビーズ飾り	2	
		ボタン	1	
		ボシェット	1	
		イヤリング	1	
		靴	スリッパ	10
			サンダル	10
			軍隊風靴	9
長靴	4			
靴用のタワシ	3			
電気	懐中電灯	15		
	乾電池	15		
	電線	9		
	携帯ラジオ	7		
	延長コード(差し込みつき)	6		
	電球ソケット	5		
	電球	4		
	豆電球	3		
卓上計算機	2			
農具・工作などの道具類	ロープ	8		
	傘(おりたたみ傘を含む)	8		

分類	商品	露店	
生活用品	農具・工作などの道具類	メジャー	7
		鎖	7
		南京錠	6
		ナイフ	6
		左官用コテ	6
		鑿	5
		砥石	5
		レンチ	4
		ペンチ	4
		釘	4
		蝶つがい	4
		鈴(牛用)	4
		カマ	4
		カナヅチ	4
		墨壺	4
		テグス	4
		投網	4
		霞網	4
		釘	4
		蹄鉄	3
		ポリバケツ	3
		ドライバー	3
		洗面器(プラスチック)	3
		ノコギリ(オガ)	3
		針	3
		ハケ	3
		水準器	3
		スコップの先	2
		金バサミ	2
		桶	2
		ポリタンク	2
		ビニール袋	2
		金ノコギリ	2
		ラバ用具一式	2
		ファイゴ(手回し)	1
ナタ	1		
ツルハシの先	1		
釣り道具	1		
クワの先	1		
スクリー型ネジ回し	1		
四又	1		
竿秤	1		
オノ	1		
調理・食器類	包丁	9	
	フライ返し	8	
	スプーン	7	
	使い捨てライター	6	
	シャモジ	5	
	オタマ	5	
	ライター用ガス	3	
ヤカン(アルミ)	3		

表4 那発の市の商品分類(2)

分類	商品	露店	
調理・食器類	魔法瓶	3	
	コップ(ガラス)	3	
	鍋(アルミ)	3	
	箸	3	
	ライター	2	
	中華鍋	2	
	蒸し器	2	
	茶碗	2	
	食器洗剤	2	
	栓抜き	1	
	皿(陶磁器)	1	
	おろし金	1	
	ピーラー	1	
	グラス小(乾杯用)	1	
	生活用品	石けん	13
洗濯洗剤		11	
歯ブラシ		7	
タオル		7	
歯磨き粉		7	
ちり紙		7	
金タワシ		7	
石けん箱		5	
鏡(手鏡を含む)		5	
トイレトペーパー		5	
靴用タワシ		5	
香取線香		5	
シャンプー		4	
ハンガー		3	
葬儀用線香		3	
カミソリ		2	
電器カミソリ		2	
背負い籠		2	
爪切り		2	
老眼鏡		2	
洗濯ブラシ		1	
リンス		1	
洗濯タワシ		1	
抜き手		1	
扇子		1	
マッチ		1	
爪楊枝		1	
自転車用空気入れ		1	
イス		1	
ハエ叩き		1	
文具		ハサミ	8
		セロハンテープ	3
		ボールペン	2
	紙製手提げ袋	2	
	のり	1	
	パンチ	1	
	財布	1	

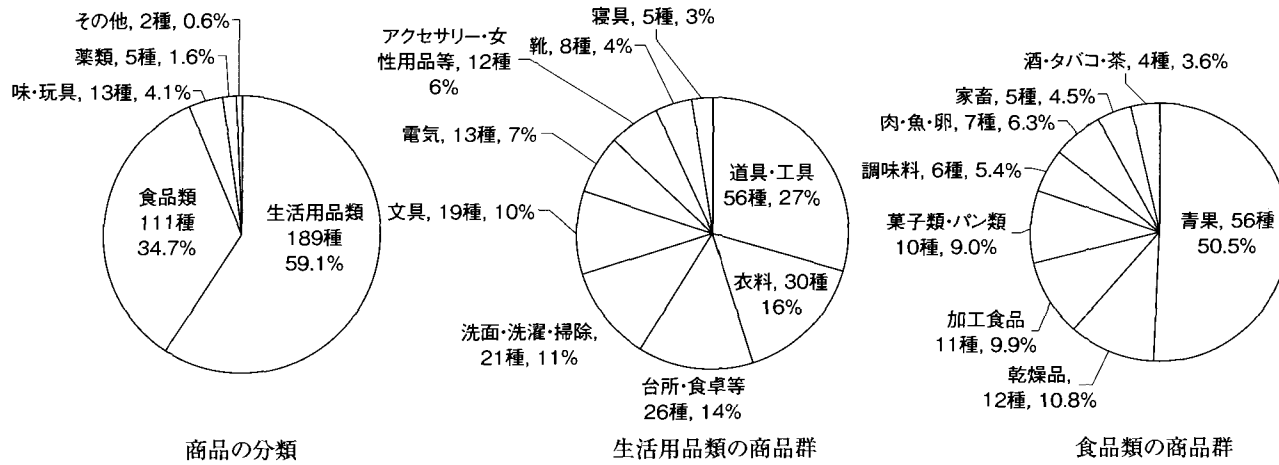
分類	商品	露店		
生活用品	文具	輪ゴム	1	
		デイベック(子供用)	1	
		虫メガネ	1	
趣味・玩具	玩具	オモチャ	9	
		携帯ゲーム機	2	
		ゲームソフト	1	
		トランプ	1	
	音楽	ミュージックカセットテープ	3	
		音楽CD	3	
		映画VCD	3	
		太鼓	2	
		写真	カメラ	1
			菓子類・パン類	駄菓子
米線(食堂)	4			
焼臭豆腐	2			
マントウ	1			
調味料	包子	1		
	化学調味料	8		
	塩	8		
	砂糖	4		
	油	2		
	醤油	2		
食品	乾燥食品	乾麺	7	
		落花生	6	
		サンショウ	4	
		香菜	4	
		即席ラーメン	2	
		乾燥米線	2	
		干魚	2	
	コショウ	2		
	加工食品	漬け物	5	
		豆腐	3	
臭豆腐		3		
乾燥湯葉		2		
缶詰(肉、魚)		2		
トウガラシ(瓶詰め)		2		
肉・魚・卵類	板納豆	1		
	ブタ肉	36		
	ニワトリのタマゴ	7		
	ナマズ	2		
	水牛肉	1		
	コイ	1		
	テラピア	1		
青果	葉菜	青菜	13	
		ニラ	2	
		ハクサイ	11	
		ネギ	13	
		キャベツ	10	
		地交	3	
		ミント	1	
野生の香菜	1			

表4 那発の市の商品分類(3)

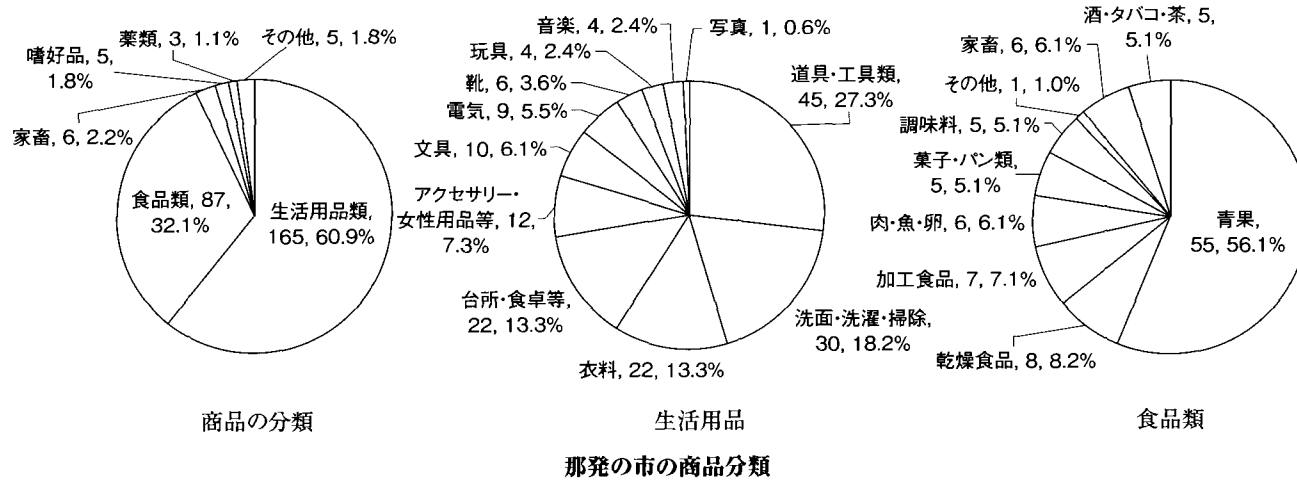
分類	商品	露店	
食品	葉菜	未同定種 (ネギ似)	10
		種不明野草	4
	花菜	パパイヤの花	6
		カボチャの花	1
		サトイモの花	5
		バナナの花	3
		スグリ	11
	果菜	ニガウリ	7
		キュウリ	16
		トマト	8
		トウガラシ	31
		洋絲瓜 (洋ヘチマ)	14
		ピーマン	2
		ササゲ	17
		エンドウ	6
		インゲン	5
		コメ	13
		トウガン	1
		未同定種 (緑色で丸く苦い)	1
		トウモロコシ	2
		根菜	ショウガ
	ダイコン		2
	ニンニク		4
	草果		1
	ニンジン		3
	タマネギ		2
	ラッキョ		1
	ドクダミの根		1
	茎菜	モヤシ	3
		ウオースン (筍)	3
		洋絲瓜の蔓の部分	5
		タケノコ	11
		セリ	8

分類	商品	露店	
食品	茎菜	空心菜	3
		野姜芽	1
		クラレシダ	2
		カボチャの蔓	2
		キノコ (種不明)	2
	芋	ジャガイモ	4
		サツマイモ	1
	果物	ザクロ	14
		ブドウ	2
		マンゴウ	1
		ミカン	6
		リンゴ	13
		バナナ	1
		パイナップル	1
	その他	ハチの巣	2
	家畜	アヒル (ヒナ)	3
		ニワトリ (ヒナ)	3
		ニワトリ (成鳥)	9
		アヒル (成鳥)	1
		酒搾り売り	2
		飼料	1
	酒・タバコ・茶	白酒 (瓶)	4
		ビール	2
		茶	3
		タバコ (箱)	10
	菓	タバコ (葉)	6
		ベトナム製胃薬, その他	2
		薬酒	1
		漢方薬	3
		野菜の種	6
	その他	麴	7
	時計修理		3
	合い鍵		1
	ノコギリ目立て		1

表5 者米・那発の市の商品分類



者米の市の商品分類



那発の市の商品分類

家畜群（6種、6.1%）、酒・タバコ・茶群（5種、5.1%）である。

青果・コメ

先に述べたように、青果、肉、魚などの生鮮食料品及びアヒル、ニワトリなどの家畜を販売する露店は農貿市場に集中する（図5）。このうちNo.1～3、6～10、57～63、70～121、131～144、162～168は野菜を、No.145～161は果実を販売した露店である。野菜・果実の露店販売の民族ごとの内訳は、ハニ族35店（37.6%）、漢族16店（17.2%）ミャオ族9店（9.7%）、タイ族2店（2.2%）、ヤオ族1店（1.1%）、不明30店である。販売されていた野菜の種類は47種である（表6）。

民族ごとに販売する場所をみると、例えばNo.57～73、71～85、131～138、162～168の露店はハニ族が中心で（写真8）、No.66～70はミャオ族が（写真9）、No.145～161は漢族と民族ごとに集まって露店を開く傾向が認められる（写真10）。

野菜・果実の販売を民族ごとに比較すると、ハニ族が販売した野菜は35種類ある（表6）。このうち多い順に列挙すると、トウガラシ（12店）、ササゲ（11店）、ショウガ（10店）、タケノコ（8店）となる。これらの野菜は漢、ミャオ族なども販売する。しかし、ハニ族が販売する35種類の野菜のうち12種類のニガウリ（5店）、バナナの花（3店）、トウモロコシ（2店）、サトイモの花（2

表6 那発の市における野菜分類

	ハニ		漢		ミャオ		タイ		ヤオ	
	種類	店数	種類	店数	種類	店数	種類	店数	種類	店数
1	トウガラシ	12	ネギ	8	トウガラシ	6	トウガラシ	1	トウガラシ	1
2	ササゲ	11	キュウリ	7	ササゲ	3	キュウリ	1		
3	ショウガ	10	セリ	6	カボチャ	3	タケノコ	1		
4	タケノコ	8	ハクサイ	6	タケノコ	2	空心菜	1		
5	カボチャ	5	青菜	5	落花生	1				
6	ニガウリ	5	キャベツ	5	野草1（不明）	1				
7	洋糸瓜（洋ヘチマ）	5	トウガラシ	4	野草2（不明）	1				
8	未同定種（ネギ似）	4	洋糸瓜	4	パパイヤの花	1				
9	キュウリ	3	未同定種（ネギ似）	3	バナナ	1				
10	パパイヤの花	3	ササゲ	2	ダイコン	1				
11	エンドウ	3	カボチャ	2	ショウガ	1				
12	バナナの花	3	洋糸瓜の蔓	2	ザクロ	1				
13	現地名（地交）	3	インゲン	2	キュウリ	1				
14	青菜	3	香菜	2	カボチャの花	1				
15	ネギ	3	ウオースン（窩笋）	2	カボチャの蔓	1				
16	漬物（酸菜）	3	ニンジン	2	エンドウ	1				
17	野草1（不明）	2	ピーマン	2	野草の香菜	1				
18	野草2（不明）	2	ジャガイモ	2						
19	トウモロコシ	2	ナス	2						
20	サトイモの花	2	トマト	2						
21	サンショウ	2	ショウガ	1						
22	未同定種（緑色で丸く辛い）	2	キノコ（種不明）	1						
23	洋糸瓜の蔓	2	トウガン	1						
24	クワレシダ	2	ニンニク	1						
25	ニラ	2	タマネギ	1						
26	カボチャの蔓	1	ニガウリ	1						
27	落花生	1								
28	ダイコン	1								
29	ドクダミの根	1								
30	パイナップル	1								
31	空心菜	1								
32	野姜芽	1								
33	サツマイモ	1								
34	インゲン	1								
35	香菜	1								

店)、クワレシダ(2店)、ニラ(2店)、未同定種(緑色で丸く苦い)(2店)、ドクダミの根(1店)、パイナップル(1店)、野姜芽(1店)、サツマイモ(1店)は他の民族が扱わない。

漢族は26種類の野菜を販売していたが、このうちセリ(6店)、ハクサイ(6店)、キャベツ(5店)、ウオースン(窩笋)(2店)、ニンジン(2店)、ピーマン(2店)、ジャガイモ(2店)、ナス(2店)、トマト(2店)、キノコ(種不明)(2店)、トウガン(1店)、ニンニク(1店)、タマネギ(1店)、ニガウリ(1店)の半数に相当する13種類が他の民族が扱わない種類である。また漢族しか扱わない野菜は、いずれも那発周辺では栽培されておらず、金平県以外から輸入された種類である。また那発で野菜を販売している漢族は、いずれも那発ではなく金平鎮に在住しており、野菜は金平鎮で購入しそれを販売している。

ミャオは17種類の野菜を販売したが、バナナ、カボチャの花、(野生の香菜)の3種類は他の民族が扱わない商品である。このように販売されている野菜は、各民族によって異なっていることが指摘できる。

那発の市では、農貿市場の入口の通りにコメを販売する露店が13店たった(Na 175, 177~185, 188~190)。このうち11店が漢族、2店がタイ族の露店である。Na 180の露店を除く12店は、雲南省から遠く離れた長春などの東北地方のコメを勐拉などで購入して販売していた。Na 180は十里村郷の漢族で、コメ栽培の専業農家である。ハイブリッド米の他に赤米などの在来種を販売していた。

肉類

肉類は36店がブタ肉を、1店が水牛の肉を扱っていた。露店を民族ごとにみると、沙ヤオ族(24店, 66.7%)、漢族(5店, 13.9%)、タイ族(4店, 11.1%)、ミャオ族(2店, 5.6%)、紅頭ヤオ族(1店, 2.8%)と、沙ヤオ族が7割近くを占めるのが特徴である。彼らは、会秧・新寨、太陽寨、白石岩村の出身である。沙ヤオ族以外の漢、タイ、ミャオ族は、いずれも自家で飼育したブタではなく、近隣の村からブタを購入してそれを市で転売していた。一方沙ヤオ族の24店のうち19店では、自家で飼育したブタを市に持ち込み販売している。会秧・新寨、会秧・老寨、太陽寨、白石岩の4村の各家では、平均して年間5~8頭のブタを那発の市で販売するが、一頭を売るとおよそ700~800元の収入になる。

4 移動商人の動きと6日ごとの市

市には市日だけ野菜などを売る近隣の農民以外に、商品を専業に売る移動商人がいる。彼らの動きと6日ごとの市との関係のみてみたい(表7)。雑貨店の42店のうち、27店について経営者の民族、居住地、移動する市の範囲がわかった(写真11, 写真12)。タイ族(1店)、ミャオ族(1店)を除く25店が漢族の店である。漢族の露店商のうち、金平に居住する移動商人が最も多く16店(61%)を占め、以下那発7店(27%)、勐拉3店(12%)となる。

これらの移動商人が露店を開催する地点をみると、那発に居住する移動商人は、那発だけで露店を開催するのに対して、金平に居住する移動商人は各市を移動して露店をだす。このうち、那発→勐拉→銅場→金平で露店をだす移動商人が8店と最も多い。以下、那発だけで市をだす移動商人が3店、那発→金平と2ヶ所でだす移動商人、那発→勐拉→金平と3ヶ所で市をだす移動商人、那

表7 那発の移動商人(1)

店番号	商品	民族	居住地	移動範囲
225	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→大寨→沙衣坡→金平
265	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
307	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→阿得博→金平
231	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
216	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
248	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
302	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
292	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
294	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
295	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
297	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→者米→金平
291	雑貨	漢	金平	那発→勐拉→金平
302	雑貨	漢	金平	那発→金平
232	雑貨	漢	金平	那発
236	雑貨	漢	金平	那発
289	雑貨	漢	金平	那発
204	雑貨	漢	那発	那発
275	雑貨	漢	那発	那発
287	雑貨	漢	那発	那発
305	雑貨	漢	那発	那発
306	雑貨	漢	那発	那発
309	雑貨	漢	那発	那発
215	雑貨	漢	那発	那発
208	雑貨	漢	勐拉	那発→勐拉→三棵樹
211	雑貨	漢	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪
273	雑貨	タイ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪→翁当
210	雑貨	ミャオ	那発	那発
201	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
205	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
230	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
296	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
250	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→阿得博→金平
311	衣料	漢	金平	那発→勐拉→銅場→阿得博→金平
252	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
253	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
254	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
255	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
256	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
257	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
259	衣料	漢	金平	那発→勐拉→三家道→阿得博→金平
222	衣料	漢	金平	那発→勐拉→金平
258	衣料	漢	金平	那発→勐拉→金平
293	衣料	漢	金平	那発→勐拉→阿得博→金平
274	衣料	漢	金平	那発
213	衣料	漢	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→者米
214	衣料	漢	勐拉	那発→勐拉→三棵樹
226	衣料	漢	勐拉	那発→勐拉→者米
212	衣料	漢	銅場	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
209	衣料	漢	那発	那発
203	衣料	ミャオ	金平	那発→勐拉→金平→銅場
197	衣料	ミャオ	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
198	衣料	ミャオ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪→螞・塘
202	衣料	ミャオ	勐拉	那発→勐拉
195	衣料	ミャオ	那発	那発
285	衣料	タイ	金平	那発→勐拉→金平
196	衣料	タイ		那発→勐拉→三棵樹→螞・塘
227	衣料	ハニ	金平	那発→金平

表7 那発の移動商人(2)

店番号	商品	民族	居住地	移動範囲
207	衣料	ハニ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪
206	衣料	ヤオ	那発	那発
229	靴	漢	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
228	靴	漢	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→金平
310	靴	漢	金平	那発→勐拉→銅場→阿得博→金平
223	靴	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
298	靴	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
247	靴	漢	金平	那発→勐拉→金平
278	靴	漢	金平	那発→勐拉→金平
233	靴	タイ	勐拉	那発→勐拉→三棵樹→者米
263	金物	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
238	金物	漢	金平	那発→勐拉
246	タバコ	漢	金平	那発
221	タバコ	漢	金平	那発→金平
301	音楽テープ・CD・VCD	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
279	音楽テープ・CD・VCD	漢	金平	那発→銅場→金平
224	音楽テープ・CD・VCD	ハニ	金平	那発
282	薬	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
219	薬	漢	金平	那発→金平
241	種	漢	金平	那発→勐拉→銅場→三家道→阿得博→金平
240	駄菓子	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平
280	種	漢	金平	那発→銅場→金平
237	種	漢	金平	那発
299	時計修理	漢	金平	那発→勐拉→銅場→金平

発→勐拉→銅場→三家道→金平または那発→勐拉→銅場→阿得博→金平と5ヶ所で市をだす移動商人、那発→勐拉→銅場→大寨→沙衣坡→金平と6ヶ所で市をだす移動商人が各1店となる。

このように金平に居住する雑貨店を営む移動商人は、金平を中心として金平の南の那発、勐拉の市と、西にたつ銅場、三家道、そして北にたつ阿得博、大寨、沙衣坡の市を選択しながら移動していることがわかる(図6)。一方、勐拉到に居住し雑貨商を営む移動商人は、那発を第1日目とした場合、那発→勐拉→三棵樹→蕎菜坪と那発の西の市を回り、金平を拠点とする移動商人とは市の選択範囲が異なる。

衣料を扱う39店の移動商人のうち、32店について経営者の民族、居住地、移動する市の範囲がわかった(写真13)。内訳は漢族(22店、69%)、ミャオ族(5店、16%)、タイ族(2店、6%)、ハニ族(2店、6%)、ヤオ族(1店、3%)である。このうち金平に居住する移動商人は21店(70%)で、以下勐拉を拠点とする移動商人が6店(20%)、那発を拠点とする移動商人が3店(10%)となる。雑貨商を営む移動商人と比較すると、衣料を扱う移動商人もやはり金平に居住するものが最も多いが、那発を拠点とする移動商人は少ないことが指摘できる。

雑貨を売る移動商人と同様に、那発に居住し衣料を販売する露店商人は、他の市にでかけ露店をだすことはない。一方、金平に在住する移動商人のうち、那発→勐拉→三家道→阿得博→金平と5ヶ所で露店をだす移動商人が7店と最も多い。以下、那発→勐拉→銅場→金平の4ヶ所で露店をだす移動商人が4店、那発→勐拉→金平の3ヶ所で露店をだす移動商人が3店、那発→勐拉→銅場→阿得博→金平の5ヶ所で露店をだす移動商人が2店、那発→勐拉→銅場→三家道→金平の5ヶ所で露店をだす移動商人が2店、那発→勐拉→銅場→三家道→金平、または那発→勐拉→銅場→三家道→

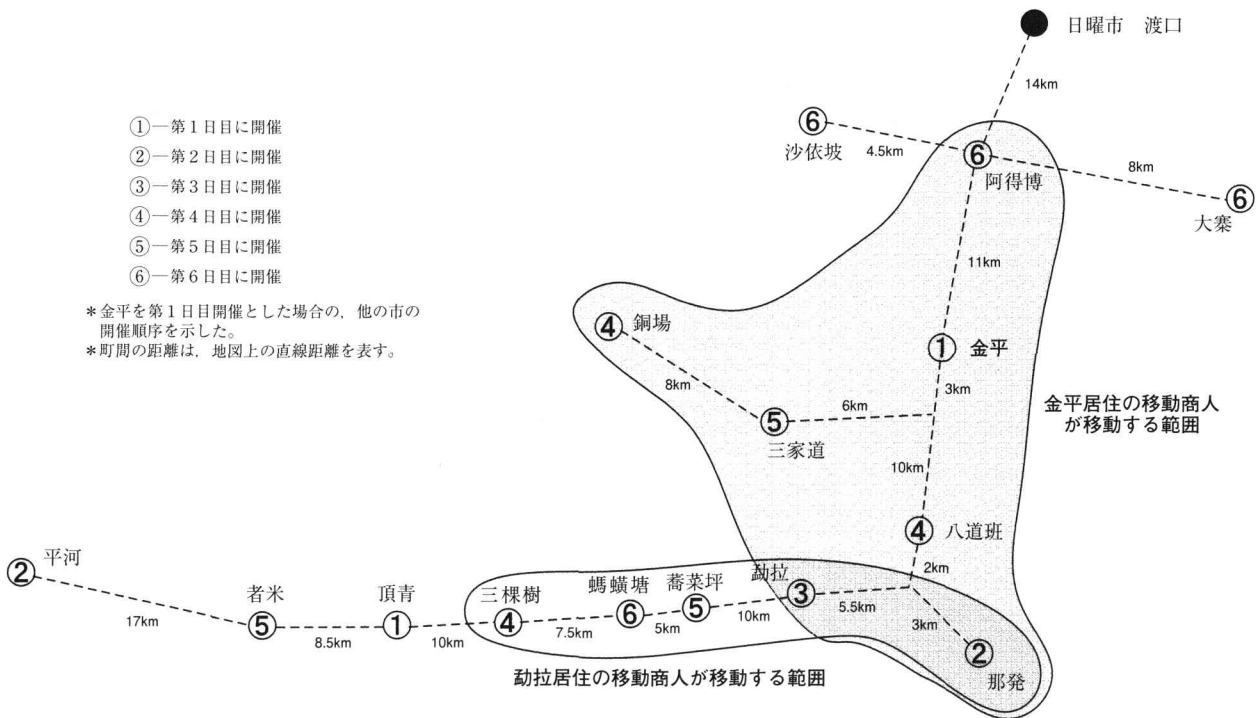


図6 金平居住と勸拉居住の移動商人が移動する範囲

金平の5ヶ所で露店をだす移動商人が各1店となる。

一方勸拉を拠点する移動商人は、那発→勸拉→者米、那発→勸拉→三棵樹、那発→勸拉→三棵樹→者米、那発→勸拉→三棵樹→蕎菜坪、那発→勸拉→三棵樹→蕎菜坪→蚂蟥塘を周る。このように雑貨の移動商人と同様に、勸拉を拠点とする移動商人は、那発より西側の街道でかつ市を選択しており、金平を拠点する移動商人と異なった移動範囲であることが指摘できる。

また金平に居住し雑貨と衣料を扱う2つの種類の移動商人の移動範囲を比較すると、雑貨を扱う移動商人のうち、最も多いのは那発→勸拉→銅場→金平という4ヶ所を移動するのに対して、衣料を扱う移動商人は、那発→勸拉→三家道→阿得博→金平の5ヶ所を移動する。金平、勸拉、那発という3ヶ所は雑貨と衣料を扱う移動商人が共通して露店をだす市だが、雑貨商人は銅場を、衣料商人は三家道と阿得博を廻りそれぞれにルートが異なる。このように移動商人は扱う商品によっても、移動する範囲が異なることが指摘できる。

③……………金平の常設市と6日ごとの市

1 金平の町

金平の町と常設店

金河鎮に所在する金平は、東西およそ5km、南北およそ10kmの南北に長い谷のほぼ中央に位置し海拔はおよそ1200mを測る。町の正式名称は金河鎮であるが、一般に「金平」と呼ばれ、金平県の人民政府がおかれている（写真14）。金河鎮の面積は、およそ11.92平方kmあり、107の自然村がある。民族は、ハニ、ミャオ、ヤオ、イ、ジョワン、漢族が居住する。金平の名称が示すように、金河鎮では明代からすでに金と銅が発見され、漢族が鉱山の開発のため雲南省以外から移り住んだ歴史をもつ。現在の町の人口はおよそ3万人を数える。

町は南北に長い谷の西側斜面に位置し、町の中心街は南北におよそ700m延びる道路沿いに広がる（図7）。町の中心部に位置する金運賓館を取り囲むように楕円形の道路が走るが、この内部が旧市街であり民国時代まで道路の部分に城壁が設けられていた。

金平の町には、4つの市場がある。いずれも「農貿市場」と呼ばれ、名称からは区別されていないため、北から仮に「北常設市場」、「中央野菜常設市場」、「果実常設市場」、「南定期市場」と名づけておく。北常設市場は、肉、野菜などを販売する常設市場である。中央野菜常設市場は野菜を、果実常設市場は果実だけを専門に売る常設市場である。そして町の南のはずれに位置する南定期市場で、6日ごとの市が開催される。定期市は従来町の中央に位置する金運賓館周辺で開催されていた。しかし市日ごとに道路沿いに露店がたつことによって激しい交通渋滞が引き起こされることが問題になり、2001年に6日ごとの市専用の開催場所である「南定期市」が新設された。

2 常設店と常設市場

金平の町の北端に位置する金烟賓館から、南端の南定期市場までのおよそ700mの区間の道路沿いに、およそ350店の常設店が並ぶ（図7、表8、写真15）。常設店を日用品、趣味・趣向、食料品、飲食、サービス、仲買、病院、薬というカテゴリーに分類すると、店舗数が最も多いのは、服（61店、17.3%）であり、以下多い順に列挙すると、日用品中心の雑貨（39店、11.1%）、食堂⁽¹²⁾（36店、10.2%）、電化製品（18店、5.1%）、食品中心の雑貨（16店、4.5%）、靴（16店、4.5%）、携帯電話（14店、4.0%）、薬（11店、3.1%）となる（表1）。

常設店のカテゴリーごとの分布をみると、食料品を扱う雑貨店は、東常設市場入口付近や（No 43～47）、中央野菜常設市場のやはり入口付近（No 281～285）に集中する（図7）。また食堂も市場周辺に集中する傾向がみられる（東常設市場のNo 39～42、中央野菜常設市場のNo 264～280、写真16）。このように常設市場の入口付近では特定のカテゴリーの店が集中するが、南定期市場の入口付近ではこのような様相は認められない。

中央野菜常設市場と果実常設市場は、それぞれ野菜と果実を専門に販売する店舗が集まった常設市場である（写真17）。中央野菜常設市場では、29店の常設店がある（2005年9月1日現在）（図

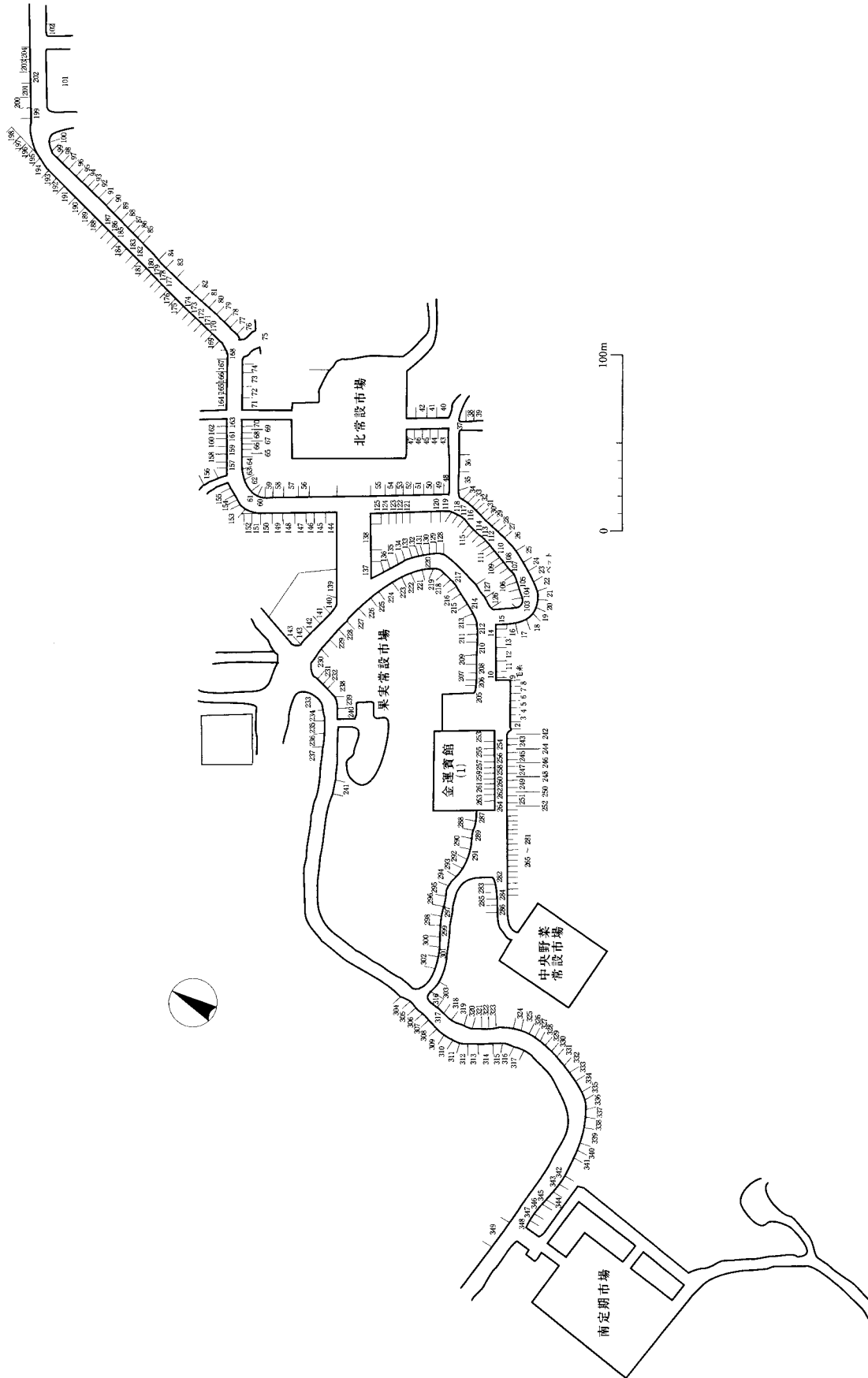


図7 金平の町並 (常設店と市)

表8 金平の常設店(1)

No.	店の種類
1	金運寶館
2	バスチケット売り場
3	クリーニング
4	アクセサリー
5	薬屋
6	ゲーセン (テレビゲーム型)
7	ゲーセン (テレビゲーム型)
8	家具
9	毛糸
10	雑貨
11	雑貨
12	雑貨
13	パン・菓子
14	雑貨 (食)
15	服
16	雑貨
17	雑貨 (食)
18	雑貨 (食)
19	飼料
20	服 (子供)
21	食堂
22	服
23	ベッド
24	衛生院
25	病院
26	書店 (中華書店)
27	服
28	靴
29	雑貨 (食)
30	服
31	アクセサリー
32	美容院
33	雑貨
34	服・寝具
35	金物
36	烤鴨
37	食堂
38	食堂 (牛肉専門店)
39	食堂 (羊肉専門店)
40	食堂 (米線等軽食)
41	食堂 (米線等軽食)
42	食堂 (米線等軽食)
43	雑貨 (食)
44	雑貨 (食)
45	雑貨 (食)
46	雑貨 (食)
47	雑貨 (食)
48	床屋
49	薬屋
50	家庭電器・自転車・雑貨
51	服
52	レストラン
53	タバコ (刻み)
54	雑貨
55	雑貨
56	服・靴
57	家庭電器・雑貨 (食)
58	美容院
59	鳥かご・楽器
60	アクセサリー
61	服
62	薬屋
63	服
64	雑貨
65	食堂
66	オモチャ
67	オモチャ
68	ゲーセン (テレビゲーム型)
69	ゲーセン (テレビゲーム型)
70	洋服の仕立屋
71	寝具

No.	店の種類
72	服
73	雑貨
74	写真館, 現像
75	金平県人民病院
76	雑貨
77	予防中心
78	床屋
79	服
80	招待所
81	携帯電話
82	家庭電器
83	美容院
84	雑貨
85	ゲーセン (テレビゲーム型)
86	牛乳
87	携帯電話
88	服
89	金物
90	携帯電話
91	カーテン
92	家庭電器
93	漢方
94	信用金庫
95	パソコン
96	電器製品修理
97	歯医者
98	雑貨
99	カーテン
100	カーテン
101	金煙寶館
102	化粧品
103	雑貨
104	服
105	服
106	服
107	服
108	靴
109	服
110	服
111	服
112	服
113	服
114	薬
115	靴
116	服 (子供), 下着
117	服 (女性)
118	靴
119	アクセサリー
120	雑貨
121	家庭電器・食器
122	喫茶店
123	食器
124	靴・服
125	雑貨
126	靴
127	農業銀行
128	寝具
129	カーテン
130	ぬいぐるみ
131	携帯電話
132	文房具
133	時計・靴
134	牛乳
135	化粧品
136	寝具
137	薬
138	レストラン
139	家庭電器
140	服
141	服
142	家庭電器

No.	店の種類
143	スーパー
144	服
145	家庭電器
146	家庭電器
147	家庭電器
148	服
149	薬
150	服
151	服
152	靴
153	文房具
154	レストラン
155	食堂
156	食堂
157	化粧品
158	靴
159	パン・菓子
160	薬
161	CD・VCD・DVD
162	食堂 (米線等軽食)
163	靴
164	招待所
165	靴 (女性)
166	ベビー用品
167	カーテン
168	化粧品
169	服
170	食堂
171	服
172	靴
173	雑貨
174	服
175	携帯電話
176	服
177	看板 (広告)
178	服
179	服
180	携帯電話
181	ガラス
182	書店
183	靴
184	果実
185	靴
186	靴
187	服 (女性下着, 小物)
188	古着売買
189	セメント・スレート
190	DVD・CD・VCD
191	服
192	ガラス
193	服
194	携帯電話
195	DVD・CD・VCD
196	雑貨
197	床屋
198	美容院
199	靴
200	服 (女性)
201	歯医者
202	金物
203	ゲーセン (テレビゲーム型)
204	美容院
205	雑貨
206	雑貨 (食)
207	食堂 (豆乳・油条)
208	毛糸
209	雑貨・台所用品
210	信用金庫
211	化粧品
212	化粧品
213	携帯電話

表8 金平の常設店(2)

No.	店の種類	No.	店の種類	No.	店の種類
214	携帯電話	264	毛糸・雑貨	307	建築資材
215	服(子供)	265	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	308	雑貨
216	観賞用魚・水草	266	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	309	雑貨
217	化粧品	267	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	310	雑貨
218	メガネ	268	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	311	雑貨
219	携帯電話	269	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	312	雑貨
220	寝具・カーテン	270	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	313	水道工事
221	服(子供)	271	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	314	家庭電器・電器工具類
222	菜屋	272	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	315	飼料
223	駄菓子	273	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	316	建築資材
224	銀行	274	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	317	飼料
225	服(子供)	275	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	318	雑貨(食)
226	郵便局	276	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	319	雑貨
227	服・靴	277	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	320	駄菓子
228	服	278	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	321	金物
229	服	279	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	322	飼料
230	百貨商場	280	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	323	雑貨
231	菓	281	食堂(昼食堂, 夜焼烤屋)	324	雑貨
232	金物	282	雑貨(食)	325	DVD・CD・VCD
233	建設資材	283	雑貨(食)	326	携帯電話
234	家庭電器・工具	284	雑貨(食)	327	靴
235	靴	285	雑貨(食)	328	自動車部品
236	食堂	286	雑貨(食)	329	電器部品
237	飼料	287	雑貨	330	寝具
238	ゲーセン(テレビゲーム型)	288	服	331	携帯電話
239	印刷所	289	家庭電器	332	飼料
240	建設資材	290	靴	333	食堂
241	看板(広告)	291	雑貨・食器	334	携帯電話
242	服	292	雑貨・食器	335	食堂
243	雑貨	293	家庭電器・台所用品	336	工具
244	食堂(米線等軽食)	294	家庭電器・調理用具・食器・台所用品	337	携帯電話
245	服・靴	295	家庭電器・台所用品	338	飼料
246	服	296	家庭電器・台所用品	339	病院
247	服	297	家庭電器・台所用品	340	駄菓子
248	服	298	食堂	341	箸
249	服	299	酒(量り売り)	342	菓
250	服	300	食堂	343	セメント
251	服	301	床屋	344	看板(広告)
252	服	302	ミャオ服専門店	345	服
253	服	303	DVD・CD・VCD	346	雑貨
254	帽子	304	雑貨	347	雑貨
255	雑貨	305	建築資材	348	雑貨
256	雑貨	306	雑貨	349	ガソリンスタンド
257	雑貨				
258	雑貨				
259	服・靴				
260	服・靴				
261	服・靴				
262	DVD・CD・VCD				
263	雑貨				

* 「化粧品」はシャンプー、リンス、石けん等の洗面用品も含む。
 * 「食堂」と「レストラン」の違いは、食堂が厨房と客室に未分離。材料を選んで調理を頼む。ウェイトレスが制服を着ていない。メニューがない。レストランはその反対の条件を備えている。
 * 「美容院」と「床屋」の違いは、美容院は少し高級で、おしゃれな女性、若者がいく。床屋は子供からお年寄りまで可能な店。

表9 中央常設野菜市場

No.	野菜の種類	店舗数	No.	野菜の種類	店舗数
1	ハクサイ	15	19	ゴウヤ	3
2	青トウガラシ	14	20	ダイズ	3
3	セロリ	9	21	ジャガイモ	3
4	トマト	8	22	タケノコ	2
5	ネギ	8	23	ピーマン	2
6	ナス	7	24	マコモ	2
7	キャベツ	7	25	コリアンダー	2
8	カボチャ	6	26	空心菜	2
9	ササゲ	5	27	白花菜	1
10	キュウリ	5	28	へちま	1
11	ショウガ	4	29	シダ	1
12	ニラ	4	30	ハッカ属(地交)	1
13	タマネギ	4	31	セリ	1
14	ダイコン	4	32	レンコン	1
15	トウガラシ	3	33	トウガン	1
16	ミント	3	34	ウオーズン	1
17	青菜	3	35	クワイ	1
18	エンドウ	3			

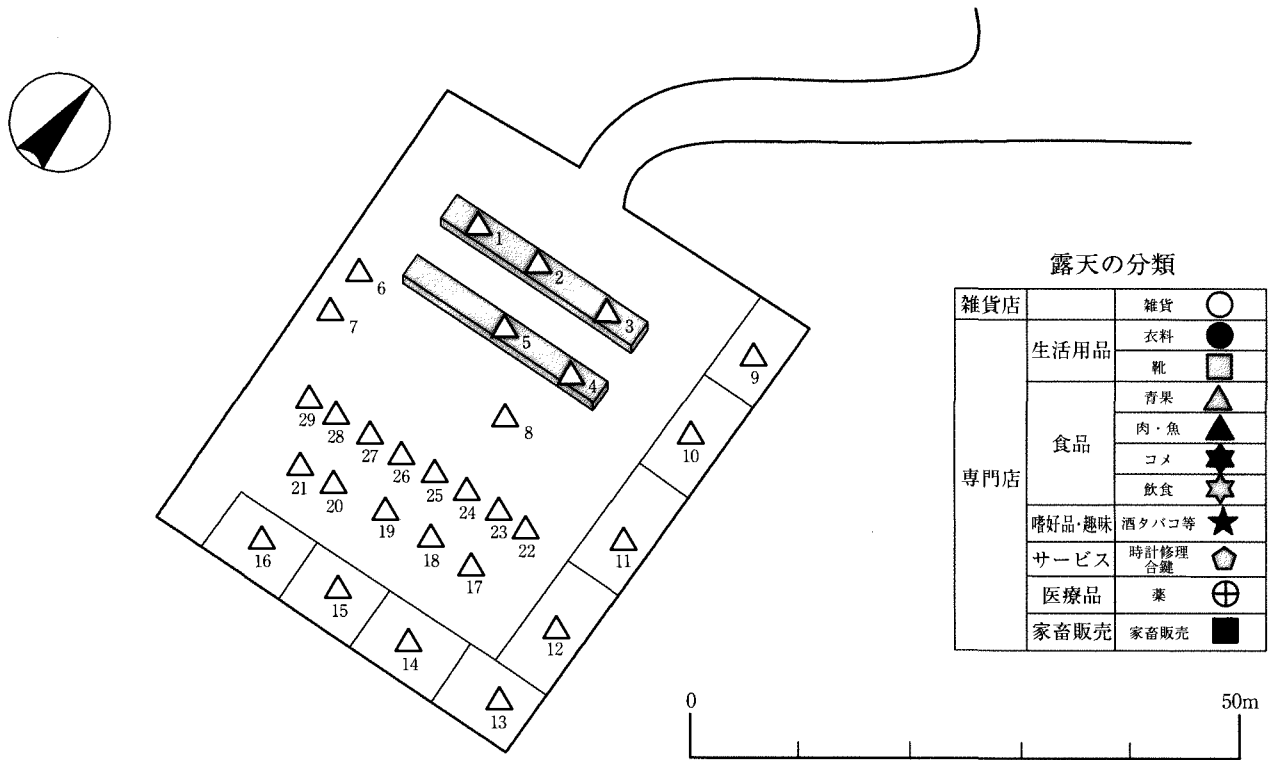


図8 中央野菜常設市場

8)。これらの店で販売されている野菜は、35種類を数える。最も多くの店で販売されているのがハクサイ（15店）であり、以下多い順に青トウガラシ（14店）、セロリ（9店）、トマト（8店）、ネギ（8店）、ナス（7店）、キャベツ（7店）、カボチャ（6店）、ササゲ（5店）、キュウリ（5店）、ショウガ（4店）、ニラ（4店）、タマネギ（4店）、ダイコン（4店）となる（表9）。中央野菜常設市場で販売されているすべての野菜は、金平周辺で生産されたのではなく、通海周辺で生産したものである。⁽¹³⁾ また販売しているのはいずれも金平周辺の農民ではなく、多くが漢族で野菜販売を専業としている。

果実常設市場では20店の常設店があり、20種類の果実が売られていた。このうち最も多くの店で販売しているのが、リンゴであり14店を数える。以下、ナシ（11店）、ザクロ（9店）、ミカン（5店）、ブドウ（4店）、モモ・ドラゴンフルーツ・パンレイシ（2店）、ザボン・キーウィ・マンゴウ（各1店）となる。

3 南定期市場

露店の分布と分類

市街地の南端に位置する南定期市場は、東西およそ70m、南北およそ100mの広さをもつ(図9)。市場の東側には、逆L字形の回廊(「移動商人通」と呼ぶ。写真18)があり、その道路沿いには縦割り長屋風の平屋の建物が並ぶ。市場の中央は広さが50×70mあり、その上は屋根で覆われている(中央広場と呼ぶ、写真19)。市場には北からと、東南から入る2つの入口がある。露店は、中央広場、商人通だけではなく、東南から南に延びる道路沿い(「坂道通」と呼ぶ。写真20)にたつ。2006年9月1日にたつた露店は、360店である。このうち坂道通にたつた市は64店を数え、子ブタ(No.1)、背負い籠(No.2, 5~10, 16~30, 写真21)、薬草(No.31~39, 40, 写真22)、タバコ(No.59~64)といった同じカテゴリーの商品を扱う露店がグループを作りながら分布している。

南定期市場内の移動商人通は、雑貨や衣料を販売する店が入っている。那発の市の分析で述べた、金平に居住する移動商人の多くが、この場所を拠点にしている。平屋の店は商品を保管するための倉庫の役割を兼ねており、市がたつ日にだけ露店をだす。主として雑貨と衣料を扱う露店が、移動商人通に集中する(No.69~97, 344~360)。

中央広場の南側にはコンクリート製の台(高さおよそ1m、幅およそ1.2m、長さおよそ30m)が2つ設置してあり、ブタ肉売り場になっている(No.137~154)。飲食店は、肉売り場の南側、中央広場の南端に集中して出店し(No.98~102, 129~136, 158~164)。肉売り場の北側では、コメを売る露店が集中する(No.221~278, 280, 写真23)。そして中央広場の西側(No.165~173, No.174~195, No.196~213)と中央広場の北側から市場入口付近(No.289~343)、それに中央広場の東南部分(No.103~120, No.123~127)に野菜を販売する露店が分布する(写真24, 写真25)。このように露店は商品のカテゴリーによってグループを作りながら分布しているという特徴が指摘できる。

露店を特定のカテゴリーの商品の販売や、サービスをおこなう専門店と雑貨店で分類すると、専門店は339店(94.2%)、雑貨店は21店(5.8%)を占める(表2)。専門店では食品に関する露店が228店と最も多く、全体の63.3%を占める。以下、生活用品(61店, 16.9%)、医療品(29店, 8.1%)、家畜販売(11店, 3.1%)、嗜好品・趣味(10店, 2.8%)という比率であった。

食品を専門に販売している露店の内訳は、野菜(109店, 30.0%)、食材(69店, 19.2%)、飲食店(24店, 6.7%)、肉屋(18店, 5.0%)、果物(5店, 1.4%)、駄菓子(3店, 0.8%)の順であった。

生活用品を専門に販売している露店のうち、扱っている商品は衣料・靴・洗面用具・ライター・金物・布・籠・メガネ・健康器具・時計・寝具の11種類である。店数の多いものから、籠(22店, 6.1%)、衣料(18店, 18%)、布(7店, 1.9%)、靴(6店, 1.7%)、金物(2店, 0.6%)、洗面具・ライター・メガネ・健康器具・時計・寝具(各1店)となる(写真26, 写真27)。

その他の嗜好品・趣味に関わる店の内訳は、タバコ(7店, 1.9%)、音楽テープ・CD・VCD(3店, 0.8%)となる。また家畜販売は、11店(3.1%)を占めた。

青果・コメ

野菜・果実を販売した露店は、109店を数えるが、このうち民族ごとの内訳は、ハニ族が49店

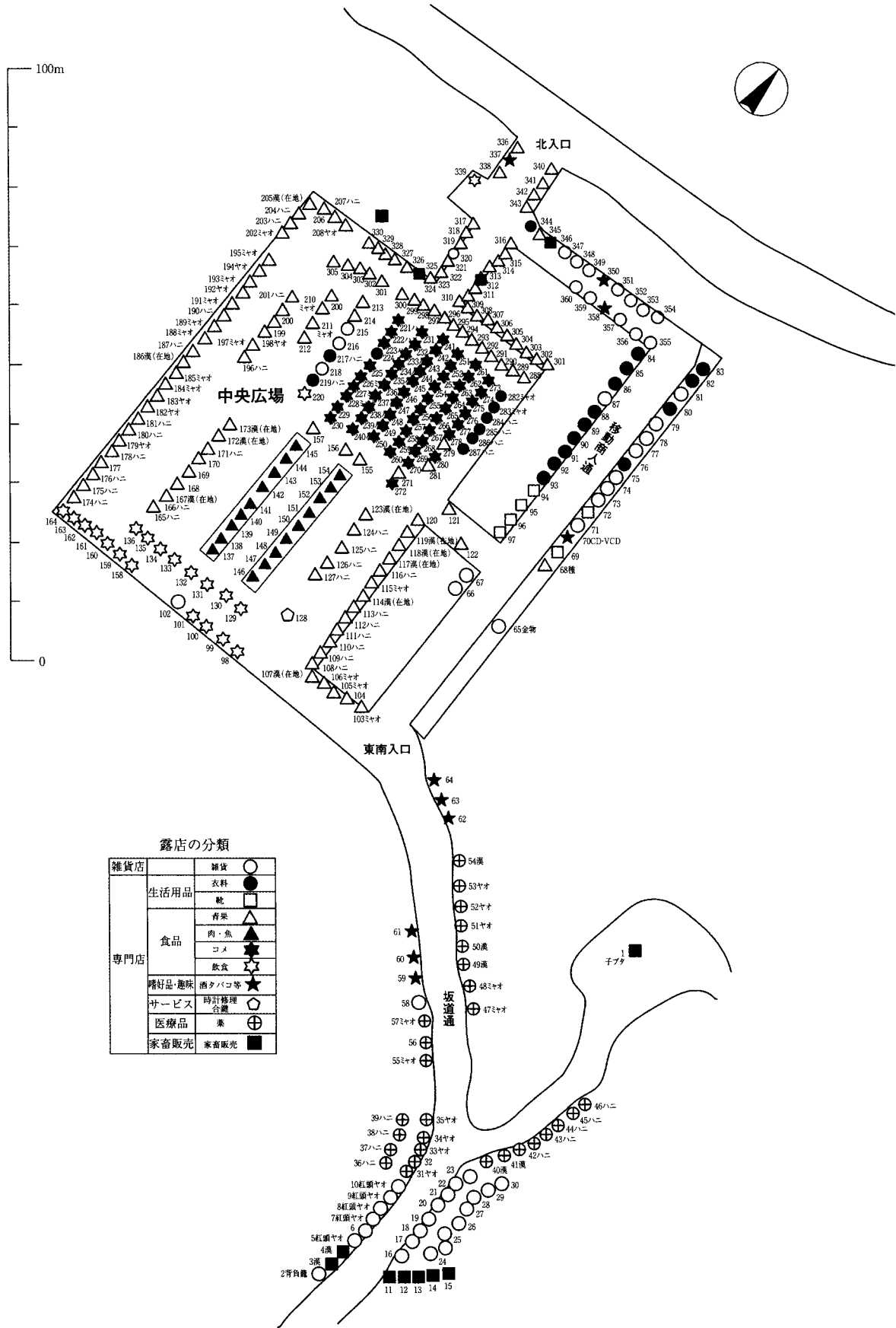


図9 南定期市場 (金平)

(45.0%)と最も多く、以下ミャオ族(15店, 13.8%), 漢族⁽¹⁵⁾(在地)(14店, 12.8%), ヤオ族(11店, 10.1%), 不明(20店, 18.3%)となる。

南定期市場で販売されていた野菜の種類は63種類である。このうち多い順に10位までを列挙すると、ショウガ(21店), ヘチマ(18店), サンショウ(17店), トウガラシ(15店), バンジロウ(12店), カボチャ(11店), タケノコ(11店), サトイモ(ミズイモ)の茎(10店), ドクダミ(9店), キュウリ(9店)となる(表10)。

露店をだした店数が最も多いハニ族は、49種類の野菜を販売していた。このうち多い順に列挙すると、ショウガ(12店), サンショウ(9店), バンジロウ(7店), カボチャ・タケノコ・キュウリ・未同定種(緑色で丸く苦い)・モヤシ(各6店), ヘチマ・カボチャの蔓(各5店), パパイヤの花(4店)ハッカ属1(現地名, 地交)(4店)となる。

またハニ族が販売する49種類の野菜のうち、ゴウヤの蔓, 野生のコリアンダーの花, 野生のコリアンダーの茎, サトイモ(ミズイモ)の花, ハッカ属2, トマト(現地名, 樹蕃, 小さい), ダイコン, エンドウ, カンコノキ(現地名, 甜菜), クワレシダ, ツルムラサキ, ハイイモの茎, キャベツ, セロリ, マランタの15種類は, 他の民族が扱わない。

ミャオ族は18種類の野菜を売っていたが, 多い順にサトイモ(ミズイモ)の茎(7店), ショウガ(4店), 洋ヘチマ・トウガラシ(各4店), バンジロウ・野生のユリ(各3店)カボチャ・パパイヤの花・ササゲ(各2店)となる。そしてハスイモの茎, キノコ(種不明), イチジク, バナナの花(芭蕉)は他の民族が扱わない種類の野菜である。

ヤオ族は17種類の野菜を扱っていたが, 多い順にヘチマ(5店), タケノコ(4店), バンジロウ, ニラ, ドクダミ, ネギ(各2店)となる。そしてヤオ族しか扱わないものとして, ラッキョと空心菜があげられる。

漢族(在地)は24種類の野菜を扱っていたが, 多い順にサンショウ(5店), ショウガ(4店), ヘチマ・カボチャ・キュウリ・青菜(各3店), セリ・ピーマン(各2店)となる(写真28)。また漢族しか扱わない野菜として, ピーマン, サツマイモの葉, チシャ, イノクグチ, キャッサバ, シロイモの茎があげられる。このように販売されている野菜は, 各民族によって異なっていることが指摘できる。

南定期市場では, コメを販売する露店が58店たった。このうちハニ族の店が48店(82.8%), ミャオ族(3店, 5.2%)と, ハニ族が全体の8割を占める。いずれも金平周辺の農民であり, 自家米の販売をおこなっていた。

市日の人の動き

6日ごとの市の当日は, 午前8時ごろより南定期市場に人びとが集まりはじめる。このころ中央野菜常設市場や果実市場の人出は少ない。周囲の村からやってくる人びとは, 乗り合いトラックやトラ⁽¹⁶⁾ジーで直接北入口に乗りつけるか, 市街中心部の金運賓館にあるバスセンターまでバスでやってきてここから歩いて南定期市場に来る。そのため金運賓館から南定期市場までの道路は, 人びとの長い行列ができあがる(写真29)。南定期市場における滞留人数のピークは, 午前10~11時ごろである。北入口は身動きがとれなくなるほど混雑する。つまり朝の市のはじまりから午前11時ごろまでの人の流れは, 南定期市場へと向かうことになる。

表10 南定期市場の野菜

	青果の種類	ヤオ	ミャオ	ハニ	漢 (在地)	不明	計
1	ショウガ	1	4	12	4		21
2	洋糸瓜 (洋へちま)	5	4	5	3	1	18
3	サンショウ		1	9	5	2	17
4	トウガラシ		4	2	1	8	15
5	バンジロウ	2	3	7			12
6	カボチャ		2	6	3		11
7	タケノコ	4		6		1	11
8	サトイモ (ミズイモ) の茎		7	3			10
9	ドクダミ	2		2	1	4	9
10	キュウリ			6	3		9
11	パパイヤの花		2	4		1	7
12	カボチャの蔓	1		5		1	7
13	未同定種 (緑色で丸く苦い)		1	6			7
14	野生のユリ		3	3		1	7
15	モヤシ			6	1		7
16	ニラ	2		3		1	6
17	ネギ	2		2	1		5
18	青菜			2	3		5
19	ハッカ属1 (現地名, 地交)	1		4			5
20	野生のコリアンダー		1	2	1		4
21	ササゲ		2	1	1		4
22	セリ, セリ科			1	2		3
23	ヒマワリの種			2		1	3
24	ナス			2	1		3
25	タデ, タデ属			2	1		3
26	パパイヤ	1		1			2
27	ゴウヤ	1		1			2
28	コリアンダー	1			1		2
29	サトイモ (ミズイモ)		1	1			2
30	ピーマン				2		2
31	バナナ		1	1			2
32	モモ (在来)			2			2
33	ハクサイ			1	1		2
34	ミント	1		1			2
35	落花生					2	2
36	シダ	1		1			2
37	空芯菜	1					1
38	ゴウヤの蔓			1			1
39	マクワリ					1	1
40	ハチの子	1					1
41	ハスイモの茎		1				1
42	キノコ (種不明)		1				1
43	イチジク		1				1
44	野生のコリアンダーの花			1			1
45	野生のコリアンダーの茎			1			1
46	サトイモ (ミズイモ) の花			1			1
47	バナナの花 (芭蕉)		1				1
48	チシャ				1		1
49	サツマイモの葉				1		1
50	ハッカ属2			1			1
51	トマト (現地名, 樹蕃, 小さい)			1			1
52	ダイコン			1			1
53	エンドウ			1			1
54	カンコノキ (甜菜)			1			1
55	クワレシダ			1			1
56	ツルムラサキ			1			1
57	ハイイモの茎			1			1
58	ラッキョ	1					1
59	キャベツ			1			1
60	セロリ			1			1
61	マランタ			1			1
62	イノクグチ (ワサビ) ?				1		1
63	空芯菜				1		1
64	キャッサバ				1		1
65	シロイモの茎				1		1
66	未同定野菜			1			1

※種の同定は宮崎卓による。

ところが午前11時をすぎると、南定期市場で野菜、野草、籠などを売っていた村人や買い物客の流れが、町の中心部へと向きを変える。彼らが向かう先は、中央野菜市場や果実常設市場、それに市街中央部の金運賓館から町の北端に位置する金烟賓館の道路沿いに立ち並ぶ常設店である。生活用品を買うためであるが、野菜中央市場は、午前11時をすぎると南定期市場で野菜を売り終わったハニ、ヤオ、ミャオ、漢（在地）が、ハクサイ、ダイコンなど外部から持ち込まれ彼らが生産しない野菜を大量に買うために混雑する（写真30）。

④……………考察

1 那発の市の特質と移動商人

那発と金平の市の特質を、者米谷で開催される者米、平河、頂青、三棵樹、螞蟻塘の5つの市と比較しながら抽出したい。那発に定住しているのは数百人程度で、主な職業は派出所・税関・小学校の教員などの公務員と、ホテル、食堂、商店などを経営する商人であり農民は居住していない。また那発は、ヴェトナムとの交易を目的として解放後に建設されたという歴史をもつ。

那発では市日に311店の露店がたつた。者米谷では者米が毎回の市日ごとにおよそ300店前後の露店がたつことから、那発の市とほぼ同じ程度の規模をもつ。2つの市で販売されている商品进行分类して比較すると、者米の市でしか販売しない商品の特徴として、衣料類ではハニ族の服やヤオ族が装飾に使うボンボリ（毛糸製）、それに寝具などがあげられる（表11）。

農具・工作道具類を比較すると、那発では投網、霞網などの商品を販売していたが、者米の市では販売されていなかった。そのかわり者米では罾猟に使う、イノシシ用の大型のトラップからネズミ用の小型のトラップまで各種のサイズが売られており、両地域の狩猟動物の対象と方法の違いが道具に現れていると考えられる。また那発では趣味・玩具類に分類した携帯ゲームや、そのソフトが販売されているのに対して、者米谷では販売されておらず、そのかわりにサイコロ、風船、ボー

表11 那発と者米の商品比較

	那発のみ売っていた商品	者米のみ売っていた商品
衣料	ファスナー、半ズボン、エプロン	麦わら帽子、ゴム手袋、ハニ族の服、服（軍隊迷彩服）、藍染めの布
アクセサリ・女性用品	目覚まし時計、ボタン、イヤリング	ボンボリ（ヤオ族アクセサリ）
農具・工作などの道具	釣り道具、水準器、投網、霞	トラップ（罾）
寝具		毛布、蚊帳、布団、枕、枕カバー
台所・食卓等	ライター、ライター用ガス、ピーラー、グラス（小、乾杯用）	
洗面・洗濯・掃除等・日常用品	抜き手、扇子、老眼鏡、自転車用の空気入れ、ハエ叩き	
文具	デイバック（子供用）	鉛筆、ノート、農歴の暦、手帳、辞書、練習帳
趣味・玩具	携帯ゲーム機、ゲームソフト	サイコロ、風船、ボール、パチンコのゴム、ビー玉、銅鑼

ル、パチンコのゴム、ビー玉などが売られていた。このような販売している商品の相違は、者米谷と那発との子供の遊びかたを如実に反映しているといえるだろう。しかし商品をカテゴリーごとに分類し、生活用品類と商品類の比率、生活用品類のなかでの商品群の構成、食品類のなかでの商品群の構成の3つについて比較すると、2つの市の商品構成にそれほど大きな差異は認められない(表5)。

次に市の露店をカテゴリーごとに分類して比較してみると、那発と者米グループに属する螞蟻塘、三棵樹、頂青、者米、平河の市では、食品類を販売する露店が、およそ40～50%を占めるのに対して、那発ではおよそ60%と多い(表12)。さらに食品類に分類した野菜・果物・肉屋・食材・魚屋・飲食・駄菓子⁽¹⁷⁾の各市の比率を比較すると、野菜と果実を販売する露店の比率は、那発も者米谷の市でもそれほど差異は認められない。ところが那発ではブタ肉・水牛肉を販売する露店が、食品類を販売する露店の21%と高い比率を占めることが指摘できる(表13)。そして者米谷の市では、ブタ肉の露店は一般的にはタイ族によってほぼ独占されているのに対して、那発ではヤオ族がおよそ70%近くを占めタイ族の店はわずか4店(11.1%)にしかすぎない。また野菜を販売している民族を比較すると、ハニ族が最も多く、タイ族は全体の露店のわずか2店(2.2%)しか出店していない。

つまり那発の市は者米谷の市と比較すると、食品類を販売する露店が多く、そのなかでも肉類を販売する露店が多いことが指摘できる。そして露店をだすのは、ブタ肉ではヤオ族が、野菜販売ではハニ族が中心であることがわかる。つまりタイ族は、市では主として商品を売るのではなく買う側であることが特徴だといえる。ではこうした市の特徴と民族ごとの市における活動の差異はなぜ生まれるのだろうか。

図10は那発周辺の村の民族ごとの分布と、那発の市にやってくる中国側の村のおよその範囲を示したものである。那発を中心として、その範囲は北東およそ7kmに位置する太陽寨から、南東はおよそ15km⁽¹⁸⁾に位置する南科周辺の村である。

この範囲には、ハニ族の村が8ヶ所、ヤオ族の村が13ヶ所、クーツォン族の村が3ヶ所、マン人の村が4ヶ所、イ族の村が1ヶ所、そしてタイ族の村が5ヶ所ある。ヴェトナム側からもハニ、ヤオ族と金族が市にやってくるが、その範囲や村の数は不明である。こうした少数民族の村以外に、勐拉河沿いに政府が管轄していた「農場」「ゴム農場」が8ヶ所ある。那発は海拔が低くパラゴムの育成に適しており、1950年代からこうした国営農場でパラゴムの栽培がはじまった。タイ族は1950年代まで水田でコメの二期作を、山の斜面で焼畑をおこなっていた。ところが1980年代以降の生産請負制に伴って、タイ族の各家はパラゴムを盛んに植えるようになる。また1990年代からは、水田での稲作の転作物としてバナナを植えるようになり、現在では那発周辺で水田稲作をおこなっているタイ族はほとんどいない。つまりタイ族はバナナとパラゴムの2種類の換金作物に特化した生業戦略をとっているといえる。

那発の市での売り手は、山地に居住する中国側のハニ、ヤオ、ミャオ族、それにヴェトナム側のハニ族である。一方、野菜と肉を主として買うのは、生業を換金作物に特化させ現金収入が周囲の少数民族と比較すると格段に高い中国側のタイ族と、そして給料生活者であり、やはり購買力が高い農場で働く農業労働者である。このことが民族による売り手と買い手の明確な差異を生み、タイ族と農業労働者の購買力の高さが肉を買う頻度を多くし、そのことが肉を販売する露店の多さと関

表12 各市の露店のカテゴリー分類

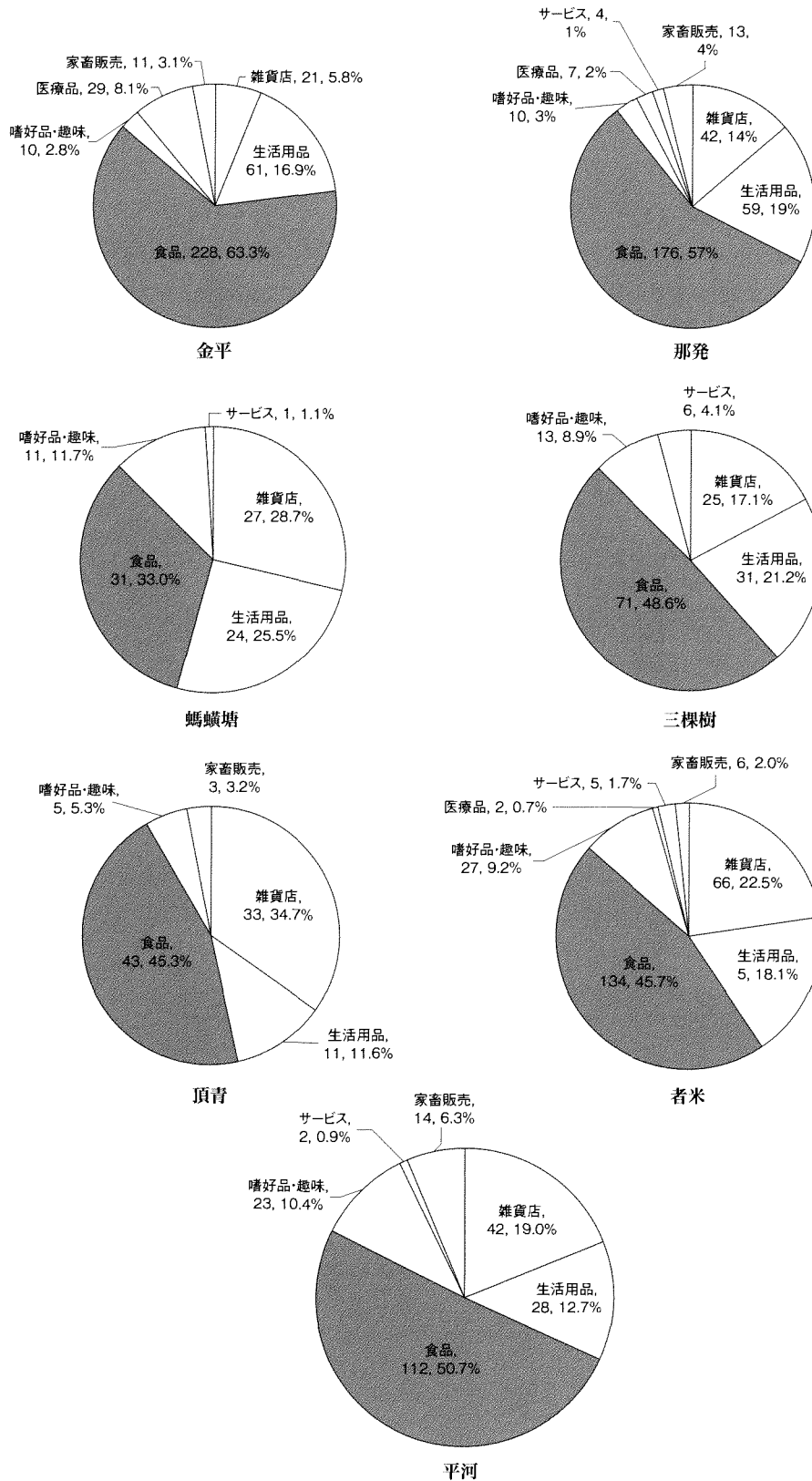
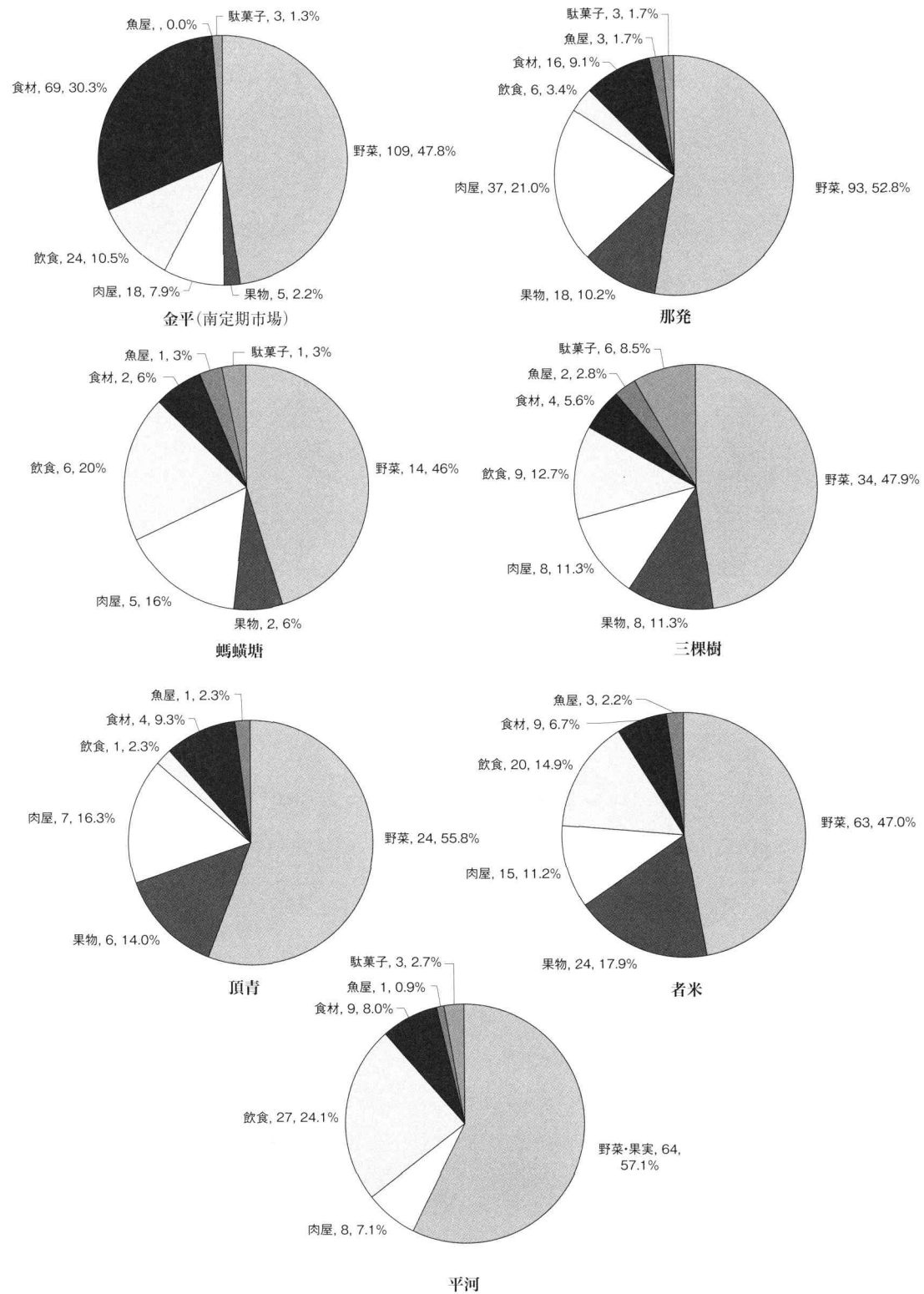


表13 各市の食品分類



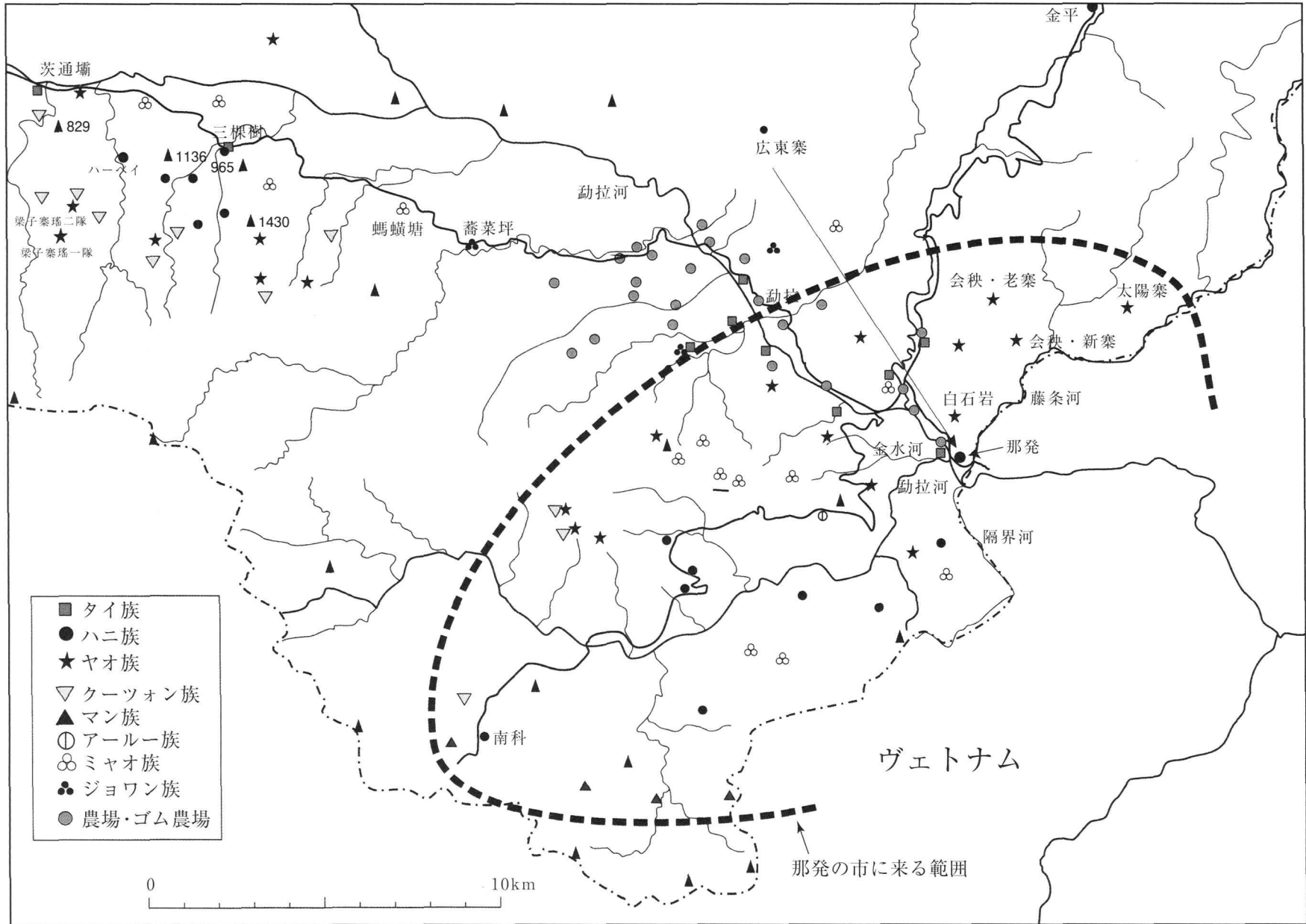


図10 民族分布と那発の市に来る範囲

係していると考えられる。

さて那発の市のもう一つの特徴は、ヴェトナムからやってくる少数民族が、市でさまざまな日常生活用品を買うことである。那発の市は者米とほぼ匹敵する規模をもちながら、常設店は31店と者米の84店のおよそ3分の1にしかすぎない。ところが2つの市で販売されていた商品の全種類は那発で268種、者米で321種類を数え両者に極端な差異はなく、那発の市でも一般的な日用品は問題なく購入できる。それを可能にしているのが移動商人の存在である。那発の移動商人の特徴は以下の4点にまとめられる。

1. 移動商人は漢族が9割以上を占める。
2. 金平に在住する移動商人が最も多く、移動しながら各市で露店をだす。那発在住の移動商人は移動しない。
3. 金平を拠点とする移動商人は、金平を中心とした、那発、勐拉、銅場、三家道、阿得博、大寨、沙衣坡の市を選択しながら移動する。一方、勐拉を拠点とする移動商人は、那発、勐拉、三棵樹、蕎菜坪と勐拉の西にたつ市を選択しながら移動する。このように移動商人が移動する範囲からみると、金平と、那発を拠点とする2つの移動商人グループが存在する。
4. 金平を拠点とする移動商人は、扱う商品（雑貨と衣料）によって、移動する範囲が異なる。

現在は金平県内への北の入口である渡口から、者米郷の西隣の緑春県に位置する平河までの街道沿いとその周辺の町と村で18の市がたつ⁽¹⁹⁾。渡口は日曜日ごとに市が開催されるが、その他の町や村では6日ごとに1回市がたつ。その日取りは太陽暦によってではなく、十二支をもとにして決定されている。例えば金平では、子の日と丑の日に市がたつ。子を第1日目とすると、次は第7日目の丑の日に市がたつ。つまり6日ごとに市がたつことになる。現在の金平県内でたつ市の日取りの関係を、金平を中心にみると、金平→那発→勐拉→八道班→三家道→阿得博という順で市がたつ。このなかで最も北に位置する阿得博と南に位置する那発とでは、およそ30キロの距離があるが、この街道沿いの各市は同日にたたないように日取りが設定されている。これを金平グループと呼んだ〔西谷2005a・b, 2006a〕。また者米の市を第1日目として、街道にたつ市の順序をみると、者米・蕎菜坪→螞蟻塘→頂青→平河；勐拉→三棵樹となる。者米と勐拉とはおよそ直線距離にして40kmあり、やはりこの間でも近接する市は日取りが重ならない。これを者米グループと呼んだ。勐拉の市は、金平の市グループにも属している。平河は金平県の西に位置する緑春県で開催されるのだが、この市の西南方向の街道に沿って、阿普、新寨、半坡で市がたつ。ただし半坡と阿普では6日ごとではなく、12日ごとに1回市がたつ。

移動商人は市日が重ならない市を選択し、移動しながら市で露店をだす。那発の市の分析から、移動商人には金平を拠点として移動するグループと、勐拉を拠点として移動する2つのグループが存在することがわかった。さらに者米谷には、者米を拠点としながら移動するもう一つの移動商人のグループが存在する。このグループは、者米、平河、頂青、三棵樹、螞蟻塘、勐拉で市をだし、その範囲以外の市は回らない（図11）。

金平の市を拠点する移動商人の数は、勐拉や者米などよりもはるかに多い。その理由は金平に物資が集散し商品の品揃えが容易なことと、金平を中心とした金平グループの市がたつ町や村は、道路が舗装され移動が容易だという2点が指摘できる。

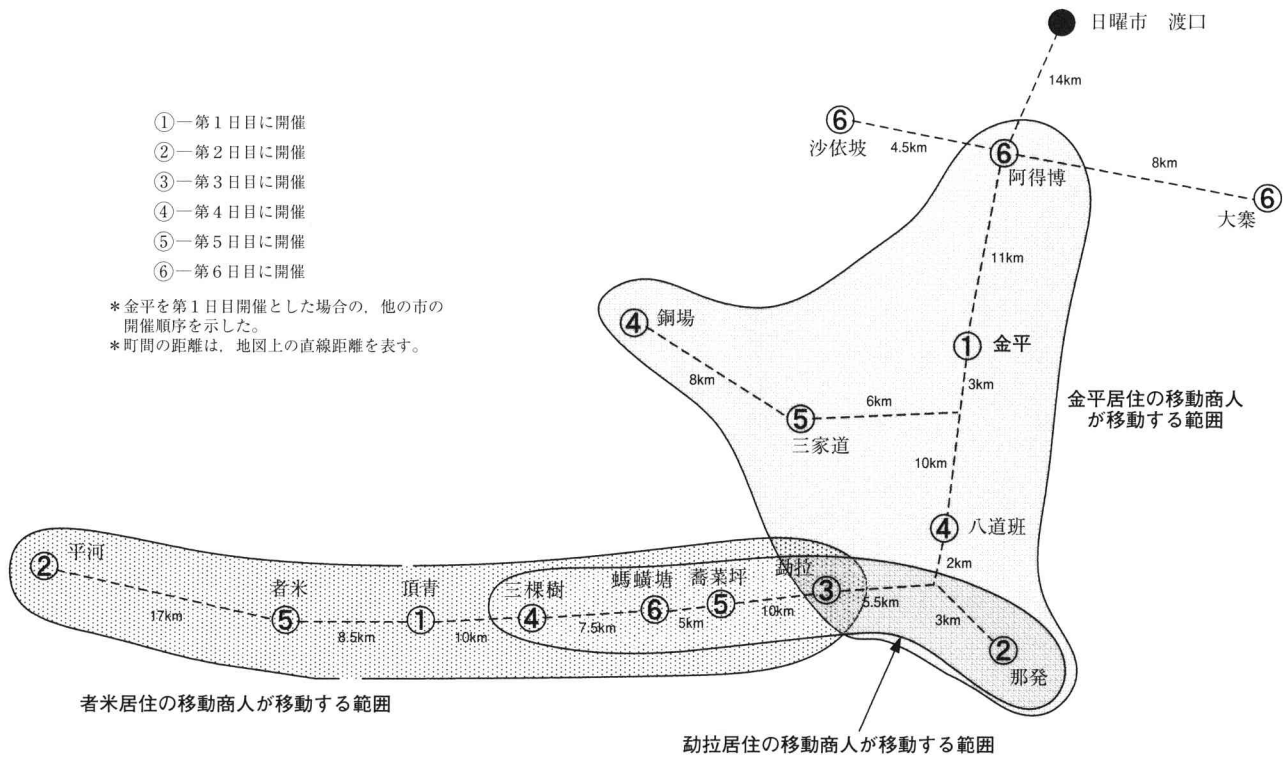


図11 者米, 劬拉, 金平居住の移動商人が移動する範囲

者米には、郵便局、診療所、農業銀行、農産物の仲買、郷の人民政府、中学校などの機関を備えているのに対して那発にはない。また那発は常設店が少なく、市日以外はほとんど店が開いていない。しかし金平や劬拉を拠点とする移動商人の活発な活動によって、6日ごとに1回たつ市日には者米規模の露店と商品内容をもった市の開催を可能しているといえる。

者米谷の6日ごとの市は、農民が住む町や村で開催される。しかし那発の市の分析結果は、周辺の村人が農産物をもって集合できる好条件の場が存在し、さらに移動商人が存在すれば、かなりの規模の市を成立させることが可能であり、村や町などびとの生活する場が市を開催する上での絶対条件ではないことを示唆している。

2 金平の定期市と常設市の特質

金平の市が他の村や町でたつ市と異なる最大の点は、金平には6日ごとに1回開催される市だけでなく、市街地に常設店が3ヶ所あり、しかもさまざまな商品を扱う専門店がメイン道路沿いにおよそ360店あり、日常的に営業していることである。むしろ金平はおよそ3万人の人口をもち、さまざまな常設店舗や常設市場が存在するにもかかわらず、6日ごとの市が今も機能している点に特徴があるといえる。

最初に露店のカテゴリーからその特質を探ってみたい。者米グループに属する蚂蟥塘、三棵樹、頂青、者米、それに平河では食品類を販売する露店が、およそ40～50%を占める。ところが金平では60%前後と高い。雑貨店の出店数を比較すると、者米グループがおよそ20～30%を占めるのに対して、反対に金平ではおよそ6%と低い(表11)。

ではなぜ金平の南定期市場で開催される6日ごとの市では、食品類に占める露店の比率が高く、雑貨や専門店の露店が少ないのだろうか。金平では360店の露店に対して、ほぼ同数の350店あま

りの常設店が市街の中心に立ち並ぶ。それに対して者米谷で市がたつ町や村では、常設店数は者米が84店、平河が22店、螞蟻塘・頂青が10店、三棵樹が7店と、最も多い者米でも金平の3分の1以下にすぎない(表1)。また金平は常設店数が他の町と比較すると多いだけでなく、その専門店の種類も多い。例えば金平以外では常設店が最も多い者米と比較すると(表1)、者米の専門店が23種類に分類できるのに対して、金平では70種類と3倍近くもあり、専門の商品を販売したりサービスをおこなう職種の分化が進んでいることが指摘できる。つまり金平以外の町では、常設店の店数や種類が少ないため、市日にたつ雑貨店の露店が日常用品を買う主な場となっている。しかし金平では市街に常設店が発達しているため、定期市で出店する雑貨店で商品を買う必然性が少ない。このことが定期市場では、雑貨店よりも食品類の露店が占める比率が高くなる要因になっている。

では6日ごとの市がなぜ存在するのか、また常設店と6日ごとの市にはどのような差異があるのだろうか。金平の南定期市場と中央常設野菜市場を比較してみよう。南定期市場で野菜を売っているのは、ハニ、ミャオ、漢(在地)、ヤオの順に多いが(表10)、いずれも金平周辺の農村から自家栽培した野菜を売りにやってきた農民であり、しかも民族ごとに売っている野菜の種類が異なるという特徴をもつ。一方、中央野菜常設市場で野菜を販売しているのは、漢族の専門業者である。野菜は通海周辺で生産されたものを毎日売っており、6日ごとの市と常設店では売り手と商品の内容が異なっている。

例えば者米谷の町や村でたつ市の場合、者米の市では外部で生産され販売される野菜は、農民であるタイ族が、仲買や自ら勦拉や金平にでかけて買って来たものを販売する。つまり者米谷では輸入された野菜の小売りは農民の副業として成り立っているのに対して、金平では野菜を専門に商う商人によって販売されており、生業の分業化が進んでいるといえる。

者米谷でたつ5つの市の調査から市は村民が日常生活用品を購入するだけでなく、野菜などの余剰生産物を持って現金に換え、市での生活必需品の購入費用にあてていることがわかっている[西谷2005a]。金平においては南定期市場が、周辺農民の余剰生産物を現金化する場となっているのに対して、中央野菜常設市場は専業商人が野菜を売る場になっているといえる。

さて中央野菜常設市場で売られている野菜は35種類である。それに対して南定期市場で売られている野菜は63種類とはるかに多い。また中央野菜常設市場で主として売られているハクサイ、セロリ、トマト、キャベツ、タマネギ、ダイコンは、金平周辺の農民が生産したものではなく、健康水周辺で大量生産され価格も安くおさえられている。しかもこれらの野菜はいずれも主として肉などと一緒に調理されたり、そのまま調理しておかずとして食べられる種類である(以下、おかずタイプの野菜と呼ぶ)。市場内の店数は29店と少ないが、各店はこれらの野菜を大量仕入れて山積みにして販売する。

一方、南定期市場で野菜を販売する露店数は109店と多く、しかも販売している種類も63種類と多い。その種類は、カボチャ、サトイモ(ミズイモ)、ダイコン、ピーマン、ゴウヤ、空心菜、モヤシ、ニラ、青菜、ヘチマ、タケノコといったおかずタイプの野菜もある。しかし主として売られているのは、ショウガ、サンショウ、トウガラシ、ドクダミ、野生のコリアンダー、コリアンダー、セリ、野生のコリアンダーの花、野生のコリアンダーの茎、チシャ、ネギ、タデといった香辛料的に使われる野菜が多い。そしてもう一つの特徴がパパイヤの花、カボチャの蔓、サトイモ(ミズイ

モ)の茎、野生のユリ、シダ、ハスイモの茎、サツマイモの葉、ハイイモの茎、シロイモの茎、カンコノキ(甜菜)、クワレシダ、ツルムラサキといった、大量生産されないが珍しく嗜好品として好まれるタイプの野菜類である。

このように金平の市で販売されている野菜は、常設店ではおかずタイプの野菜が売られ、定期市では香辛料、嗜好品タイプの野菜が主として販売されており、市によって野菜の種類に明確な差異が認められる。

ところで者米谷の町や村でたつ定期市でも、金平の中央野菜常設市場で販売されるおかずタイプの野菜が、金平などの市場から買い付けられて売られている。しかし周囲の農民が者米谷の市で販売する野菜の種類が多くは、季節によって変化はあるが主としておかずタイプの野菜である。

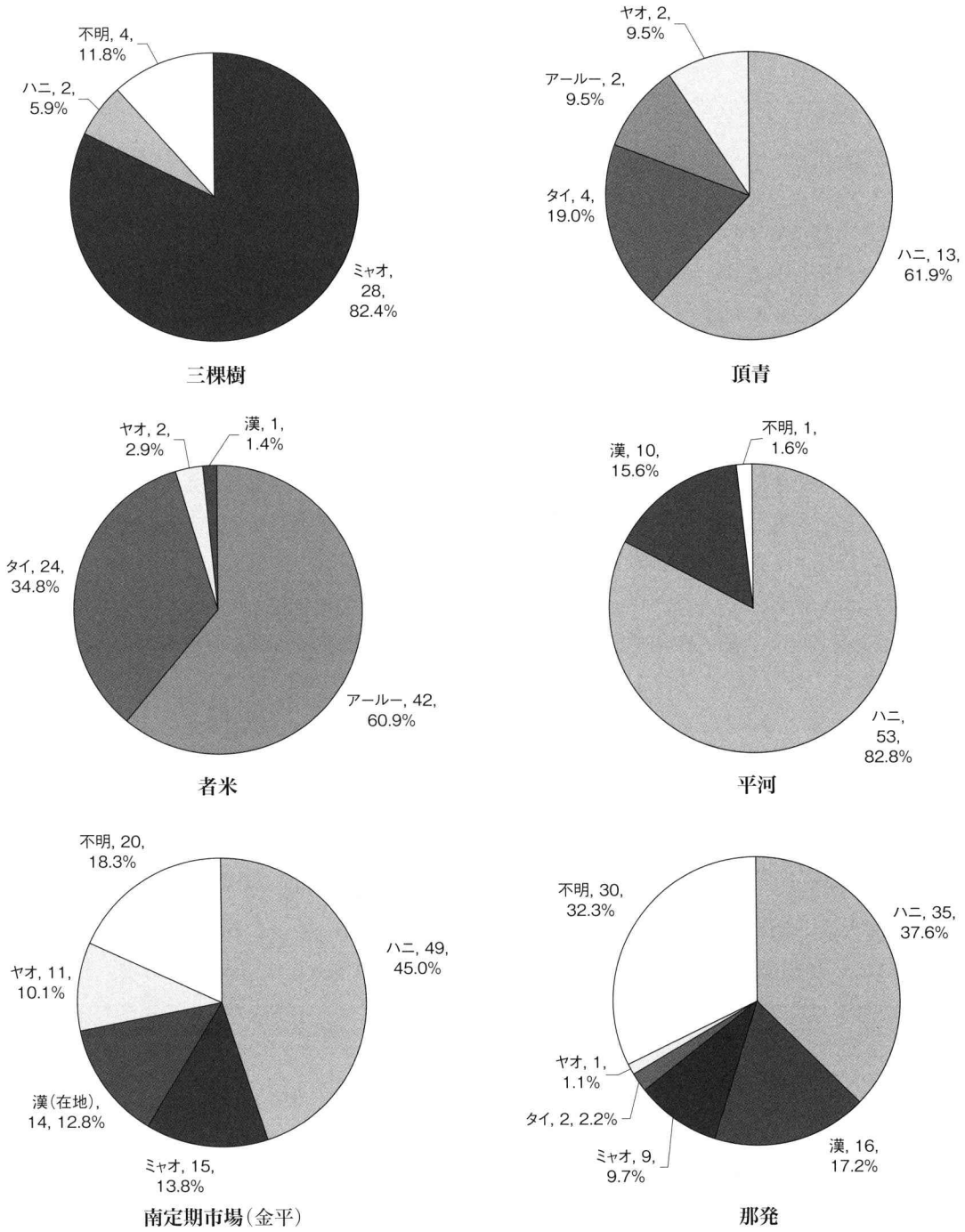
このように金平の周辺村民の市における野菜販売は者米谷とは異なり、香辛料、嗜好品タイプの野菜に特化した戦略をとっていることがわかる。南定期市場で香辛料、嗜好品タイプの野菜を売っている少数民族の多くが、野菜を売り終わると中央野菜常設市場にでむき、大量のおかずタイプの野菜を購入し帰路につくという購買パターンをとる。つまり彼らは野菜を栽培するのだが、その多くの種類は市で売るための香辛料、嗜好品タイプの種類を選択しており、おかずタイプの野菜は市で購入する必要があると考えられる。また周辺の村民は、金平で野菜を売ろうとすると、外部から入ってくる安い大量生産のおかずタイプの野菜に対抗する必要がある、そのため野菜栽培の種類を香辛料、嗜好品タイプに特化させてきたといえる。

さて次に市で野菜を売る村民の民族の違いから金平の市の特徴を抽出してみたい。金平周辺にはハニ、ミャオ、漢(在地)、ヤオ族が居住する。南定期市場で野菜やコメを販売する民族は、ハニ族が最も多く(45%)、以下、ミャオ族(13.8%)、漢族(在地)(12.8%)、ヤオ(10.1%)となる(表13)。ハニ族が最も多いが、他の民族もハニ族と同様に6日ごとの市で露店をだし自家栽培の農産物売る。者米谷でもクーツォン、ハニ、タイ、ヤオ、アールー、ミャオ、ジョワン、ハーベイそれに漢族と8つの民族と1つの集団が雑居している。しかし町や村でたつ市ごとに、野菜を売るのはある特定の民族に集中する。例えば三棵樹ではミャオ族(82.4%)、頂青ではハニ族(61.9%)、平河ではハニ族(82.6%)⁽²¹⁾、そして者米ではアールー族と野菜を商う民族が異なる(表14)。

なぜ金平と違い者米谷の各市では、特定の民族に野菜の販売が集中するのだろうか。者米谷で暮らす民族は、海拔およそ500mの河谷平野から海拔およそ1500mの山の斜面にかけて、高度を変えることで棲み分けをおこなっている。このうちタイ、ヤオ、アールー族の3つの民族の生業システムと生業戦略をみると、河谷沿いに住むタイ族は、棚田でコメの二期作をおこない、水田では水田漁撈や可食水田雑草の利用を積極的におこなう。ところが畑作はほとんどおこなわず、水田稲作に特化した生業システムをとってきた。

者米谷の北側斜面で、海拔およそ800~1300mに住むのがアールー族である。彼らは景観的には、者米谷の9つの民族のなかで最も壮大な棚田を作る。ところが水田漁撈や水田での可食水田雑草の採集はほとんどおこなわない。耕作面積や現金収入の面からみると、むしろ畑作が生業の中心である。棚田の上下に広がる山の斜面の畑はほぼ全面的に開発し、耕作地のローテーションをおこないながら、野菜、トウモロコシ、キャッサバ、レモングラスといった換金作物を盛んに栽培する。者米谷の南斜面で、海拔およそ1000~2000mの土地を利用するのがヤオ族である。彼らもやはり棚

表14 野菜露店販売の民族ごとの比率



田を作る。水田漁撈や可食水田雑草の利用は少なく、むしろ森林内での野生動物狩猟や有用植物採集、それにかつては藍の栽培を、現在は草果（中国料理に使う香辛料）栽培に重点をおく。

各民族に生業システムの相違が生じる要因の1つは、彼らが居住する生態的な環境の違いが背景にある。しかしさらに重要な要因として、者米谷の民族間でおこなわれている交易に関わる生業戦略の違いが指摘できる。市では各民族が、それぞれの生産物をもちより交易をおこなう。タイ族の主要な商品はコメである。また水田漁撈によって捕った魚類も市で販売する。さらに者米谷のブタ肉の流通も独占してきた。アールー族は野菜を他の民族に売り、ヤオ族は木綿布を染めるのに必要な藍を売って生計をたててきた。各民族は戦略的に特産物を作り出し、6日ごとの市は、それらを交易する場として機能してきた。つまり者米谷という1つの地域が市を介することで、自給自足的な1つの生活世界の形成を可能にしてきたといえる。いわば多民族の住む者米谷という1つの地域が生業複合体を形成し、さらに各民族の生業戦略は市を介することで、より差異化が促進されてきたといえる。このことが、各市で特定の民族が野菜を販売する現象の要因になっている。

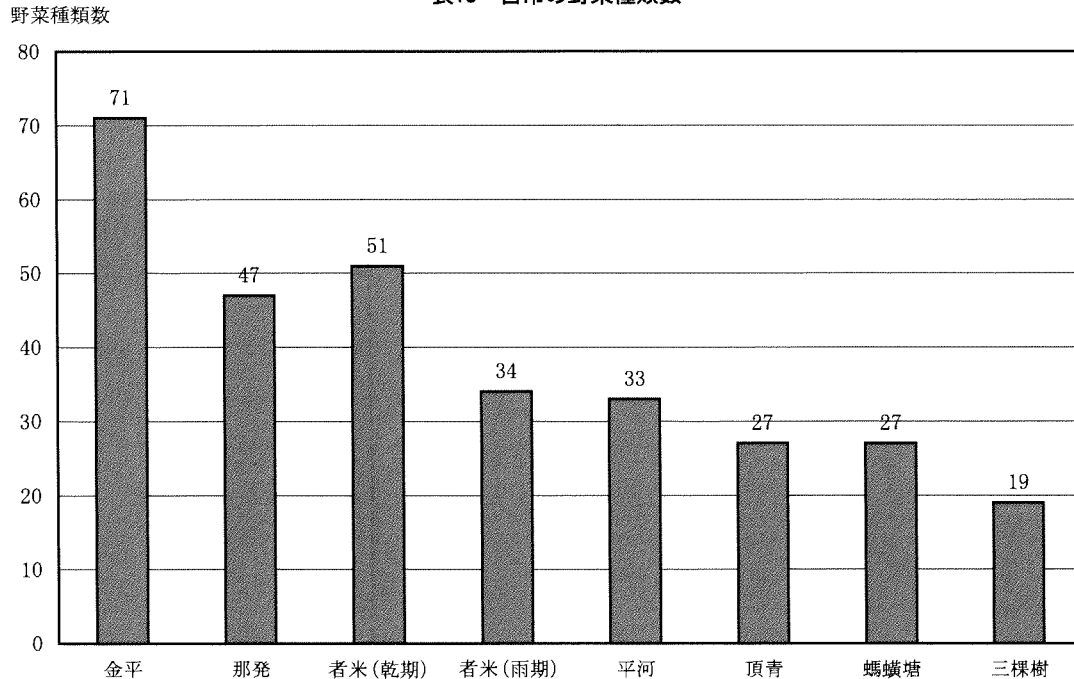
ところが金平の定期市の性格を特徴づけているのは、買い手の大半が農産物を生産しない町住みの住民だということである。例えば野菜以外にコメの販売をみると、58店のコメを販売する露店が出店していたが、ほぼハニ族によって占められている。こうした傾向は、者米谷で開催される5つの市ではみられない。その理由は、者米谷で市が開催される町や村の住民は基本的には農民であり、コメの自給自足が可能だったからである。金平でコメの露店がたつのは、町住みの住民がコメを必要としているからである。このことも金平の定期市の性格が、町住みの住民を主とした対象としていることの現れとして理解できる。

つまり金平周辺のハニ、ヤオ、ミャオ、漢（在地）といった農民は、各民族同士で農産物を交換するのではなく、町住みの住民の好みに応じて栽培作物の戦略を練る必要がある。例えば野菜の種類をみると、者米谷でたつ6日ごと市の野菜の種類は、者米（乾期、51種類）、者米（雨期、34種類）、平河（33種類）、螞蟻塘（27種類）、三棵樹（19種類）であるのに対して、金平で販売されている種類は71種類と多い（表15）。

都市住民は食料をすべて何から何まで買わなくてはいけないのだが、そこに選択の自由と選択の多様性が求められると考えられる。つまり周辺農民は町住みの住民の要求に答えるため、より多様な野菜の種類を提供し選択性の幅を広げるといった戦略をとらなくてはならない。

者米谷の市は主として農民同士の売買を基本に成り立っている。いわば農民の市ということができ、農民の余剰生産物を買取る仲買商人と移動商人の存在が不可欠である。それに対して金平の市は、近郊農村と町住みの住民との売買を基本とした町の市といえる。そして移動商人は必ずしも必要ではない。金平の市の特質は、6日ごとの市において主として少数民族が香辛料、嗜好品タイプの野菜を少量売りするのに対して、常設市場では専門商人がおかずタイプの野菜を売る。つまり「定期市と常設店との差別化」が指摘できる。そして定期市では農民同士の売り買いが中心ではなく、売り手は町周辺の農民であるのに対して買い手は主として町住みの住民であり、「売買関係の特化」という点に特徴がある。このことが常設市場や常設店が立ち並ぶ人口およそ3万人の金平で、現在も6日ごとの市が存続している最大の要因になっている。

表15 各市の野菜種類数



まとめ—市の誕生と都市化—

1 市と市システム

者米谷でたつ5つの市の調査から、市を成立させる普遍的な条件と特質について「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」、「徒歩移動における限界性」、「市ネットワークの存在と商人の介在」、「商品作物の処理機能」、「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」、「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」の7つを抽出した。さらに市を成立させるには上記のような外在的条件ばかりでなく、内在的な「交易品としての食料と食の楽しみ」と「店舗数（市の規模）と来客数の相関」にも目を向ける必要があることを指摘してきた。

本稿では那発と金平でたつ市をとりあげ分析と考察をおこなってきたが、その結果を者米谷の市の研究で抽出した市を成立させる諸条件と関連づけつつ、市の誕生から市ネットワークが形成され、さらに市が常設化し都市化していく過程から、市システムのもつ特質について述べてみたい。

金平県で開催している市は、その規模や機能から分類が可能である。ここでは定期市をⅠ～Ⅳの4つのタイプに分類することにする（表16）。

Ⅰタイプ

人口は100～500人程度の村でたつ定期市で、村の住民のほとんどは農民である。常設市場はない。常設店は10～20軒と少なく、換金作物などの農産物を買取る仲買の機能が弱く常設店は食堂が主である。市日の露店数は100店前後で、専門店は少なく雑貨店が多い。市日の滞留人数のピーク時が400～600人程度であり、その時の露店1店あたりの平均来客人数は約4人程度である。

表16 市のタイプ分類

タイプ	定期市	常設市場	地点	住民の主体	常設店	農産物仲買	露店	ピーク時 人数	露店1店に 対する人	移動商人	売買の主体
I	有	無	村(数百人)	農民	少	有(少)	100店前後	200~600	約4人	住まない	農民
II		無	町(数千人)	農民	100店前後。専門 店化が進む。	有	300店前後	1000以上	約4人	拠点	農民
III		無	交通の要衝	商人(少)	少	有	300店前後	1000以上	約4人	住まない	農民
IV		有	町(数万の人口)	サラリーマン・商人・公務員(農民が居住しない)	多い。専門店化 が進む。	有	300店前後	数千人	4人以上	拠点	町住みの住人・農民

移動商人の拠点にはならず、商品の売買の主体は近隣の農民である。者米谷では、頂青、三棵樹、螞蟻塘などでたつ6日ごとの市が、このタイプに相当する。

IIタイプ

このタイプの定期市は村や町で開催されるのではなく、交通の要衝に市日にだけ開催される。基本的に常設市場はない。常設店は少ないが、周囲から村人が余剰生産物を持ち込み露店をだし、また移動商人が集まることで市日には300店前後の市がたつ。売買の主体は農民であり、移動商人は居住せず他の町からやってくるため、彼らの拠点にはならない。那発がこのタイプに相当する。

IIIタイプ

人口が1000人程度の町でたつ定期市である。町には、基本的に常設市場は存在しない。住民は農民が主体であるが、官公庁の役人や学校の先生、それに商人も居住する。市日にたつ常設店は100店前後で、雑貨店もあるが店の専門店化が進む。町では換金作物を買う仲買の機能も強い。露店数は300店前後で、専門店が発達する。市日の滞留人数のピーク時が1000~1500人程度であり、ピーク時の露店1店あたりの平均来客人数が約4人になる。市での商品の売買の主体は近隣の農民である。また町は移動商人の拠点になりうる。者米、勳拉などでたつ6日ごとの市がこのタイプに相当する。

IVタイプ

数万人規模の町にたつ6日ごとの市である。農民は基本的に町に居住しない。野菜や肉などの生鮮食料品を販売する常設市場が設置され、常設店の店舗数も多い。6日ごとの市では300店前後の露店がたつが、食料品の露店が中心である。市日の滞留人数のピーク時が数千人程度になり、ピーク時の露店1店あたりの平均来客人数が4人以上になる。定期市で野菜などを買うのは町住みの住民であり、周辺農民は町住みの住民の要求にあわせた生業戦略をとる。金平がこれに相当する。

さて者米谷の各民族は戦略的に特産物を作り出し、6日ごとの市はそれらを交易する場として機能してきた。定期市と周辺の農民の生業戦略は相互に深く関連し、相乗効果によって生業戦略の差異化が推し進められてきた。つまり1つの地域内で各村が、同じような産物を生産している生業形態では、定期市は発生しにくいといえる。またある一定の人口を有する町や村が存在するからといって、定期市が自然に発生するとは限らない。反対に那発の例が示すように、周囲の村民が余剰生産物を持ちよることのできる地理的条件と交通の利便性が確保できれば、町や村でなくても市は成立する。市が成立するには、町や村など人口が集中する場所が絶対条件ではなく、生産物の差異と多

くの人びとの集合できる地理的条件と交通の利便さと、さらに市が大きくなるには商人の介在が必要だといえる。

では常設店の出現には、どのような要因が必要なのだろうか。店舗と市場の常設化には、一定以上の人口が必要なことは間違いない。ところが金平の定期市でたつ露店数は360店と、人口のはるかに少ない那発や者米でたつ露店数とそれほど変わらない。市日のピーク時の露店1店あたりの人数は、者米谷の各市で約4人であり、これが者米谷で市を成立させている露店数と人数の適正規模だと考えられる。金平では露店1店あたりの人数は者米谷のおそらく倍以上であり、市日の露店数に対して市にやってくる客が者米谷の市よりはるかに多い。金平のように山地が多く耕地面積に制約がある条件では、金平周辺の農村だけでは生産量に限界があり、3万人の人口をもつ町の日常的な生鮮食料品を供給することが不可能なのではないかと考えられる。金平で6日ごとにしか市がたたないことと、市日での人口に対して露店数が少ないことは、金平周辺の農村の生産量の限界性を示しているといえ、このことが金平における金平以外で生産された青果類を販売する市場の常設化を促す1つの要因になっている。

さて金平県には、Ⅰ～Ⅳタイプの6日ごとの市が存在する。そして金平県から緑春県にかけて、市日が重ならない、金平グループと者米グループの2つの市グループが存在する。者米グループでは、者米と勅拉の2つのⅢタイプの市があるがこの2つの市はおよそ60km離れており、その間の街道沿いにⅠタイプの頂青、三棵樹、螞蟻塘、蕎菜坪がある。金平グループでは、金平の市がⅣタイプであり、大寨、沙依坡、大寨、それに八道班、三家道でたつ市はⅠタイプに属する。1つのグループには、異なったタイプの市がセットになる。つまり「大きな市」と周辺にいくつかの「小さな市」が存在し、それらのセットが重なりあいながら連続している。このように定期市は、各町や村単位で独立してたつのではなく、タイプの異なる定期市がセットになることで全体として1つの市システムを作りあげている。

1つの地域で定期市がたつ必要性は、「徒歩移動における限界性」が背景にあり、タイプの異なる市がセットになることで「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」、「商品作物の処理機能」といった機能が有効に活用できる。さらに移動商人に介在することで市のネットワーク機能を生み出し、交易によって余剰物資がさらに外部へと輸出され、反対に外部の商品が各定期市へと供給される。定期市は、農民の戦略的な生産物の差異化、各市の機能差、移動商人の存在などが相互に関係性を持ちながら、1つのシステムとして機能している。

では市の誕生から、こうした市システムが構築されるにはどのような過程を経たと考えられるのだろうか。仮説的に第1段階から第3段階を提示してみたい(図12)。

第1段階

市が誕生する初期段階であり、ⅠタイプとⅡタイプの市がある。市間の関係は弱く、移動商人はまだ存在しない。各市が独立して開催される。市による周辺の村での生業戦略の差異化がはじまる。

第2段階

Ⅰ、Ⅱタイプの市のなかからⅢタイプの市が出現し、市間に規模と機能に差異が生じる。各市は市日が重ならないように定期的で開催しはじめ、移動商人が市を結びつけることによって市グループが出現する。市による周辺の村での生業戦略の差異化が拡大する。

第3段階

IVタイプの市が出現する。1つの市グループ内にはI～IVタイプの市がセットになる。各市の規模と機能の差異がさらに明確になり、同時に周辺の村における生業の分業化が推進される。いくつかの市グループが出現し移動商人の商業規模も大きくなり、市グループが移動商人によって結びつけられ市ネットワークが完成する。

者米グループと金平グループを比較すると、者米グループの定期市は第2段階に属し、金平グループは第3段階の市システムだといえる。金平県には2つの段階の異なる市グループが存在し、それがさらにネットワークを作りあげて、全体として1つの市システムを構成している点に特質がある。

こうした金平県における多様な定期市や市システムの存在は何を意味しているのだろうか。それは1つの可能性として、金平県のなかでまさに農村的という意味では小さな差異をもちつつ農村のなかに定期市が誕生し、多様な市がさまざまに変化生成してやがて常設市をもつ都市へと成立する過程が、金平県というかなり広域のなかで空間的なレベルで同時的に生起しているといえるかもしれない。

2 市システムからみた生業経済と市場経済

金平で抽出される定期市のシステムは、中国雲南省の多民族が暮らす1地域の特殊な事例なのだろうか。それとも人類社会における市の誕生や、市を介した農村と町・都市との関係性において、何らかの普遍的な意味をもちえるのだろうか。

ここでは歴史上の事例をすべて網羅することは不可能なので、市からみた交易のシステムと、農村と町・都市の関係性を明らかにする上で課題になる点を、いくつかの事例をあげることで指摘するにとどめたいと思う。

市＝交易と農村と町・都市の関係性を歴史上に求めれば、都市の出現期にまでさかのぼることができるだろう。世界最古の都市の出現は、西アジアの南メソポタミアのウルク期である。ウルク的世界が形成されたのには、農村や他地域との交易が基礎になっているという考えがある〔大津他1997〕。チグリス・ユーフラテスは灌漑施設が整えば肥沃ではあるが、日用品から威信財に至る人びとの生活に不可欠な農産物及び畜産物以外のあらゆる物資を外界から持ち込まなければならなかった。南メソポタミアで都市文明が興隆した最大の要因は、このような特徴があったからこそ、自らの生存のために大規模な物資集散と再分配システムの構築に取り組み、異文化間を貫徹する1つの経済システムを作りあげたというのである。都市が出現するには、農村や他地域との交易が重要な要因になっているという指摘である。

ヨーロッパの中世初期の研究では、農村における社会経済的発展の結節点として、都市の形成と成長が関わっているという認識から、農村と都市との関係性の研究が見直されている。そこに市場の問題がクローズアップされているのだが、森本芳樹の指摘によると中世初期の都市市と農村市とで検出された市場は、両者が結びついて一種の市場ネットワークが形成されているのだが、しかしそれはまだ漠然としたイメージにしかすぎないと述べている。また日本においても文献史料、考古資料、絵画資料を駆使し、中世から近世にかけて、町や村における物の流通、商人、市場などの重

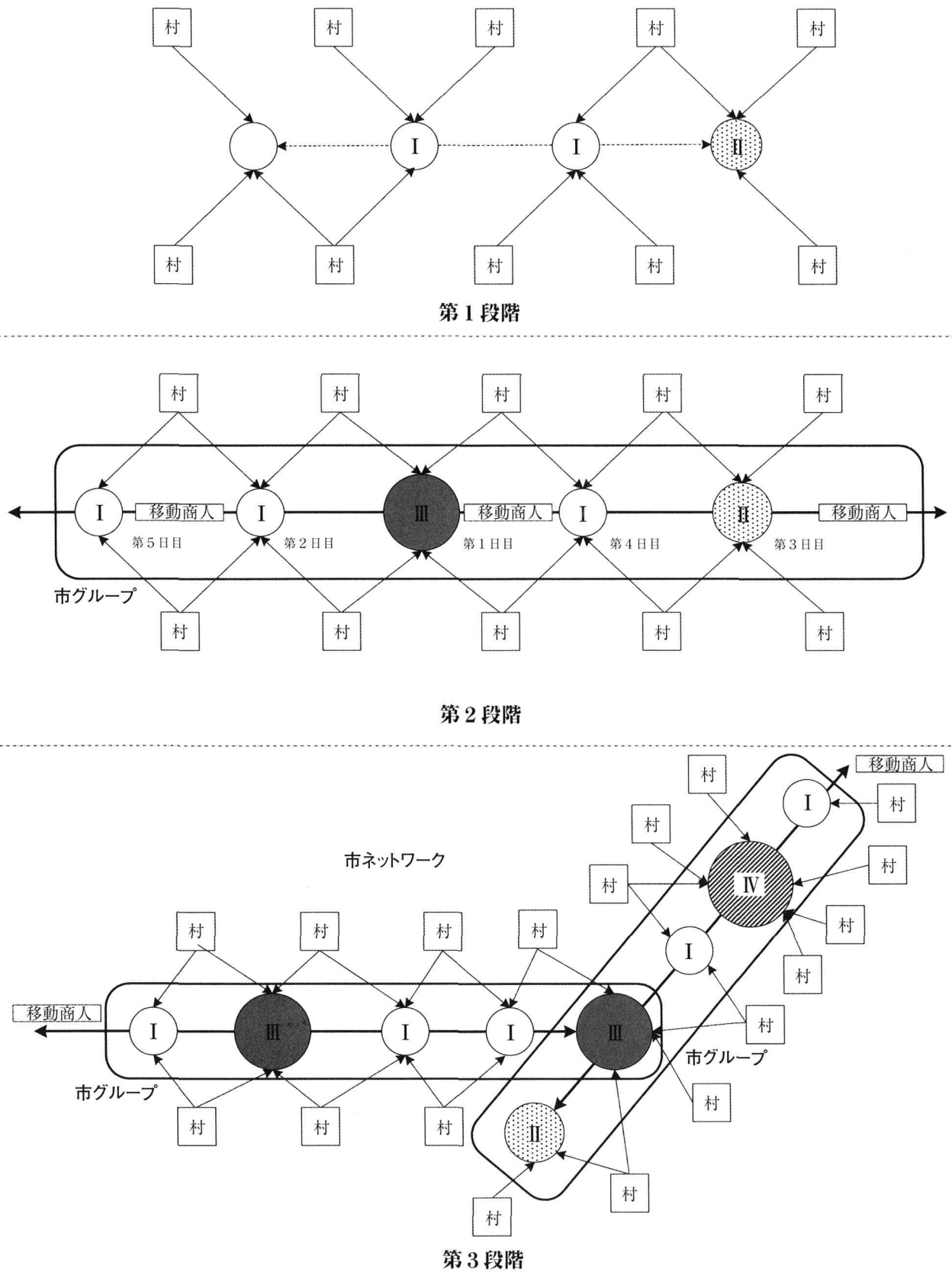


図12 市システムの構築過程

要件が見直されている。⁽²⁴⁾

しかし歴史における市、交易と農村と都市の関係を問うときに、問題になるのは残された歴史史料そのものの情報量の限界性であり、とくに市を成立させている重要なファクターである農村・農民と市との関係性を明瞭にできないという点であろう。いいかえれば農民たちがどのように市を利用していたのかという、物資の動きのなかでは最もローカルレベルでありながら、市が成り立つためには最も重要な地域の農民の生業と市との関わりの具体的な姿やシステムがまだよくわかっていないのではないと思われる。

おそらく都市、農村、市を絡めた関係性を、都市側の論理からの展開を推し進めると、レッドフィールドが主張する「都市が出現するまで農民はいなかった。都市と無関係に生活しているのは未開民族であって、農民ではないのである」といった、地方の「農耕民」は都市の人的、物的資源の場として支配を受け入れるにつれて、「農民」となっていったという考え方も可能になる[R. レッドフィールド1978]。

また藤田弘夫は「都市が洋の東西を問わず〈通文化的〉に地球上のいたるところで建設されたのも、都市の成立基盤が「権力」にあったからである。多種多様な目的をもって活動する権力は、絶対的余剰農産物のない農村からでも〈社会的余剰生産物〉を作り出したのである」と主張する⁽²⁵⁾ [藤田1993]。都市の存在が農村を作り出し、さらに都市は農村から「社会的余剰」を引き出す装置としてとらえる。確かに現在のグローバルな市場経済の流れのなかで、農村が都市の論理に押しつぶされている現状をみれば、都市と農村の関係をこうした視点でとらえるのも妥当にみえる。

しかし金平県における市システムや、市と農村、都市との関係性は、都市側の一方的な視点や解釈だけでは理解できない。農村のなかに市が誕生することで、それが市のネットワークを形成し、常設市が出現する過程の中で、農村と町、または都市との関係性がどのように変化してきたのかを明らかにするには、農村と市という最もローカルなレベルで、この両者の関係性を問い直す必要があると考えられる。

今西錦司らが著した『村と人間』は、奈良盆地の平野村の調査から都市近郊農村と都市の関係を、農村の近代化という文脈でとりあげている。そして「都市は農村よりも、社会進化史的にいうと、より新しいものである。しかし、それは農村から分離し、農村に対立した、新しい社会が成立したと考えるよりも、むしろ、もともとある平面的な農耕社会に、一種ボラライゼーションがおこって、その中に都市という、新しい機能を担当する部分が、分化した、と考えねばならない。だから都市の分化は、同時に農村の分化である。都市が分化する前の農村と、都市が分化したのちの農村とは、同じではない。都市の発達がいちじるしくなれば、それにつれて、農村のほうもまたかわっていく」と述べている [今西1952]。

そして彼らの生業戦略を「農村平野村は、いままさに農業経営の園芸化と、過剰労働力の通勤化をとおして、その近代化をすすめつつあるものとわれわれは考えたいのである。そこには都市と並びながら、都市に押しつぶされないで、都市の発展とともに発展してゆこうとする農村クライマックスの、戦略的に新しい身構えがある」と近代化の概念を生物学的・生態学の問題に移行させ、近代化というインパクトに対して村が規格を崩さないように適応を遂げてきたとみる。

この主張に対して篠原徹の「1947年以降の日本から現在の日本への変化はおよそこのようなパー

スペクティブを吹き飛ばすほど激しいものであり農村の規格を崩さずに都市に押しつぶされていない農村・山村・漁村などは現在存在しない」という指摘は的を得ている〔篠原1990〕。ただ篠原は今西が平野村の調査で主張した意義について、農村クライマックスとか同類共感という結論めいたものにあるのではなく、調味料・服装・家具など極めてユニークなものをインデックスにして、それらをクロス集計させながら近代化を具体的にとらえようとしたところに真骨頂があると高く評価し、自ら岡山県馬繁村での近代化における村の変容について耐久消費財の分析から実践的な研究をおこなっている。

筆者も今西のおこなった研究は、農村の近代化の問題を具体的なモノ資料からとらえようとした調査方法そのものに価値をおくとともに、さらに都市と近郊農村の関係性を都市の論理ではなく、農村側の論理としてとらえようとした点が重要だと考える。そして今西の指摘した都市と農村の関係性を金平の市に重ね合わせ、金平の定期市の特質をとらえるとするならば、者米グループの定期市は今西のいう「都市が分化する前の農村」に適合した経済であるといえよう。金平に常設市場をもつ金平グループの金平周辺の農村は、今西のいう「都市から分化した後の農村」と都市に適合したものである。つまり金平県には異なる性格をもつ2つの経済活動があり、それを支えている2つの市システムがあると考えられる。

では金平県の市から抽出できる、4つの市タイプと2つの市システムのもつ意味を、より深く理解するには、どのような視点が必要だろうか。それには市川光雄の主張する、地域の経済を生業経済と市場経済という概念で分析する方法が、有効な手段の1つになりうるのではないかと考えられる〔市川1997〕。

市川のいう生業経済とは、生業経済＝生計のための経済である。それに対して市場経済とは、市場での交換を前提に生産と流通がおこなわれる経済であり、効率化、合理的行動を伴う。そして生業経済が市場経済へと移行すると、農業に対して「少数の商品作物が集中して生産されるようになり、生業と資源利用の特化がおこる」、「自給作物を販売するようになり、商品作物へ特化し、食料、その他の生活物資を購入するようになる」、「利潤をもとめる商業的農業では、労働力の得られる限り面積を広くとる」と3つの変化をあげている。つまり生業経済から市場経済への変化は、「社会関係の生産」から「富の生産」へ、「社会に埋め込まれた経済」から「経済の突出」が進むと主張する。

市川の主たる主張は、市場経済が進むと生態系に破壊的な影響を与えるために、それを緩和するためには何らかのバッファの存在が必要であり、その例としてコンゴ（ザイール）のイトゥリの森におけるムブティと農耕民との野生動物の肉が、交換におけるバッファの役割を果たしているという点にある。つまり現金ではなく物々交換によって、日常生活物資を手に入れている。すなわち使用価値の入手であり、これがコンゴ（ザイール）の経済の破滅的な混乱の影響を被ることがなかった要因だと主張している。

では金平県において、市と生業経済と市場経済にはどのような関係性がみいだされるのだろうか。者米グループの定期市を利用している者米谷の農村は、いままさに換金作物が入り込み浸透しつつある段階である。しかし定期市が者米谷ではたしてきた機能は、農民同士のコメ、野菜、野生動物など、日常的な物資の交換であり、いいかえれば使用価値の交換であった。鉄や塩などの外部から

調達する必要がある物資以外は、者米谷という閉じられた地域のなかで、ほとんどの物資が交換されていた。1950年代以前まで、市では現金も通用していたが、コメも現金の代わりに果たす重要な交換物資であったし、現在でも市では時には物々交換もおこなわれている。また市は参加する楽しみ、娯楽、情報交換など社会的、文化的意味ももっている。そして各民族の生業戦略の差異と定期市とは密接に関係しており、定期市の存在が民族による生業戦略の差異をむしろ拡大させる方向に働いてきたと考えられる。

定期市こそが均質な農村や民族の生業に差異と分化を引き起こしているのだが、さまざまな生業戦略が集合することで、これがかえって者米谷という閉じられた空間で、複合的な生業構造を作りあげ、自給自足的な生活を可能にしてきた。者米谷の生活世界は、市川の規定する生業経済そのものとはいえないだろう。しかし者米谷における定期市システムは、現金だけでなく物々交換も可能し、さらには各民族の生業戦略を差異化させる機能自体が、ある段階までは谷全体における生業生産のリスク回避と、市場経済から生業経済をバッファーとして守る役割を担ってきた可能性が高い。

一方、金平グループの市システムの特徴は、金平にすでに常設店が出現し、農民の生産物が、町・都市住民の嗜好に応じて特化している点にある。そして那発では、周辺農民の換金作物化への特化が進み、定期市の性格もそれに依り変化し、特に移動商人が者米グループよりもはるかに活躍しており、市のネットワーク機能が外部の世界とより強く結びつき、市場経済化が進展しているといえる。定期市での交換の役割は者米谷とは異なり、効率化、合理的行動が富の生産を伴う、まさに市場経済へ移行しているといえる。⁽²⁶⁾

湖中真哉は、現在の地域経済の動態を解明するためには、共同体を母体とする生業経済と国家・国際規模の市場経済を媒介する交易ネットワークに焦点をあてるのが肝要になるという考えから、生業経済と市場経済を媒介する地域ネットワークの研究をおこなっている [湖中2004]。湖中はアフリカ・ケニア中北部の家畜売買をとりあげ、都市の家畜商が家畜を安く買い上げてそれを都市で高く売るといった比較的簡単な商売をおこなっているのに対して、サンプルの在地家畜商は市場原理だけでなく、サンプルの地域社会に密着し地域のネットワークを利用した利益産出の仕組みに依存していると指摘する。そして在地家畜商の方法が牧畜活動と一体化しており、めざしているのは現金の利益ではなく、最終的な目標はサンプルの文化的価値の核心であるウシの飼育用家畜であり、家畜取引は商業のための商業ではなく牧畜のために商業を営んでいると述べている。在地家畜商がおこなっている家畜取引は、一般の商取引の概念には収まりきらない独特のものであり、市場経済にのみこまれることなく、むしろ反対に市を馴化し生業経済のなかに市場経済を位置づける新しい経済の可能性を垣間みせているのではないかと主張する。

金平県の者米谷グループの市システムは、生業経済の色合いが濃厚で、地域住民がある程度は市を馴化する、あるいは主体的に利用することが可能だったといえる。それに対して金平グループの市システムは、町・都市の論理や移動商人が物資の移動を握り、地域の農民が主体的に市を活用する論理が通用しなくなっている。地域経済の動態を解明するために交易という地域ネットワークに焦点をあてた場合、市が誕生し市システムが発達していくなかで、定期市システムはある段階までは、地域社会の生業経済を安定的に維持する方向に働き、農民たちの主体的な生業戦略を促進させ

る方向に働く。いわば「生業経済に埋め込まれた定期市」といった段階があるのではないかと考えられる。一方、各地域の市システムがネットワーク化されていく段階で、市の性格は「市場経済を促進する定期市」へと変化していくのではないかと推測される。

金平県の定期市からみえてくるのは、市システムには地域の生業経済をある段階までは守り育てるのだが、次にはそれを劇的に変化させ市場経済へと導くという、二面性をもっているということであろう。そして市場経済における都市の定期市・常設市と、生業経済に埋め込まれた定期市とでは、例えば市で売買されている物資などに表面的な同質性が認められたとしても、市システムそのものの特質は全く異なっているといえるだろう。市を理解するには、地域社会における市と生業との関係性とシステムを深く理解する必要がある、そのことがおそらく人類が生み出した歴史上の市がもつ機能と普遍性を解き明かす糸口になると考えられる。

註

(1)——加藤繁「清代に於ける村鎮の定期市」『東洋学報』23-2, 1936年。天野元之助「現代支那の市集と廟会」『東亜学』2, 1940年。増井経夫「広東の墟市」『東亜論叢』4, 1941年。

(2)——中心理論とは、クリスタラー (W.Christaller) が提唱した理論で、中心地点及びその補完区域からなる結節地域・市場圏の垂直的集合について論じたもので、具体的には、各上位市場圏は、すぐ下位の市場圏をいくつか含む階層的配列を示しているという学説のことである。

(3)——標準市場とは、農民が日常的に利用する市場のことである。スキナーによれば伝統中国では、標準市場が社会の中核をなしていたという。

(4)——中村哲夫は、中国における現代の市研究には2つの方向性があると整理している [中村 1978]。それは「資本主義列強が中国市場へ進出するにあたり、いかなる回路を通じて開港場から農村への経済的支配を貫徹するのか」という問題の解明に欠くことのできない研究対象である」「中国農村の農村研究に普遍的な分析視角を提示すること」に集約されるという。

(5)——市の調査は、科学研究費補助金 (基盤 B 15401037, 平成 15～18年度)『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性—中国における焼畑農耕の現在—』(代表、篠原徹) によっておこなった。調査は、2003年3月11日～3月19日、同年8月25日～9月12日、同年11月5日～12月25日、2004年5月18日～6月15日、同年11月15日～12月22日、2005年7月11日～9月15日、2006年1月23日～2月24日の計7回にわたっておこなった。

(6)——漢字表記は、それぞれ傣 (タイ)、哈尼 (ハニ)、

瑶 (ヤオ)、古聰 (クーツォン)、阿魯 (アールー)、苗 (ミャオ)、杜 (ジョワン)、哈備 (ハーベイ)、曼 (マン) である。アールー族は、イ (彝) 族の一支族であり、クーツォンは拉祜 (ラフ) 族の一支族である。このうちハーベイとマンは、中国政府から1つの民族集団とは認知されておらず、それぞれハーベイ人、マン人と呼ばれている。本稿ではカタカナ表記で民族名を表記する。

(7)——正式には金河鎮であるが、地元住民は「金平」と呼ぶためこの名称を使う。

(8)——イミグレーションは、那発以外に十里村にもある。

(9)——1983年12月に雲南人民政府が作成した『關於越南辺民参加中方辺境集市貿易の暫行規定』、『対越南辺民参加辺境集市貿易出入境管理辦法』によって那発より先行し、1984年に十里村でヴェトナム側に開放され市が再開される。

(10)——軍隊の正確な人数は、軍事上の情報のため公表されていないために不明。

(11)——以下述べる三棵樹、頂青、平河の市の分析方法も、者米でおこなった分類方法を基準にした。

(12)——食堂とレストランの違いは、食堂は冊子になったメニューがなく、客が食材の並んだ棚をみながら料理を注文する。また一般には専用の厨房がなく、コックが店先で料理を作る。一方、レストランは厨房と客室が分離しており、ウエートレスがメニューを持参しテーブルで料理を注文するタイプをいう。料理の値段は、食堂よりもレストランのほうがはるかに高い。

(13)——昆明の南およそ100kmに所在し、金平から車でおよそ6時間かかる。海拔およそ1200mに位置し、盆地上の地形 (壩子) で野菜の生産が盛んである。雲南

省各地に野菜を出荷している。

(14)——露店の出店は、南定期市場内と坂道通だけに許可されており、市街地内で露店をたてると警察によって撤去される。

(15)——明、清時代に金平に移り住んだ漢族。服装もいわゆる民族衣装を着用している。

(16)——トラクターの後ろに荷台を引かせ、人やモノを乗せるように改造した乗り物。

(17)——このなかにはベトナムからやってきたハニ族も含まれている。

(18)——者米谷において市に通える村の範囲は、半径およそ7km以内に限定されていた。それは者米谷の場合、多くの山の村では車が通れる道路がなく、移動は徒歩に頼っていたためである。この地域の交通は者米谷と比較するとはるかに便利である。金平から那発、そして勐拉までは道路は舗装されている。三輪車やミニバンを使った乗り合いの自動車を利用すれば、那発から勐拉まで30分でいける。金平や那発の南西に位置する南科へも車で1時間ほどで到達する。各村までも舗装はされていないが、車が通れる道がついている。

(19)——『金平県誌』によれば、1994年の段階で金平県内では31の市が開催されるという。しかし市は、人が集まらなければ閉鎖することもあり、その数は常に変動している。筆者が2005年8月31日の時点で、実際に現地で開催しているのを確認できたのは18カ所である。

清朝末期には、勐拉、王布田、銅鉞、茨通壩、者米、管盤、沙衣坡、馬鞍底等の8ヶ所で市が開催されていた〔雲南省金平苗族瑶族自治州志編纂委員会1994〕。中華人民共和国成立以降の1952年には、14ヶ所で市が開催していたという。1956年には国务院の指示のもとに、新しく19ヶ所で市が開催される。ところが1958年からの大躍進と人民公社化のなかで、農民の副業と自給地はとりあげられ自由市場は停止される。60年代のはじめに再び19ヶ所で市は開催されるのだが、1966～1976年の文化大革命期間中は、またもや6日ごとの市は制限をかけられ、市は「資本主義の尻尾、資本主義の土壌」と目され、政府によって地域の従来の慣習を無視し、阿得博や大寨では10日に一度、その他の市では日曜日ごとに開催するよう指導した。市で交易される物資の量は極端に減少したといわれる。

中央政府の市場開放政策による生産請負制度に伴って、1978年12月に市は再度復活し、1980年には従来の慣習にしたがって、6日ごとの市が開催されるようになる。

(20)——十二支を日取りの基準にした市は、金平県やそれに隣接する緑春県や元陽県でも、少なくとも清の末期には開催されていたことがわかっている〔西谷2005a〕。

(21)——者米の場合、タイ族は者米谷外部から輸入された、いわゆるおかずタイプの野菜を買い付けて販売している。タイ族はほとんど自家で野菜を栽培しない。そのため者米では、野菜を売る民族はアール族にほぼ集中している。

(22)——金平の6日ごとの市では、者米谷で抽出した滞留人数を把握できていない。定期市にやってくる人びとは、南定期市から町全体の広い範囲に拡散しており、人数の計測は不可能であった。

(23)——従来の第二次大戦まで力をもっていたピレンヌ学説は、商人と遠隔地商業とを重視し、中世都市論の中軸をなしていた。それはイスラムの地中海制圧による遠隔地商業途絶の結果、古代都市文明が急速に解体してカロリング期には都市が存在しなくなると主張する。そして中世の経済、都市の発展にとって、遠隔地商業が決定的な進歩誘発力だとする。つまりヨーロッパ中世のさまざまな場所での変化を、外部的な要因で説明する傾向が強かった。

一方、戦後のデュビイらの研究では（『西欧中世における都市と農村』九州大学出版会都、1987）、ローマ期都市現象から中世初期における都市現象は、連続していると考えられる。そして在地的な視覚からの検討に加え、中世初期については、農村における社会経済的発展の結束点として、都市の形成と成長を説き、両者の親近性と補完性により強く注目する。

都市概念についても、従来は人口の集中、商工業への特化、自由と自治の優越、成文法による特権の公認、囲壁の存在などを条件にしていたため、結果として大都市のみをとりあげていたのに対して、地理学の中心性理論の強い影響のもとに、地域で何らかの中心機能をもつ定住地に都市性を認める傾向が強い。

ヨーロッパ中世の市場と都市を扱った論考としては、市場史研究会編集「特集1 前近代の市場と都市・I—西欧の場合—」『市場史研究』第14号、1995、に掲載された諸論文がある。

(24)——日本の中世においては網野善彦が「荘園公領制、さらには幕藩体制の社会を「自給自足の農村」を基盤とすると見るような見解が成り立たないことは、いまや明白であり、農業生産力の発達、余剰生産物の形成によってはじめて商工業が農業から分離・自立するという従来の経済史の定式、または商業・金融はなにもも生産せ

ず、社会の「進歩」に寄与することなく古い生産関係に寄生し、これを分解させる役割を果たすのみという、生産力の発展のみに力点をおく見方、さらに海に囲まれた列島の社会は周囲の地域から孤立した閉鎖性の強い自給的社会という「島国論」などが、商業・交易の役割を著しく過小に評価する見方を研究者の間に定着させてきたのである」と述べ、中世における商業・交易の役割を重視すべきだと主張している。

また日本の古代、中世における都市や、都市と流通、消費に関わる総合的な研究としては、「共同研究 都市における生活空間の史的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集、1999年、「共同研究 日本における都市生活史の研究 A班第一期 古代・中世の都市をめぐる流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集、2002年、「共同研究 日本における都市生活史の研究 A班第二期 古代・中世の都市をめぐる流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告』第113集、2004年がある。また近世の市、市場研究には、吉田伸之編『商いの場と社会』吉川弘文館、2000年、などがある。

(25)——絶対的余剰とは、農村が生産する食糧のうち自家消費分を除いた残りの生産物であり、社会的余剰とは農村に絶対的余剰がない場合でも権力によって社会的に作り出された余剰である。都市が存続の基礎としたのはこの社会的余剰であると考えられている。

(26)——石原潤は、河南省の登封市周辺、四川省成都市・西昌市周辺・綿陽市周辺の集市（定期市）の詳細な調査をおこなっている〔石原1998, 2000, 2001, 2002〕。西昌市を除けば、いずれの地域も漢族が人口の大半を占める。集市においては、農民、都市部の失業者、半失業人口が市営業に参加している。また周辺の農村部の農産物は、例えば河南省登封市の集市が示すように、トウモロコシ・コムギなど、限られた品種しか生産されない。そのため野菜などは、商人が都市の野菜卸問屋や、野菜を専門に生産する農家などから購入して、それを市で販売する。市の商人、周辺の農村と市の関係が、金平県の市の様相とは異なっていると考えられる。その違いが、生態的な環境の差異によるものかどうか、今後の検討課題としたい。

引用・参考文献

- 天野元之助 1940「現代支那の市集と廟会」『東亜学』2
天野元之助 1953『中国農業の諸問題（下）』技報堂
石原 潤 1987『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会
石原 潤 1998「登封市域における都市及び農村の集贸市场」『河南省登封市の市場経済化と地域変容』（石原潤・孫尚儉編）京都大学大学院文学研究科地理学教室
石原 潤 2000「成都市東南部郊外における集市—G. W. S. kinnerの調査地探訪—」『成都市とその近郊農村の変貌—成都市と近郊農村の変貌』（石原潤・傅綬寧・秋山元秀編）、京都大学大学院文学部研究科地理学教室
石原 潤 2001「綿陽市游仙地区農村部の集市」『内陸工業都市綿陽市と周辺農村の変容—内陸工業城市綿陽市と周辺農村の変容』（石原潤・傅綬寧・秋山元秀編）、京都大学大学院文学研究科地理学教室
石原 潤 2002「西昌市城都市部及び農村部の集市」『四川省西昌市の発展—少数民族地域の都市と農村—四川省西昌市的发展—少数民族区域的城市与农村』（石原潤・傅綬寧・秋山元秀編）、京都大学大学院文学研究科地理学教室
ウルフ、E（佐藤信行、黒田悦子訳）1972『現代文化人類学1 農民』鹿島研究所出版会
雲南省金平苗族瑶族傣族自治州志編纂委員会 1994『金平苗族瑶族傣族自治州志』三聯書店
市川光雄 1997「環境をめぐる生業経済と市場経済」『岩波講座文化人類学 第2巻 環境の人類史』岩波書店
今西錦司 1952『村と人間』新評論社
雲南省緑春県志編纂委員会 1991『緑春県志』雲南人民出版社
大津忠彦、常木見、西秋良宏 1997『西アジアの考古学』同成社
沖縄大学沖縄学生文化協会 1982「那覇市第一牧志公設市場調査報告」『郷土』20号、沖縄大学
加藤 繁 1936「清代に於ける村鎮の定期市」『東洋学報』23-2
黒田明伸 2003『貨幣システムの世界史—非対称性—をよむ—』岩波書店
湖中真哉 2002「生業牧畜と市場経済を結ぶ地域ネットワーク—ケニア中北部サンプルの家畜商の事例—」『講座生態人類学4 遊牧民の世界』京都大学学術出版会
サーリンズ、M 1984（山内昶訳）『石器時代の経済学』法政大学出版局
スキナー、G. W. 今井清一・中村哲夫・原田良雄訳 1979『中国農村の市場・社会構造』法律文化社
篠原 徹 1990『自然と民俗—心意のなかの動植物—』日本エディタースクール出版部法律文化社

-
- 中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編 1963『雲南省紅河哈尼族彝族自治州金平県苦聰人社会
經濟調査』出版不明
- 中村哲夫 1978「清末華北の農村市場」野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』二，東京大学出版会
- デュビイ他 1987『西欧中世における都市と農村』九州大学出版会
- 西谷 大 2005a「市のたつ街—交易からみた多民族の交流—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集，国立歴史
民俗博物館
- 西谷 大 2005b「雲南国境地帯の定期市—市の構造とその地域社会に与える影響—」『東洋文化研究所紀要』第147
冊
- 西谷 大 2006a「雲南国境地帯の棚田—アールー族とヤオ族の灌漑システム—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第
125集，国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006b「市はなぜたつのか—雲南国境地帯の定期市を事例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第
130集，国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006c「中国の水田漁撈—黒タイ族のウケ漁—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集，国立歴史民俗
博物館
- 西谷 大・篠原徹 2005「雲南省紅河県者米谷のアールー族とヤオ族の灌漑システム」『コモンズと生態史研究会報
告書』文部科学省科学研究費補助金特定領域“資源人類学”
- 藤田弘夫 1993『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするのか—』中公新書
- ポランニー，K 1980（玉野井芳郎・栗本慎一朗訳）『人間の経済Ⅰ』岩波書店
- 増井経夫 1941「広東の墟市」『東亞論叢』4
- マリノフスキー，B，デ・ラ・フェンテ，J 著（信岡奈生訳，黒田悦子解説）1987『市の人類学』平凡社
- 森本芳樹 2005『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店
- レッドフィールド，R（染谷臣道・宮本勝 共訳）1978『未開世界の変貌』みすず書房

（国立歴史民俗博物館研究部考古研究系）

（2006年5月31日受理，2006年10月27日審査終了）

The Birth of Markets and Urbanization : From Periodic Markets Based on a Peasant Economy to Markets Based on a Market Economy

NISHITANI Masaru

The aim of this paper is to identify the distinctive features of two groups of markets extracted from Jinping County in the Red River Hani and Yi Minorities Autonomous Region in China's Yunnan Province. These two groups of markets are referred to as the Zhemigu Group and the Jinping Group. Earlier observations on markets held in Jinping County every six days resulted in the formulation of six criteria for their establishment. These are ; 1) The selling for cash of surplus produce and the purchase of daily necessities ; 2) the limitations of travel on foot ; 3) the existence of a market network and the mediation of vendors ; 4) the capability to produce and process produce ; 5) food as commercial goods and the enjoyment of food ; and 6) the appropriate level of shops and number of people. The author also discusses the importance of the features of a market, such as "the creation of a number of products as a result of the gathering of small vendors and a variety of choices," "the freedom in processing produce and the emergence of the division of labor for making products as a result of the division of techniques and technologies", and "the enjoyment of the entertainment provided by markets".

However, when markets were classified according to region into the Zhemigu Group and the Jinping Group, the author found that the market system of the Zhemigu Group in Jinping County was largely one associated with a peasant economy and that to some extent the local inhabitants accommodated the markets and were able to use them proactively. In contrast, the market system of the Jinping Group was based on village and urban principles, traveling vendors controlled the movement of goods and the principle of the local farmers using the markets proactively no longer held sway. When the focus was placed on regional networks associated with trade in order to understand the dynamics of the regional economy, it was found that during the course of the birth of markets and the development of a market system, to a certain extent the periodic market, or market day, system worked to maintain a stable peasant economy within the community and worked to promote farmers' own strategies for their livelihoods. There is, therefore, a stage in which the periodic markets became embedded in the peasant economy. The author also discovered that at the stage where networks were formed between market systems from various regions, the nature of the markets changed whereby the periodic markets promoted a market economy.



写真1 那発の町を西からみる。正面が市街地で、左の建設中の建物がイミグレーション。川の向こう側がベトナム。



写真2 2003年11月の那発の東通。青果や雑貨を売る露店が一緒に出店している。



写真3 橋をわたってベトナム側からやってくるヤオ族。橋の中央が国境になる。那発



写真4 中国側のイミグレーション。那発



写真5 布を売る店が集中する。那発



写真6 農貿市場の肉売り場。那発



写真7 農貿市場での野菜売り場。那発



写真8 野菜を売るハニ族。那発



写真9 野菜を売るミャオ族。那発



写真10 野菜を売る漢族。那発



写真11 移動商人が経営する雑貨店。左がヴェトナムのハニ族。右が中国の紅頭ヤオ族。那発



写真12 雑貨店が販売するさまざまな商品。那発



写真13 移動商人が経営する衣料店。買っているのはミャオ族。那甯



写真14 人口およそ3万人の金平



写真15 通りに並ぶ商店。金平



写真16 市場入り口の食堂。金平



写真17 中央野菜市場。金平



写真18 南定期市場の移動商人通。金平



写真19 南定期市場の中央広場。金平



写真20 南定期市場の坂道通。金平



写真21 南定期市場の坂道通。籠を売るヤオ族。金平



写真22 南定期市場の坂道通。薬草を売るヤオ族。金平



写真23 南定期市場の中央広場。コメを売るハニ族。金平



写真24 南定期市場の坂道通。野菜を売るミャオ族。金平



写真25 南定期市場。野菜売り場。金平



写真26 南定期市場。木綿布を売るハニ族。金平



写真27 南定期市場。布を売るミャオ族。金平



写真28 南定期市場。野菜を売る漢族(在地)。金平



写真29 南定期市場へと向かう人の流れ。金平



写真30 中央野菜市場で大量に野菜を買う紅頭ヤオ族。金平